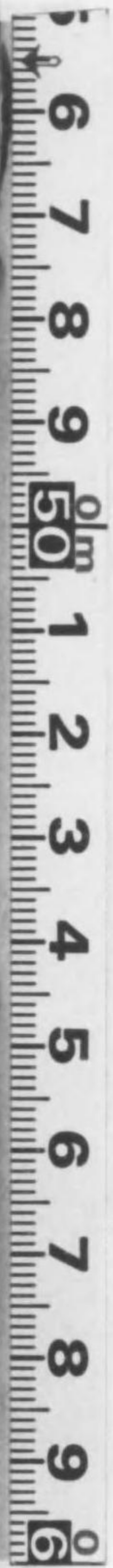


續國譯漢文大成

文學部 八十八

309  
65

秩  
入



始



# 續國譯漢文大成

吉岡待郎氏 寄贈本

文學部第八十八冊（第二十二帙の四）  
高青邱詩集四の四



高青邱集補遺



金檀の青邱詩集は、徐庸の大全集を主とし、槎軒集の刊本、竝に江館等、諸集の鈔本を得たるに因つて、増廣したのであるから、大體は、大全集と略ぼ同じ順序に排列し、増訂の分を各體の末に附載してある。そして、愈よ之を版に上せ、殆んど竣工しかつた頃、朱紹兄弟の刊行した明初三先生集を得た。三先生とは、高季迪・楊孟載・包師聖の三人であつて、この書は、青邱歿後、未だ遠からざる時分に於て刊行され、もとより考據に資することが出来る。そこで、これを精勘すると、新刊に載せないものが百餘首もあつたが、今さら、例の如く、各體の後に分載することも出来ず、仕方がないから、青邱高季迪先生遺詩として、第十八卷の後に附けたので、ここでは、便宜上、改めて高青邱集補遺と稱することにした。唯だ遺憾なのは、矢張、印刷上の都合でもあらう、金檀が碌碌ここに施注せざりしに因り、止むなく、予が親ら詮釋を試みた爲に、動もすれば、不十分を免れぬといふ一事である。

五言古詩

送葉卿海上尋姪

葉卿の海上に姪を尋ぬるを送る

我愛葉劍士，居然荆楚風。

われは愛す葉劍士，居然たり荆楚の風。

翩翩衣短褐，身事隴西公。

翩翩として短褐を衣，身は事ふ隴西公。

挾策別我行，輕裝事從戎。

策を挾んで我に別れて行き，輕裝して戎に従ふを事とす。

云有少年姪，音書千里通。

云ふ，少年の姪あり，音書千里に通すと。

遭亂家盡亡，一身陷軍中。

亂に遭うて，家，盡く亡び，一身，軍中に陷る。

獨往顧問之，海隅路莫窮。

獨り往いて，顧みて之を問はむとすれば，海隅，路窮ま

況當寒風起，馬首迷沙蓬。

況んや，寒風の起るに當つて，馬首，沙蓬に迷ふ。「りなし。

臨分欲有贈，自愧黃金空。

分るるに臨んで，贈るあらむと欲す，自ら愧づ黃金の空

時無武諤義，感激涕沾胸。

時に武諤の義なく，感激して，涕，胸を沾す。「しきを。

【字解】【一】葉劍士、この人は、劍を善くするから云つたのであらう。【二】居然、かたの如く、又依然たりといふ義。【三】荆楚、荆は楚の別稱、もと同國の字であるから通用したのである。【四】翩翩、身輕な貌。【五】短褐、短い故衣。【六】隴西公、多分、淮親に事へて簡介之と並び稱せられた丁仲容の事であらうと思ふ。【七】挾策、策は鞭。【八】海隅、東海の岸。【九】沙蓬、沙と蓬の根とが一度に風に捲き上げられる。【一〇】武諤、李白に贈武諤十七詩と題せる五古があつて、その序に「門人武諤は、論に深きものなり、實木沈悻、要難の風を慕ひ、潛に川海に釣し、世間の事に數數たらず。中原、難を作すと聞き、西より來つて余を訪ふ。余の愛子伯禽、魯に在り、將に胡兵を冒し、以て之を致さむとするを許す。酒酣にして感激し、策を授つて贈る」とある。

【題義】前に卷八に送葉卿東遊と題せる七古を載せ、その中に兵戈忽斷故鄉路、雖有兩足歸無緣、上書願雪父兄恥、畫地聚米籌山川の句あるより見れば、多分、同じ人であらうと思はれる。この詩は、葉卿が其姪を尋ねむが爲に、東海岸上の諸州に往くのを送つて作つたのである。

【詩意】葉劍士の人と爲りは、まことに敬愛すべく、形の如く荆楚游俠の風を存し、翩翩として身輕に、短い故衣を著し、今や隴西公の幕下に居て、その知遇を受けて居る。そこで、鞭を手にして、予に別れ、輕裝して、毎毎從軍した。その葉卿が云ふには、自分には、年なほ若き一人の姪があつて、從前は、千里の遠きを隔てて文通もあつたが、戰亂に遭うて、一家盡く亡び、その身は、亂軍中に陥つて、今では、消息も全く絶え果てて仕舞つた。そこで、これから、獨り出かけて、これを探ねやうと思ふが、海邊の路は窮まりなく、さしあたり、見當が付かぬから困ることである。なる程、その困難の非常なるは、言ふにも及ばず、まして、寒風地を捲いて起るに當つて、沙は蓬根と共に空中に上り、望眼、爲に迷ふ程である。ここに、手を分つに臨んで、何か贈り物を致さうと思ふが、われに、黄金の貯なきは、まことに恥ぢ入る次第。顧みれば、今の世には、武諤の如く義に勇むものなき

に、ここに君を見た處から、感激之餘、涙下つて胸の邊を濡すばかりである。

【餘論】起首六句は、葉卿の出身を敘し、云有少年姪の六句は、今次、姪を尋ねる所由を述べ、況當寒風起の六句は、送別の正意、武諤を黜出した處は、極めて切當である。

呈北郭諸友

北郭の諸友に呈す

弱齡驚名都。頗亦願高士。  
愚情與時乖。動見尤悔至。  
息駕旋舊廬。在途不復逝。  
窮居豈無儔。同好得三四。  
時來長松下。坐飲雜無次。  
杯觴既交揮。談諧亦稍恣。  
雖云過坦率。終然無機事。  
放浪林野際。吾志聊自肆。

弱齡、名都に驚せ、頗る亦た高士たらむことを願ふ。  
愚情、時と乖き、動もすれば、尤悔の至るを見る。  
駕を息うて舊廬に旋り、途に在つて復た逝かず。  
窮居、豈に儔なからむや、同好、三四を得たり。  
時に長松の下に來り、坐飲、雜にして次なし。  
杯觴、すでに交る揮ひ、談諧、亦た稍や恣にす。  
坦率に過ぐと云ふと雖も、終然、機事なし。  
林野の際に放浪し、吾が志、聊か自ら肆にす。

【字解】【一】弱齡、少壯の齡、二十歳前後。【二】驚、駭驚する、飛び躍る。【三】名都、蘇州を云ふ。【四】尤悔、尤は皆。失敗を云ふ。【五】息駕、車を休息させる。【六】在途不復逝、途中に在つて他方に行かぬ。つまり、一たび舊廬に歸らうとした上は、わざと目もふらずして、其方に急ぐといふ義。逝は悪い方へ往く意味に用ふる。【七】雜無次、雜然として順序がない。【八】既交揮、飲み終つて差し置く。【九】談諧、談話をして笑諷する。【一〇】坦率、坦然として眞率なること。【一一】終然、畢竟、結局と略ぼ同義。【一二】機事、機關多き世上の事故。

【題義】卷首の略傳中に述べた通り、青邱は、少壯の時、蘇州の北郭に居て、例の十友等と往來虚日なく、李志光の本傳に「交を定むるもの、王彝・楊基・杜寅・張憲・張羽・周砥・王行・宋克・徐賁の徒の如き、皆不羈の贖才、爽邁にして文あり、談辯華給、憫然として以て天下人なしと爲し、一時の武勇、多く之に下る」と記してある。この詩は、北郭に居る時、賦して、例の十友等に贈つたのである。

【詩意】予は、少壯にして、蘇州城中に馳騫し、頗る高士たらむことを希望して居たが、愚劣なる心遣は、兎角、今の時尚と齟齬して、事、志に協はず、動もすれば、失敗に繼ぐに後悔を以てし、どうも思ふ様に成らぬ處から、車を休まして、北郭の舊廬に歸らむとし、その途に在つては、わき目もふらず、セツセと大急ぎで遣つて來た。貧窮して隠れて居るのであるが、決して、朋友の無い譯でもなく、同好の士は、三四人もあつて、時とすると、長松の下に集まり、坐して酒を飲み、賓主雜然として次序なく、杯を飲み乾して下に差し置けば、談話に交ふるに笑諷を以てし、言ひたい事を言つて、少しも憚らず、坦然眞率に過ぐるといふものから、結局、機關多き浮世の事に關係せぬのは、まこと

に喜ばしい。かくの如く、林野の間に放浪して居て、わが志は、聊か自ら肆にすることが出来たので、これも、實は諸君の御蔭である。

【餘論】この詩は、明かに四句一解に成つて居て、第一解は、名都に在つて意を得ざること、第二解は、北郭に隱居して、却つて同好の士に遇ひしことを敘し、第三解は、會飲の逸興、第四解は收結である。

酬張員外宿省中東齋之作

張員外の省中東齋に宿するの作に酬ゆ

高閣度清晝。官閒休吏餘。高閣、清晝を度り、官は閒なり休吏の餘。

焚香閉華省。蕭爽似仙居。香を焚いて華省を閉ち、蕭爽、仙居に似たり。

謂名雖迹累。自欣煩想除。謂名、迹を累はすと雖も、自ら欣ぶ、煩想の除くを。

蟲響罷秋戶。月涼含夕渠。蟲は響いて秋戶に罷み、月は涼しくして夕渠を含む。

始悟喧中寂。詎必逃空虛。はじめて悟る喧中の寂、詎ぞ必ずしも空虛に逃れむ。

【字解】(一)高閣 中書省の役所を云ふ。(二)休吏餘 員外は定職なき故に云ふ。(三)華省 中書省を指す。(四)蕭爽 杜甫の詩に致身屬地何蕭爽とある。(五)謂名 謂は稱謂、名は名位。(六)煩想 煩はしき俗念。(七)夕渠 渠は溝渠、即ち遺り水。

【題義】張員外は名字不詳。省中は中書省であらう。この詩は、員外郎張某が中書省の東齋に當直して作つた詩を見せたから、取り敢へず、之に酬いたのである。

【詩意】高閣の中に在つて、靜かなる長き日を送り、もとより員外の事として、定職なきが故に、官は極めて閒である。やがて、當直すると、役所の戸を閉ち、ひとり東齋に居て、香を焚くと、心地蕭爽として、さながら、仙居に似た感じがする。元來 稱謂名位は、身跡の累となるものであるが、ここに居て、自然煩はしい俗念の除き去られるのは、まことに喜ばしい。夜になると、蟲の聲も、戸口に絶え、夕月は、涼しげに、遣り水に映つて見える。ここに至りて、はじめて喧中の寂こそ、愈よ趣があつて、何も必ずしも、空虛の別境に逃れずとも善いことを悟つたであらう。

【餘論】起四句は、宿直を正寫し、次の四句は、第四句より出でて、謂はゆる蕭爽の趣を詳説し、始悟の二句は、これを收束したのである。篇中、蟲響罷秋戶の句の如きは、到底、語を成さぬ嫌がある。

以倪隱君所畫林谷圖贈陳卿賦詩其上

倪隱君の畫くところの林谷の圖を以て、陳卿に贈り、詩を其上に賦す

葛花委寒露。初月澗東上。葛花、寒露に委ね、初月、澗東に上る。

煙鳥夕已棲。風泉秋更響。煙鳥、夕に已に棲み、風泉、秋、更に響く。

懷人念佳會。閱景存遙想。

人を懷うて佳會を念ひ、景を閱して遙想を存す。

持此贈陳君。高齋永延賞。

これを持して陳君に贈る、高齋、永く延賞せよ。

【題義】倪隱君、名は瓚、雲林と號し、前に數ば見えて居た。陳卿、名は則、前に卷三、春日懷三十友、詩の中にも見えて居る。この詩は、倪雲林の畫いた林谷の圖を陳則に贈るに就いて、賦して其上方に題したのである。賦詩其上は、一寸變な書き方で、普通ならば、賦の字を題に作るべき處である。

【詩意】真萼の花は、寒き白露に委し、細い新月は、東澗の上になし上つた。煙中の鳥は、すでに夕に時に入り、風を帯びた泉は、秋に乗じて、一しほ聲高く響いて居る。ここに、人を懷へば、前日の佳會を忘れ得ず、風景の畫を見ると、自然、浮世ばなれのした感想を生ずる。この畫は、まことに面白から、割愛して、わが陳君に贈呈するが、樓上の書齋に掛けて、末長く玩賞せられむことを希望する。

【餘論】前半四句は、畫中の景。以下、この畫を見たるに因つて人を懷ひ、因つて、これを陳君に贈るといふので、題畫の作といふよりも、贈畫に關しての感懷である。

送伯兄西行

伯兄の西行を送る

落日萬人哭。征行出關闈。

落日、萬人哭し、征行、關闈を出づ。

道路亦悲哀。而況骨肉親。

道路、亦た悲哀、しかも、況んや骨肉の親をや。

我生鮮兄弟。提挈惟二人。

わが生、兄弟鮮く、提挈、惟だ二人。

何辭一室歡。去作萬里身。

何ぞ一室の歡を辭して、去つて萬里の身と作る。

北風吹衣寒。方舟涉河津。

北風、衣を吹いて寒く、舟を方べて河津を涉る。

出處有常役。欲從愿無因。

出處、常役あり、從はむと欲するも、愿、因るなし。

豈不知當還。憂思自難伸。

豈に當に還るべきを知らざらむや、憂思、自ら伸べ難し。

惟期善保愛。馳緘慰情勤。

惟だ期す、善く保愛するを、緘を馳せて情勤を慰めむ。

【字解】(一)關闈、關は城上の重門、即ち物見。闈は城内の二重門。しかし、ここでは合せて唯だ城門と見れば善い。(二)提挈、扶け合ふ。(三)方舟、舟をならべる。(四)河津、河は黄河、津は渡し場。(五)出處、出ると居ると、進退に同じ。(六)愿無因、愿は願望の意、無因は所因なし、便なしといふ義。(七)保愛、身體を大切にすること。(八)馳緘、緘は封書、手紙を遣す。

【心】情勤、うれはしき辛勤。

【題義】青邱の兄は、名を咨といひ、淮張に官せしに因り、その滅亡後、配流されたので、卷六には送家兄西遷があつたし、卷七には夢鍾離兩兄があつたが、この詩も、矢張、同時の作に相違ない。



【詩意】夕日が沈みかかつて、景色うら寂しき頃、多くの人どもは、慟哭しつつ、征行せむが爲に城門を出て行く。尋常行路の見ず知らずの人に對してさへ、悲哀の情を催すのに、まして、骨肉の親ある我が兄に對しては、猶更の事である。わが生、不幸にして、兄弟少く、助け合ふのは、たつた二人、如何なれば、一室の樂しき團居を辭し、遠く去つて、萬里流涕の身となるのであるか。今しも、北風衣を吹いて寒き折から、舟をならべて、黄河の渡しを過ぎて行く、その旅中の艱苦は、蓋し想ふべしである。さはれ、出處進退、ともに一定の業務があるから、予は、兄に従つて行きたいと思ふものの、この願は、到底便なきことである。いづれ、その内に赦されて歸るといふことは、分かつて居るものの、憂思は、自然伸ばし難く、まことに、堪へられない。惟だ期するは、わが兄が身體を大切にするといふ事であつて、此方では、怠らず、手紙を出して、うればしき辛勤を慰めやうと思つて居ります。

【餘論】通篇、語意眞摯、中に萬斛の血涙を含んで居る。かういふ詩は、區區として文字の工拙を論ずべきものではなく、唯だ、大體、趣旨が通つて居れば、それで澤山であらうと思はれる。

送呂博士之北平・山東采訪遺事

呂博士の北平・山東に之いて遺事を采訪するを送る

有詔纂前史。徵儒起巖阿。願予豈其才。亦來預編摩。勝國社已結。遺書歎無多。忍令百年間。忠邪半湮磨。君今使燕齊。往事煩蒐羅。會看得萬編。歸獻載以馱。傳聞貴有徵。論議期無頗。諸公執筆候。去矣毋蹉跎。

詔あり、前史を纂し、儒を徵して巖阿より起す。願るに、予、豈に其才ならむや、亦た來つて編摩に預る。勝國社、すでに結び、遺書、多きなきを歎す。百年の間、忠邪をして半ば湮磨せしむるに忍びむや。君、今、燕齊に使す、往事、蒐羅を煩はす。會す萬編を得るを看む、歸り獻じ、載するに馱を以てす。傳聞、徵あるを貴び、論議、頗なきを期せよ。諸公、筆を執つて候す、去れ、蹉跎たる母れ。

【字解】【一】有詔纂前史。洪武二年二月、詔して、元史を修せしめしことを云ふ。【二】巖阿。阿は遼の嶺。【三】編摩。編輯に同じ。【四】勝國。亡國の嶺。人の國を亡ぼして勝つこと。故に、周は殷を稱して勝國といふ。乘煇賦に「秦漢、のかたは、多く前代の驛りを受くと云ふによりて、その辭も見えず。明の代になりて、胡元を攘んで天下を取りたる故か、明人の文字に多く勝國と云ふ。みだりには、言ふまじきや」とある。【五】社已結。社は土地の神、結は閉さす。土地の神の社を閉鎖する。左傳に「國に勝つものは、その社を絶ち、その土地を有するなり」とあり、公羊傳に「勝國の社、その上を布して、その下に棲す」とある。【六】會。渾磨して磨滅する。【七】蒐羅。蒐は、春の狩獵。羅は、網で鳥獸を捕獲する。探がし出して集める。【八】會。必ずと訓すべし。李白の詩に「若非三羣玉山頭見、會向瑤臺月下、逢の會に同じ。【九】馱以馱。馱は馬の背に荷を負はすこと。東坡の詩に「疲馬解」



後秋とある。秋は秋の俗字。【一〇】貴有微 微は證據。【一一】期無煩 煩は偏煩。【一二】執筆候 候は待ち構へて居る。【一三】愚圖愚圖するといふ體。

【題義】呂博士の名字は不詳。北平は、後の北京。この詩は、史館の一員たる博士呂某が、遺聞を采訪する爲に、北京・山東に出張するを送つたのである。

【詩意】今上即位の初、詔を下して、元史を編纂することにあり、儒士を徵して、嚴阿より起たしめた。願るに、予は、到底その才では無いが、又召に應じ、南京に来て編修に參與することになつた。元は、全く打勝れた前代である處から、土地の神の廟宇さへ閉鎖された位、残念ながら、文獻の残つて居るものもなく、百年間に於ける忠邪の人人をして、半ば溷晦磨滅せしむるに忍びず、そこで、精骨を折つて史料を集めなければならぬ。今、君は、北京・山東に出張して、御苦勞ながら、往事を探がして集められるとのことで、必ず萬編の多きを得、歸り獻する時には、馬に載せて持つて來られることと思はれる。さはれ、傳聞は、證據あるを貴び、議論は、公平にして偏頗なきを旨とすべきことを、一寸、御注意致して置く。何は免もあれ、史官の諸公が、筆を執つた儘、待つて居られるから、早速、御出かけの事、然るべく、決して、愚圖愚圖して居てはならぬ。

【餘論】前半八句、元史編修の開始より、その史料の缺乏に道及し、後半八句は、呂博士の斯行に就いて囑望したので、傳聞貴有微、論議期無煩の十字は、修史の要諦である。

夢楊二禮曹

楊二禮曹を夢む

今夕復何夕。夢我平生友。

今夕復た何の夕ぞ、我が平生の友を夢む。

握手無所言。但道別離久。

手を握つて、言ふところなく、但だ道ふ、別離久しと。

覺來聞秋蟲。空堂竟何有。

覺め來つて、秋蟲を聞く、空堂、竟に何かある。

不知千里途。君魂果來否。

知らず、千里の途、君の魂、果して來るや否や。

當年亦如夢。聚散一回首。

當年、亦た夢の如く、聚散、一たび首を回らす。

起坐與誰親。鐘鳴月穿牖。

起坐、誰と親まむ、鐘鳴つて、月、牖を穿つ。

【字解】【一】今夕復何夕 詩の唐風調に調東東調、三星在天、今夕何夕、見此良人、子兮子兮、如三此良人、何とある。

【題義】楊二の二は排行、禮曹は禮部の屬官。これは、楊基が禮部の屬官として南京に居り、青邱は、すでに翰林を辭して歸國した後の事であらうと思ふが、ある夜、夢に其人を見たるに因り、賦して、これに寄懷したのである。

【詩意】今夜は、何といふ夜であるか、我が平生睦しい親友を夢に見た。手を握つても、外に言ふことはなく、唯だ一別以來、お久しいといつたばかり。やがて、夢覺めて、秋の蟲のすだくを聞き、空

堂の中、何も物はない。千里の遠き路を隔てたるに、君の魂は、果して來つて我が夢に入つたのであるか。むかしの事を顧ると、矢張夢の如く、聚散離合、ただ首を回らして追憶する外はない。やがて、起きて坐つたが、誰と親むでもなく、その内に、鐘の聲、わびしげに鳴り、月は悄然として窓にさし入つた。

【餘論】起四句は夢、次の四句は夢後、終の四句は當年を追憶し、且つ收結したのである。

七言古詩

送陳卿游海上 陳卿の海上に遊ぶを送る

城雞一聲霜白屋。城雞一聲、霜、屋に白し、  
行人爭途車折軸。行人、途を争うて、車、軸を折る。  
此時念子亦何求。この時、念ふ子が亦た何をか求むる、  
早起匆匆戒童僕。早起、匆匆、童僕を戒む。  
東西南北一束書。東西南北、一束の書、  
亂離借問誰安居。亂離、借問す、誰か安居する。

【字解】【一】戒童僕。出發を下都等に命ずる。【二】善仲連。史記列傳に詳しく、ここには、殘らず引くことが出來ぬから、極めて簡略に述べて置く。「善仲連は齊人、奇偉個體の策策を好み、背て仕官して職に任ぜず。趙に遊ぶ。會ま、秦、邯鄲を圍み、魏、新垣衍を趙に遣し、平原君に勸めて秦を帝とし、以て其

塵中相逢少相識。塵中相逢うて、相識少く、  
子宜貧賤吾何如。子は貧賤に宜しきも、吾は何如。  
別腸欲浣惟杯酒。別腸、浣はむと欲す、惟だ杯酒、  
數葉風殘店門柳。數葉、風は殘す店門の柳。  
海上須尋魯仲連。海上、須らく尋ぬべし魯仲連、  
莫爲商賈爲神仙。商賈と爲る莫れ、神仙と爲れ。

て善仲連の善を爲す。善仲連、これを却け、遂に平原君に辭して去り、終身、復た見えず」とある。

【題義】陳卿は、前にもあつたが、陳則といつて、北郭十友の一。この詩は、陳則の東海岸地方に遊ぶを送つたのである。

【詩意】城中の雞、一聲鳴いて、曉を報じ、霜は屋根に白き時しも、旅客どもは、吾先きにと途を争ひ、車が衝突して、軸を折ることがある。この時、君は何を求むるとしもなく、早く起きて、下部どもに出發を命ぜられることと思ふ。これまで、君は、東西南北、各地に流浪して、唯だ一束の書を攜ふるのみ、刻下亂離の日に際して、何人が安居するか、飄游して活を爲すは、誰しも同じ事である。風塵の中、多くの人には逢ふが、相識の者は少く、決して、助けには成らない。君は、貧賤に慣れて、窮

苦を何とも思はず、とても吾等の及ぶところではない。ここに、別腸を浣はうとすれば、唯だ杯酒あるのみ。折から、店門の前には、西風吹きすさんで、柳の葉數片、はらはらと飛び散つて、流石に物悲しげな景色である。君よ、海邊に遊ぶならば、古しへの魯仲連の如き個儻奇偉の士を尋ねべく、且つ又、商賈とならず、處から藥を東海中に采つて、神仙となることを心がけられたらば宜からう。

【餘論】起四句は陳則の發程。次の四句は其境涯。終の四句は送別の正意、就中、結二句は、之に屬望したのである。篇中、此時念子の如き、亂離借問の如き、子宜貧賤の如き、どうも、句句圓熟しない傾向が見えるのは遺憾である。

送張明府

張明府を送る

吳下聞名未會識。吳下、名を聞いて、未だ曾て識らず、不意相逢在京國。意はざりき、相逢ふ、京國に在らむとは。青衫烏帽小紅鞵。青衫烏帽、小紅鞵、踏過天街看春色。天街を踏過して春色を看る。奉詔同修舊史成。詔を奉じ、同じく舊史を修して成る、

【字解】【一】吳下、吳中と同じ、蘇州を中心として一帶の地域は、古しへの吳地なるが故に云ふ。【二】京國、帝都、即ち南京。【三】小紅鞵、鞵は靴に同じ、皮帶。燕翼貽謀錄に「舊制、中書會人・諫議大夫・權侍郎、並に黑帶を服し、金魚を佩

明光表進喜連名。明光表進、喜んで名を連ぬ。

校書愧我西清住。校書、愧づ我が西清に住まるを、

出宰憐君北地行。出宰、憐む君が北地に行くを。

秋風此日吹江柳。秋風、この日、江柳を吹き、

我尚朱顏君白首。我は尚ほ朱顏、君は白首。

別離何處可傷情。別離、何の處か情を傷ましむべけむや、

幕府門前一杯酒。幕府門前、一杯の酒。

光。韓愈の時に即今天子急賢良、歷兩朝出開三明光とあつて、漢唐を通じて天子常御の宮殿と見える。【六】西清、宮中に在る清く靜かな西方の廂、即ち小座敷。明清の際には、翰林學士の詰所に成つて居た。【七】出宰、中央政府より出でて地方官となる。【八】幕府、大將軍の本營。

【題義】明府は、地方長官の尊稱。詩で見ると、この張某は吳人で、青邱と同じく元史を修するに與り、その業畢ると、北方の地方官となつたといふこと。然るに、青邱と同時に元史を修する爲に徵されしものは三十二人、天界看月の時には十八人といつて居るが、明史藝文傳に據ると十六人。鮑頌、張適の二人は、編修の濟むまで史局に居らずして、早く轉任したものと見える。この張適は、長洲の

人であるが、青邱と素交に屬し、且つ洪武の初、工部郎中に擢んでられ、病んで免せられしが、復た明經を以て薦められて、廣西布政理問を授けられた人で、詩中言ふところと符合せぬから、斷じて其人ではない。すると、天界看月十六人の中なる張文海といふ人が、てつきり其人だらうと思はれるが、この人は、他書に全く見えぬから、その字、郷貫、竝に閱歷等は遺憾ながら全く考へることが出来ない。

【詩意】むかし、吳中に在りし時、君の名を聞いたが、未だ面を識るに及ばず、ここ、帝都に於て御目にかかつたのは、まことに豫想外であつた。君は、青衫を著け、烏帽を戴き、細い赤皮の帯を結び、意氣揚揚と都大路を踏み轟かして、花柳をこき交せた春の景色を看られた。次いで、詔を奉じて、予と一處に元史を編修し、やがて脱稿すると、明光宮に上表して稿本を進め、二人ともに名を連ねたことを喜んだ。その後、予は翰林に官し、西清の詰所に出仕して、専ら校書の任に當ることとなり、君は、御苦勞ながら、地方長官となつて、北地に赴任されることとなつた。今日しも、秋風颯颯として江上の柳を吹き、予は朱顔なれども、君は白髪頭で、ここに別を爲すに際し、徒に情を傷ましむるも本意でないから、大將軍の營前に設けられたる祖道の席上、快く一杯を傾け、それで、愈よ手を分つことと致さう。

【餘論】起四句は、京國に於て初めて明府に遇へることを回想し、次の四句は、二人の離合に及び、

終の四句は、送別の正意である。

貴游行

貴游行

曲江風日宜春衣。

曲江の風日、春衣に宜しく、

馬逐輕燕參差飛。

馬は輕燕を逐うて、參差として飛ぶ。

少居威里貪游劇。

少にして、威里に居て游劇を貪り、

不作新豐上書客。

作らず、新豐上書の客。

玉鞭拂散楊花雲。

玉鞭、拂ひ散す楊花の雲、

醉眼眩春迷纈文。

醉眼、春に眩して、纈文に迷ふ。

賭裘贏得牛心炙。

裘を賭して、贏ち得たり牛心の炙、

歸臥畫堂明月夜。

歸つて臥す、畫堂明月の夜。

歸を召して美人となし、誓を以て中涓となし、その家を長安中の威里に徙す。婦、美人たるを以ての故なり」とあつて、その注に「上に於て頗威あるものは、皆これに居る、故に其里を名づけて威里となす」とある。【一】游劇、劇は戯るること。【二】新豐上書客、馬周をいふ、前に卷十七、馬周見太宗二圖の題下に詳しく注して置いた。【三】纈文、纈は眼のかすむこと、孫觀の詩に「眼纈紅絲」

【字解】(一)曲江、池の名、長

安郭外の名勝。一統志に「曲江池は、西安府の東南、一十里に在り。漢の武帝の鑿つところ、その水曲折、因つて名づく」とあり、劇談錄に「曲江池は、開元中、破鑿して妙境となる。花卉周環、煙水明鏡、都人游玩、中和節に盛なり。江側、菰蒲葱翠、柳陰四合、碧波紅蕖、湛然として愛すべし」とある。(二)威里、前に見ゆ。天子の外戚、即ち后妃の家を云ふ。史記萬石君傳に「高祖、その

とある。【六】西姿 著て居る皮ころもな賄物にする。【七】牛心炙 牛の心臓を炙りたるもの。晉書王濟傳に「王愷、牛あり、八百里駁と名づく。濟、請ふに錢千萬を以てし、ともに對射して之を賭す。愷、濟をして先づ射らしむ、一發しての破る、因つて、胡牀に據り、左右を叱して、遂に牛心を探つて來らしめ、一割、便ち去る」とあり、孫觀の詩に萬里功名飛燕額、千金博飲炙牛心とある。

【題義】 貴游行は、青邱が新に創出した樂府題と見え、主として、唐代豪貴少年嬉游の狀を詠出したのである。

【詩意】 曲江池畔、風日正に暖にして、春衣を著くるに宜しく、乗れる馬は、勢よく、輕げな燕を逐ひ、これと參差として、飛ぶ様に見える。この人は、年少の頃より戚里に居て、遊戯にのみ耽り、新豊に宿を取つた馬周の如く、上書して天子の聖聽を動かすことを爲さなかつた。その玉鞭を揮ふに當つては、雲の如き楊花を拂ひ散らし、折から、春の錦、眩きばかりで、醉眼に之を見ると、あらゆる物が霞んで文を爲す様である。そこで、千金の裘を賭け物に出し、見事に打勝つて、牛心の炙を食ふを得、家に歸れば、夜、畫堂の明月に打臥して居る。

【餘論】 通篇、唯だ少年の豪興を寫すのみで、何等の諷意もない處は、却つて、さッぱりして居る。

長短句

送趙司令

趙司令を送る

鹽煙青、鹽地白。

鹽煙青く、鹽地白し、

野雞亂飛鳴磔磔。

野雞亂飛して鳴いて磔磔。

荒蹊三日除草萊。

荒蹊三日、草萊を除き、

場吏近報新官來。

場吏近く報ず、新官の來るを。

新官來、煎勿急。

新官來る、煎すること急なる勿れ、

飢寒夜夜亭民泣。

飢寒夜夜亭民泣く。

販鹽金多買名娼。

鹽を販する金多く、名娼を買ふ、

如何得似揚州商。

如何か、似るを得む揚州の商。

【字解】 【一】鹽地 鹽井の所在

地。【二】磔磔 けたたましき聲。

【三】荒蹊 荒れはてた小徑。【四】

場吏 市場の小吏。【五】亭民 亭

は驛亭。【六】販鹽 鹽の仲買をする

る。【七】揚州商 蜀中には、自流

井(地名)を中心として、鹽井が多く、

そこで鹽を煮ると、舟に積んで、江

を下る。そして、揚州が陸揚の船つ

きに成つて居るから、ここには、鹽

の仲買をする商人が多い。

【題義】 司令は、多分、收稅官であらう。この詩は、司令趙某の井鹽の產地たる蜀中に赴くを送つたのである。

【詩意】 鹽を煮る煙は青く、鹽井附近の地は白く、野に放し飼にしてある雞は、亂れ飛んで、けたたましい聲をして鳴いて居る。磔磔人も通らぬ荒れた細道の草を、三日もかかつて取り去り、市場の小吏は、遠からず、新に任官された司令が來著されるといつて、これを迎へる準備に忙殺されて居る。

君は、即ち新官として其地に赴かれるが、著任の後には、煎り付く様に、餘り厳しくしないが善いので、驛亭の人民どもは、夜夜、飢寒に泣いて居る。彼等は、骨を折つて鹽を煮たところで、自分の利益になることは極めて少く、實は、仲買の者の囊中を肥やすに過ぎぬ。見よ、揚州の商人どもは、これに由つて、大金をまうけ、名娼を買つて、游興を恣にして居るので、亭民どもは、如何にして之に似ることを得べき。まことに、見じめなものであるから、心を用ひて、勞はつて遣らねばならぬ。

【餘論】この詩は、鹽の仲買の専恣を寫し出し、延いては、鹽政の不完全に道及したので、含蓄の深い處が特色である。

五言律詩

郊墅雜賦

郊墅雜賦

移家非遠謫、幽處似愚溪。

家を移す、遠謫に非ず、幽處、愚溪に似たり。

窈窕花兼竹、縱橫水帶畦。

窈窕たり花と竹と、縱橫に、水、畦を帶ぶ。

窓明蠶箔暖、屋小燕巢低。

窓は明かにして蠶箔暖に、屋は小にして燕巢低し。

有客如尋我、龜蒙舊宅西。

客あり、もし我を尋ねれば、龜蒙舊宅の西。

【字解】「愚溪」永州に在る。柳宗元の愚溪詩の序に「灌水の陽、溪あり、東流して灌水に入る。或は曰く、冉氏、かつて居り、故にこの溪に姓して冉溪となす。或は曰く、以て踰むべきなり、これに名づくるに其能を以てす、故に之を愚溪といふと。余、愚を以て罪に觸れ、灌水の上に謫せらる。この溪を愛して入ること二三里、その尤絶なるものを得て家す。古しへ、愚公谷あり、今、予、この溪に家し、しかも、名、定まるなし、士の居るもの、猶ほ斷然たり、以て更めざるべからざるなり、故に之を更めて愚溪となす」とある。その詩は、謂はゆる八愚詩で、愚溪・愚丘・愚泉・愚池・愚堂・愚亭・愚島の八勝を分詠したものであるが、今佚して集中には見えない。しかし、愚溪關係の詩は、別に數首あるので、夏初雨後等三愚溪には、悠悠雨初晴、獨繞清溪曲、引杖試穿泉、解帶圍新竹、沈吟亦何事、寂寞因所欲、幸此息營營、嘯吹靜三夷、僕一といひ、冉溪(愚溪の舊名)には、少時曠力希、公侯、許、國不復爲、身謀一風波、一跌逝萬里、壯心及解空、縲囚終老無餘事、願卜湘西冉溪地、却學嵇康與敬侯、種、漆、南園待成器とある。【二】窈窕、奥深く繁茂して居る貌。【三】帶畦、帯は繞るの畦。【四】蠶箔、竹で造つた簾の如きもの、其上で蠶を飼ふ。【五】龜蒙、即ち陸龜蒙、前に卷三、詠三隱逸二十六首の中に見えて居る。【六】舊宅西、前に卷十三、喧嘩里の題下に注した通り、青邱の宅は、陸龜蒙が元と住んで居た喧嘩里の西に在るので、その詩に聞説橋東地、高人舊隱居とある。

【題義】郊墅雜賦といふ此題は、前に卷三に連作十六首あつたが、ここに在る二首も、定めて、同時の者であつて、三先生集には、多分全篇十八首として入れてあると思はれる。しかし、その後、作者は、自ら此二首を刪つて、本集に入れて置いたのであらう。

【詩意】家を郭外に移したが、もとより、遠謫された譯でもなく、その風光の幽邃な處は、柳宗元の謂はゆる愚溪も、かくやと思ふばかり。こんもりと奥深きは、花竹が交錯して居るのであるし、縦横に流れる野水は、畦を繞つて居る。窓は明かるくして、蠶の箔も暖かさうであるし、家は小さくし

て、燕の巢も低い處に在る。客、もし來つて我を訪はむと欲せば、古しへの陸龜蒙の住宅の西といつて尋ねれば、すぐに分かる。

【餘論】本集の例に據つて、以下、近體の部は、特殊の場合以外、毎首に愚評を記することを見合せの積り、實は其煩に堪へず、そして、讀者にも、格別の益が無いと思ふからである。

借宅傍東圻。閒尋舊釣磯。宅を借りて東圻に傍ひ、閒に尋ぬ舊釣磯。一るるを諱む。

雨朝楊柳暗。風午稻花稀。雨、朝にして楊柳暗く、風、午にして稻花稀なり。

偶遁羞稱隱。初來諱問歸。偶ま遁れて隠と稱するを羞ぢ、初めて來つて歸るを問は

儒冠恐驚俗。學製野人衣。儒冠、俗を驚かさむことを恐る、製するを學ぶ野人の衣。

【字解】【一】東圻、圻は界、村の東界。【二】偶遁、偶然に世を遁れる。

【詩意】村の東境に近い處に、借家住居をなし、閒暇な時は、むかしの釣場所に出かける。雨そぼふる朝、柳の影ほの暗く、風は眞晝に吹いて、稻の花は、まだ稀である。偶然、世を遁れて此に來たのであるから、隠者と稱せらるるを羞ぢ、やつと來たばかりで、何時城中に歸られるといつて問はれることを嫌ふ次第。儒冠は、如何にも物物しく、衆俗を驚かさす虞がある處から、人並に百姓の著物を

造らしめやうと思つて居る。

次楊孟載雨中池館

楊孟載の雨中池館に次す

牆陰過綠枝。池影散清漪。牆陰、綠枝を過ごし、池影、清漪を散す。

有雨萍生遍。無風絮下遲。雨あつて萍生すること遍く、風なくして絮下ること遅し。

蜜成蜂戶閉。泥落燕巢敲。蜜成つて蜂戸閉ぢ、泥落ちて燕巢敲つ。

君病知多日。牀琴盡網絲。君の病、知る日多く、牀琴盡く網絲。

【字解】【一】過綠枝、過は延びて此方より彼方へ渡すといふ義。【二】池影、池光といふに同じ。【三】泥落、折角塗つた新泥が乾かずに崩れ落ちる。【四】牀琴、牀と其上に在る琴。【五】網絲、蜘蛛の巢。

【題義】楊孟載は、即ち楊基。この詩は、楊基の雨中池館の作に次韻したので、眉菴集を見たら、楊基の原作が有るかも知れぬが、生憎、手元に其書がないから、檢査することの出來ぬを遺憾とする。

【詩意】頃しも、春の暮、牆の陰には、新しい緑の枝が伸びて掛け渡され、池光瑩然として、清い漣波が紋を畫いて居る。雨の爲に、浮草が池に一ぱい生じ、風なき爲に、楊花は、徐に散り敷く。蜜、すでに成つて、蜂は巢の穴を閉ぢ、泥が固まらずして崩れ落ちた爲に、燕の巢は傾いて仕舞つた。お

もふに、君は、久しく病に臥して居られるから、牀上の琴までが、牀と一處に蜘蛛の絲にからめられて居るであらう。

夜過江上

夜、江上を過ぐ

江白露初零、荷花夜滿汀。江白くして、露、初めて零ち、荷花、夜、汀に滿つ。

鷺迷沙上月、螢亂水中星。鷺は迷ふ沙上の月、螢は亂る水中の星。

旅色隨程見、漁歌帶夢聽。旅色、程に隨つて見はれ、漁歌、夢を帯びて聽こゆ。

何當從此路、乘興入滄溟。何ぞ當に此路よりし、興に乗じて滄溟に入るべき。

【字解】【一】旅色、旅路の景色。【二】隨程、行程の進むに隨つてといふ義。【三】滄溟、大海。

【題義】説明に及ばぬ。但し、作者は、歩行して居るのであらう。

【詩意】一江はの白く煙つて、露は初めて零ち、蓮の花が汀に近く咲いて居るのが、夜でも明かに見える。鷺は白いから、沙上に映る月光の中に在つては、有無の程も分からず、螢は、亂れ飛んで、水に涵された星と混同されさうである。旅路の景色は、行程の進むに隨つて顯はれ來り、漁歌は、さながら夢を帯びたる如く、かすかに遠く聽こえる。出來るならば、この路より立ち去り、興に乗じて、

東海の中に往きたいと思ふが、それは、六つかしいことであらう。

觀鷺

鷺を觀る

交睡春塘暖、蘋香日欲曛。交も睡つて春塘暖かに、蘋香、日曛せむと欲す。

嫩憐黃似酒、淨愛白於雲。嫩は憐む、黃、酒に似たるを、淨は愛す、雲よりも白きを。

擊亂思常侍、籠歸憶右軍。擊ち亂して常侍を思ひ、籠し歸つて右軍を憶ふ。

滄波堪遠泛、莫入野鳧羣。滄波、遠く泛ぶに堪へたり、野鳧の羣に入る莫れ。

【字解】【一】交睡、かはるがはる睡る。【二】春塘、塘は隄が本義であるが、堤で圍まれた水をも指す。【三】欲曛、暮れかか  
る。【四】嫩、若若しいこと、みづみづしいこと。【五】黃似酒、杜甫の詩に「黃兒黃似酒、對酒愛新鷺」とある。【六】淨、さつ  
ぱりしたること。【七】白於雲、杜甫の詩に「房相池頭鷺一羣、眠沙泛浦白於雲」とある。【八】擊亂、擊ち亂す、唐書李愬傳に「蔡  
州に入つて、吳元濟を取る。夜半、雪甚し。城旁皆置鴨池、愬、これを擊つて軍聲を亂さしむ」とある。【九】常侍、君側に奉仕す  
る用人。李愬は後に中書門下平章事に任ぜしが故に云ふ。唐書李愬傳に「常侍は、漢時宦官の名。後、遂に沿習して士人の官制となる。  
唐の高適を高常侍と稱し、李愬を李常侍と稱するが如き、是れなり」とある。【一〇】籠歸憶右軍、王羲之が道士の爲に道徳經を寫し、  
その例つて居る鷺を買ひ受け、籠のまま持ち歸つたといふことで、前に卷十五、王七兩仙興の詩中に注して置いた。【一一】滄波、滄  
海の波。【一二】野鳧、野生の小鴨。



【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】多くの鶯鳥どもは、春塘の暖い處に居て、かはるがはる睡り、蘋花香ばしき中に、日は暮れむとして居る。その鶯の若若しくして可憐なるは、孵化したばかりで、羽の色の黄なること、酒の如く、その長じたるものは、毛色純潔、雪よりも白く、殊に愛すべきを覺える。むかし、李常侍は、鶯の集まれる池を撃つて軍聲を亂し、そして、蔡州城を乗つ取つたといふし、王羲之は、道徳經を寫し、その報酬として、道士から貰つた鶯を籠に入れた儘、大喜びで持ち歸つたといふ話がある。鶯は、大海の波にも泛ぶことが出来さうであるから、折角、自重して、野生の小鳥の羣などに入らぬが善からう。

同傳著謝徽夜過句容尋袁丞不值宿圓明十八院

傳著・謝徽と同じく、夜、句容を過ぎ、袁丞を尋ねて値はず、圓明十八院に宿す

不遇松廳客山城誰與親 松廳の客に遇はず、山城、誰か與に親まむ。

尋投十八院寄宿兩三人 尋ねて投す十八院、寄宿す兩三人。

澗石支牀穩松風漏燭頻 澗石、牀を支へて穩、松風、燭を漏らすこと頻りなり。

依禪嗟暫寂明日又京塵 禪に依つて暫寂を嗟す、明日又京塵。

【字解】(一) 松廳 縣令の官舎。前に卷十八、送李季丞之歸安の詩中に引いたが、韓愈の舊田縣丞廳壁記に「新立、痛く掃蕩し、二松を對樹して、日に其間に題す」とある。(二) 漏燭 燭火を吹き消しさうにする。(三) 依禪 坐禪の眞似をする。

【題義】傳著は、青邱と一處に元史の編修に與つた人で、列朝詩集に「長州の人、字は側明、文名あり、洪武の初、召されて元史を修し、史成るや、歸つて常熟教諭となり、後、潞州知州に遷る、味梅集あり」と見えて居る。謝徽も、青邱と一處に元史編修に與り、又同時に翰林の職を辭して歸郷した人で、前に卷七、酬謝翰林留別の題下に詳しく注して置いた。句容は、南京附近の縣名。句曲山に依つて知られて居るので、前に卷五、送蕭隱君自句容經吳歸維揚の題下に注して置いたが、一統志に「句容縣東南の山、形、句の字の如く、初め句曲山と名づく。後、茅君、道を此に得たるに因つて、茅山と名づく。道書第八洞天、第八福地たり。山に三峰あり、三茅君、各一峰を占む、これを三茅峰といふ」とある。袁丞は縣丞袁某、その名字は不詳。圓明十八院も、注を缺いて居るから、よくは分からねぬが、句曲山に在ることは、勿論である。この詩は、青邱の南京滞在中、傳著・謝徽の二人と共に、夜、句容縣を過ぎ、縣丞袁某を尋ねた處が遇はず、止むを得ず、句曲山中の圓明十八院に投宿して作つたのである。

【詩意】松を廳前に植ゑて、日夕吟哦する風流の縣丞に遇はず、この山手の寂しい縣城に於ては、外

に親むべきものなく、止むを得ず、兩三人、一處に、十八院に投宿した。院中に於ては、潤邊の石が穩に臥牀を支へ、松風は、數ば燭火を吹き消しさうにし、全く浮世ばなれのした光景である。ここに在つて、坐禪の眞似を爲し、しばらく閑寂の境に入つたのは、嬉しいが、明日は、又南京に歸つて、風塵の中に落つることと思ふと、短い今宵が、心から惜まれる次第である。

【餘論】詩中、松の字が複出して居る。

周隱君歸東臯視田宿江上有詩見示因次其韻

周隱君、東臯に歸りて田を視、江上に宿し、詩あり、示さる。因つて其韻に次す

孤棹隱廻汀。潮來夜自鳴。

孤棹、廻汀に隱れ、潮、來つて夜自ら鳴る。

壯年身獨賤。初客夢多驚。

壯年、身、ひとり賤しく、初客、夢、多く驚く。

曉枕看星起。春犁待雨耕。

曉枕、星を見て起き、春犁、雨を待つて耕す。

有田吾亦去。何意在州城。

田あり、吾、亦た去らむ、何ぞ意はむ、州城に在らむとは。

【字解】「一」孤棹、孤舟といふに同じ。「二」廻汀、曲つた汀岸、即ち入り江。「三」初客、初めて旅をした人。

【題義】周隱君は名字不詳、東臯の字は、前に數ば見えたが、もとより地名ではなく、ここのは、蘇

州の東の城外であらう。視田とは、小作人に作らせて置く田を検分すること。この詩は、隱士周某が城東に歸つて、その所有の田地を検分し、因つて、江上の舟に一宿した時、詩を作つたといつて見せられたから、取り敢へず次韻したのである。

【詩意】孤舟は、入り江の中に隠れたが、夜中に潮がさして來ると、自然鳴り響く。君は、壯年でありながら、仕官せずして、身の獨り賤しきに甘んじ、初めて旅をしたので、夢は、頻りに驚いて、碌碌眠られなかつたであらう。そこで、曉早く枕上に星を見て起き上り、所有の田は、雨を待つて後、犁を入れて耕すことに決められた。予も亦た聊かながら田地を持つて居るから、去つて其地に落ち付ければ善いので、この蘇州城の風塵の只中に愚圖愚圖して居るのは、まことに、豫想外の事である。

答周著作暫歸鴻山留別

周著作の暫く鴻山に歸らむとして、留別するに答ふ

當年鸞春地。亂後幾人歸。

當年、春を鸞ぐの地、亂後、幾人か歸る。

白髮凌新句。青山識故衣。

白髮、新句を凌ぎ、青山、故衣を識る。

聽雞臨水驛。防虎閉巖扉。

雞を聞いて水驛に臨み、虎を防いで巖扉を閉す。

未用多惆悵。知君只暫違。

未だ用ひず、多く惆悵するを、知る、君が只だ暫く違ふを。

【字解】(一) 雲春 貫春をして人に雇はれる。

【題義】 説明に及ばぬ。但し、著作は官名。周某の名字竝に鴻山の所在地等は不詳。

【詩意】 むかし、君が貫春をして随分苦勞した地は、亂後荒廢して、歸り來るものは、幾人あらうか。君は、白髪頭に成られたが、意氣は新詩を凌ぎ、つまり、豪懷は詩以上であつて、故國の青山は、むかしながらの衣を着けて歸る君を見知つて居るであらう。ただ道中は、艱苦一方ならず、朝早く雞を聞いては、水驛に臨んで舟を出させ、夜、空山に宿すれば、虎を防ぐ爲に、巖扉を閉さねばならぬ。しかし、今回は、ほんの暫時の別であるから、格別、惆悵するにも及ばず、恙もなくて、早く此に歸著せられむことを切望する。

賦得紈扇送周秀才

紈扇を賦し得て、周秀才を送る

價重過蒲葵 齊紈皎素姿

價重きこと、蒲葵に過ぎ、齊紈、素姿皎たり。

巧裁初學月 微動已含颺

巧に裁して初めて月を學び、微に動いて已に颺を含む。

螢憶塔前撲 蠅看座上麾

螢は憶ふ塔前に撲つを、蠅は看る座上に麾くを。べし。

贈行雖遠去 應得手常持

贈行、遠く去ると雖も、應に手常に持つことを得るなるし

【字解】(一) 蒲葵 檳榔の一名、その葉で團扇を造る、李商隱の詩に何人書破蒲葵扇、記着南嶺種樹時とある。(二) 齊紈 古

しへの齊の地、即ち山東地方で出来る白絹。班婕妤の怨歌行に新製齊紈素、裁作合歡扇とある。(三) 初學月 同じく班婕妤の怨歌行に團扇似明月とある。(四) 含颺 颺は微風。(五) 座上麾 麾は追ひ拂ふ。

【題義】 この詩は、周秀才の遠行を送るに際し、紈扇を賦し、それに託して別意を述べたのである。秀才の名字等は不詳。

【詩意】 齊の紈素で造つた團扇は、皎皎として白く、價の貴きことは、檳榔葉のに勝つて居る。上手に裁ち切つて、月の如く圓くし、一寸動かしたばかりで、すでに微風を含んで居る。階前に螢を撲つたことは、思ひ出して忘れず、座上に蠅を追ひ拂ふことは、今でも現に遣つて居る。この團扇を贈るにつけて、君は遠く立ち去るとも、平生、常に手に持つて居て貰へることと思つて居るので、わが寸志を受けて下さるのは、まことに有り難い仕合である。

江上對雨

江上 雨に對す

索索鳴還止 紛紛去却回

索索として鳴つて還た止み、紛紛として去つて却つて回る。

入林催葉落 度海帶潮來

林に入れば葉を催して落し、海を度れば潮を帯びて來る。

鳥溼歸難疾。蛩寒響易哀。

鳥は溼うて歸ること疾くなり難く、蛩は寒くして、響は易く哀しくなり易し。

秋陰兼客抱。幾日未能開。

秋陰と客抱と、幾日か未だ開く能はず。しくなり易し。

【字解】「一」 兼、兼て抱く。【二】 抱、抱は懷抱、客懷と同じ。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】江上の秋雨は、ザザと聲して、鳴つては又止み、紛紛と細かに亂れて、すでに過ぎ去つたかと思ふと、やがて回つて来る。それが林の中に注ぎ入る時には、葉を促して落さしめ、海を度つて来る時には、潮を帯びて押し寄せる。鳥は、羽を濡らして飛ぶことも、疾くし難く、こほろぎは、寒さに惱んで、その響も悲しげに成り易い。かくの如く降りみ降らすみ、秋の曇りは、客懷と共に、もやもやとして閉ぢ込められ、すでに、幾日をか経過しても、まだ溼然として開くことが出来ない。

歸燕

歸燕

昨夜涼生壘。鳥衣入夢思。

昨夜、涼、壘に生じ、鳥衣、夢に入つて思ふ。

語多如戀主。去早若知時。

語多くして主を戀ふるが如く、去ること早くして時を知

海濶浮雲遠。梁空落月遲。

海は濶くして浮雲遠く、梁は空しく落月遅し。るが若し。

客身翻愧爾。秋至負歸期。

客身、翻つて爾に愧づ、秋至つて歸期に負く。

【字解】「一」 生、壘は燕の巢、泥で堅固に出来て居る故に云ふ。【二】 鳥衣、被官に「王謝は金陵の人、海を航し、風に遇つて一州に抵る。その王、女を以て之に妻はす。女曰く、これ鳥衣國なり」と。後、謝歸るを思ふ、王、命じて飛雲車を取つて之を送らしむ。家に至つて、梁上の雙燕呢喃するを見、乃ち止まるところ、燕子國たるを悟るなり。秋に至つて、二燕、將に去らむとして、庭戸に盤鳴す。謝、一絶を書し、燕尾に繫いで曰く、誤入ニ華胥夢裏ニ來、玉人終日苦憐才、雲軒飄去無消息、淚灑三春風、幾百回」と。燕、詩を寄せて去る。來春、復た至る。尾に小東あり、乃ち女の寄するところの詩、曰く、昔日相逢笑數合、如今曉遠是生離、來春燕有三相思字、三月天南雁不飛」とある。【三】 梁空落月遲、杜甫の夢李白の詩に落月滿屋梁、猶疑照顏色」とある。

【題義】歸燕は、秋、北に歸る燕。本草綱目に「春社の日來つて、秋社の日去る。その來るや、泥を銜んで屋宇の下に巢ひ、その去るや、氣を伏して窟穴の中に蟄す。或は、その海を渡ると謂ふは謬談なり」とある。

【詩意】秋になつて、昨夜、涼氣は巢の中に生じ、愈よ歸らねばならぬといふので、鳥衣國を夢に見て、まことに思に堪へぬことであらう。別るるに際して、言葉多きは、主を慕うての事であるし、去ること早きは、さながら時機を知つて居る様である。行く手の路は、海濶くして浮雲遠く、今より以後、梁間寂寞として、月の落ちかかることも遅いであらう。客中の身は、秋至るも、歸期に負いて、まだ歸ることも出來ず、翻つて、汝、燕子に愧づる次第である。

五言排律

雨

白雨散漚波。餘香暗送過。

帆迷湘浦客。珮冷楚宮娥。

寂歷鳴高樹。依微拂短莎。

燈前宵夢斷。鐘外暮愁和。

鳥溼飛難疾。花寒落已多。

江湖看自喜。閒得試漁蓑。

雨

白雨、漚波に散じ、餘香、暗に送り過ぐ。

帆は迷ふ湘浦の客、珮は冷かに楚宮の娥。

寂歷として高樹に鳴り、依微として短莎を拂ふ。

燈前、宵夢断え、鐘外、暮愁和す。

鳥は溼うて、飛ぶこと疾くなり難く、花は寒くして、落

江湖、看て自ら喜ぶ、閒に漁蓑を試むるを得たり。

「つる已に多し。」

【字解】(一)白雨 清吳錄に「關中、雹を謂うて白雨となす」とあるが、普通には、驟雨、即ち夕立。東坡の詩に、黑雲翻墨未遮山、白雨跳珠亂入船とある。(二)漚波 泡立つ波。(三)餘香 夕立の爽快なる氣分。(四)湘浦 湘水の入り江、湘水は洞庭に注ぎ入る。(五)珮冷 珮は環佩、腰下の飾り。(六)楚宮娥 楚宮の宮女、例の朝雲暮雨といふ巫山の神女より聯想したのであらう。(七)寂歷 さびしげなる貌。(八)依微 ほの暗き貌。(九)短莎 夢は溼草。(一〇)江湖 廟堂に對して云ふ。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 夕立は、泡立つ波に散じ、一種清爽の氣分を暗に吹き送つて來る。湘江を渡る旅客は、舟の

行く先が分からず、楚宮の女どもは、環佩の冷かなるを傷んで居る。その來るときは、寂歷として、さびしげに高樹に鳴り、依微としてほの暗く、短い莎草を拂うてしぶく。燈前に其聲を聞くと、夜の夢、俄然として醒むべく、入相の鐘の鳴り出す其外を眺めると、愁思が自然と催すばかり。鳥は羽を濡らして、飛ぶことも遅く、花は寒げにして、地に落つるのも多い。身は、今、江湖の遠きに在つて、心のどかに漁人の蓑を着けることが出來たから、この雨を看ても、却つて、喜ばしく思ふのである。

送祀諸王功臣

諸王功臣を祀るを送る

效節忠臣盛。酬功聖澤寬。

未開圖像閣。先築降靈壇。

松柏新阡茂。風煙舊壘殘。

傳香來帝子。讀詔有祠官。

因即分封始。還思創業難。

親連諸國重。恩及九泉歡。

廟靜儀容肅。山空仗衛寒。

節を效して忠臣盛に、功を酬いて聖澤寬なり。

未だ開かず像を圖するの閣、先づ築く靈を降すの壇。

松柏、新阡茂り、風煙、舊壘殘す。

香を傳へて、帝子より來り、詔を讀む、祠官あり。

分封の始に即くに因つて、還た創業の難きを思ふ。

親は諸國を連ねて重く、恩は九泉に及んで歡ぶ。

廟は靜にして儀容肅、山は空しくして仗衛寒し。

雲間超鐵騎。月下響金鑾。

雲間、鐵騎を超え、月下、金鑾を響く。

幣玉應長薦。鐘彝更不刊。

幣玉、應に長く薦むべく、鐘彝、更に刊らす。

如何渭水上。未許祀衣冠。

如何か、渭水の上、未だ衣冠を祀るを許さず。

【字解】【一】效節 忠節を效して國事に死す。【二】圖像閣 漢の宣帝の時に、功臣を麒麟閣に畫かしたことがあつて、漢書に

「上、戎狄質服するを以て殿殿の美を思ひ、乃ち其人を麒麟閣に圖畫す。惟だ雲光のみは名ははずして、大司馬大將軍陸侯姓雲氏といひ、その次は、張安世・韓增・趙充國・魏相・丙吉・杜延年・劉德・桑丘賀・蕭望之・蘇武、凡そ十一人、皆功德あつて、名を當世に知らる」とある。次に、後漢の明帝は、功臣を雲臺に畫いたので、後漢書に「永平三年、中興の功臣二十八將を南宮の雲臺に圖畫して、二十八宿に應ぜしむ。鄧禹を首と爲し、次は馬成・吳漢・王梁・賈復・陳俊・耿种・杜茂・寇恂・傅俊・岑彭・嚴鐔・馮異・王霸・朱祐・任光・祭遵・李忠・景丹・高倫・蓋延・邳彤・鮪期・劉植・耿种・臧宮・馬武・劉隆、惟だ馬援は皇后の父たるを以て與らす」とある。その又次に唐の太宗も同じ事をしたので、唐書に「貞觀十八年、功臣、長孫無忌・趙郡王孝恭・杜如晦・魏徵・房玄齡・高士廉・尉遲敬德・李靖・蕭瑀・段志玄・劉弘基・屈突通・殷開山・柴紹・長孫順徳・張亮・侯君集・張公瑾・程知節・虞世南・劉政會・唐倫・李勣・秦叔寶等を凌煙閣に圖畫す」とある。

【三】降靈壇 靈魂を招き降す祭壇。【四】新阡 阡は墓地。【五】降香 香を供へる。【六】儀容廳 あたりの模様の靜肅なること。【七】仗衛 敎使の儀仗警衛。【八】金鑾 馬の手綱に付けてある銅製の鈴。【九】幣玉 幣帛と玉、ともに神前に供へる。【一〇】鐘彝 彝は酒尊、廟に供へ置く常用の器、鐘彝ともに銘を刻してある。【一一】不刊 刊はけづり落ちる。【一二】如何渭水上、この二句は、一寸事實が分からぬが、渭水は陝西西安を貫流して、古しへの秦の地。すると、秦の國だけは、この際、祭をすることを許されなかつたといふのであらう。元來、秦に封ぜられたのは、明の太祖の第二子棧といふ人で、洪武三年に封ぜられ、十一年に諸王と同じく藩に西安に就いたが、その五月、璽書を賜うて「關内の民、元氏政を失うてより、その敵に勝へず。今、吾、天下を定め、又轉輸の勞あり、民未だ休息せず。爾、關に之く、若し宮室すでに完ければ、その不急の務は、悉く之を已めよ」といはれた位

で、この頃は關中、なほ多事であつたから、特に見合せられたのであらう。

【題義】洪武三年、詔して、子棧等十人を封じて王となし、禮成つて、太廟に告ぐといふことがあつたから、青邱には封建親王二賜三百官宴といふ詩があつて、前に卷十三に見えて居る。そこで、諸王の功臣として、その地に死せしものを祭つたのは、多分、その直後の事であつて、この詩は、題の書き方が不完全であるが、その御祭の爲に、各地に出張する敎使を送つたのであらう。

【詩意】わが明室の開國に際し、忠貞の節を效して、各地に陣歿した忠臣は、極めて盛にして、その數も多く、今次、その功に酬いて、祭祀を行はれるのは、聖主の德澤、極めて寛弘なるを見るべきである。されば、その像を圖畫する閣を未だ開かざるに先つて、その靈魂を招き降す祭壇を築かれた。これ等の功臣は、死んで既に久しきを經、新しい墓地には、松柏が茂り、風煙淒涼たる處に、舊壘は殘破して居る。そこで、新に其地に封せられた皇子より、香を供へられ、天子は、特に詔を下し、それを祭主が讀み上げることになつて居る。ここに、諸王分封の始に即くに際して、又ぞろ、國初創業の艱難を追憶する次第で、封建の新制は、父子の親を以て、諸國を結び付け、その關係極めて重く、聖恩洪大、よく九泉の下に及びて、死んだ者も、定めて喜んで居ることであらう。その功臣輩の祠廟は、あたりの模様自然靜肅であつて、山中、外に何もなく、敎使の儀仗警衛は、寒げに見える位やがて、愈よ祭儀が行はれると、至誠の感ずるところ、彷彿として、雲間に鐵騎の超走するを見、月

下に馬の鈴の響くのが聞こえる。幣帛と玉とは、爾後、いつでも祠前に薦めて絶えざるべく、廟中に備へつけた鐘彝には、銘を刻んで、決して刊落せぬであらう。唯だ渭水の岸上なる秦の地に於ては、何故に、同時に衣冠の功臣を祀ることを許されないのか、それが、一寸、不思議である。

七言律詩

端午

端午

自臨南浦采香蒲。自南浦に臨んで、香蒲を采る、  
喜見游船度遠湖。喜び見る、游船の遠湖を渡るを。  
人好須纏長命縷。人は好く、須らく纏ふべし長命縷、  
時清休佩避兵符。時は清く、佩ふるを休めよ避兵符。  
紅榴近席明當眼。紅榴、席に近く、明かに眼に當り、  
白葛裁衫薄映膚。白葛、衫を裁して、薄く膚に映す。  
千古獨醒成底事。千古獨醒、底事をか成す、

【字解】〔一〕南浦 南方の入り江、楚辭の九歌河伯に、子交手兮東行、送美人於南浦とあり、江淹の別賦に春草碧色、春水綠波、送君南浦、傷如之何とある。〔二〕香蒲 新鮮なる菖蒲。〔三〕長命縷 風俗通に「五月五日、五絲の絲を以て臂に繫ぐれば、人をして瘟を病まざらしむ、續命縷と名づく」とある。〔四〕避兵符 抱朴子に「五月午日、赤靈

且酬佳節到雙壺。且つ佳節に酬いて、雙壺に到る。

符を心に著くれば、兵を辟くべし」とあり、魏書に「午時、恒法にして」とあり。〔六〕紅榴 石榴の花は深紅なるが故に云ふ。〔七〕獨醒 屈原の漁父辭に「世を擧げて皆濁り、我ひとり清めり、衆人は皆醉ひ、我ひとり醒めたり。これを以て放たる」とある。〔八〕底事 何事に同じ。〔九〕雙壺 壺は酒壺、李華の含元殿賦に夾雙壺之酒酒とあり、黃庭堅の詩に玉露欲遺雙壺到とある。

【題義】端午は五月五日、一に端陽といひ、前に卷十六、端午席上詠美人綵索釵符、及び端陽十詠の兩處に於て詳説して置いたから、参照して貰ひたい。

【詩意】今日は、五月の節句であるから、自ら南の入江に臨んで、新しい菖蒲を摘み取り、多くの游船船の遠い湖水を度り行くを見て、嬉しく思つた。わが好しと思ふ人は、長命縷を纏うて、瘟疫に罹らぬ様にするが宜しいが、刻下太平の御代で、全く必要がないから、避兵の符を佩ふるには及ばない。石榴の花は、深紅に咲き出でて、席に近い爲に、明かに眼に當り、葛の白布で衫を造つたが、薄くて、膚が透いて見える。今日は、本来、屈原を記念したのであるが、その屈原は、千歳に唯だ一人、われのみ獨り醒めて居るといつて矜つて居たが、何の役にも立たず、ここに佳節に酬ゆる爲には酒を飲むが善いので、やがて、雙壺を傾け始めた。

宿無錫城下

無錫城下に宿す

暫泊長濠古柳間 しばらく泊す長濠古柳の間

雞聲未肯報開關 雞聲、未だ肯て開關を報せず。

危譙近處寒聞漏 危譙近き處、寒、漏を聞き、

遠燒明時夜見山 遠燒明かなる時、夜、山を見る。

城壘尙遺爭戰跡 城壘、尙ほ遺す争戰の跡、

道途無復往來艱 道途、復た往來の艱なし。

孤舟自愧看燈坐 孤舟、自ら愧づ燈を看て坐するを、

不及居人夢寐間 及ばず、居人の夢寐間なるに。

【字解】(一) 暫泊 泊は無錫舟を泊すること。

(二) 開關 關は城門。

(三) 危譙 高い城樓。

(四) 遠燒 遠くで山を焼くこと。

【題義】無錫は縣名。秦の時、はじめて置き、後には常州に隸屬して居た。この詩は、青邱が南京に上る途次、縣城の下に舟を泊して作つたのである。

【詩意】しばらく、客舟を城下なる長濠古柳の間に泊したが、一夜を明かし兼ね、曉に鳴く雞の聲が、城の開關を報ずるのを待ち侘びて居る。高い城樓に近い爲に、寒氣いや増す折柄、あたりは一しほ靜

で、漏刻の響が、はつきりと聞こえ、遠くで草を焼く火が明かなるに因り、夜でも、四邊の山が、よく見える。城壘依然として、戦争の名残を留めて居るが、今しも、太平の世で、道中、往來の困難は無い。身は孤舟の中に坐して、ちつと燈火を眺め、居民が夢うつつの間に在つて、長閑に睡つて居るのに及ばざるは、まことに、愧づべきの至である。

望家人不至、效西崑體 家人を望めども至らず、西崑體に效ふ

鳳凰臺下彩雲賒 鳳凰臺下、彩雲賒かなり、

日暮青山特地遮 日暮青山、特地に遮る。

畫舫遠汀迷柳樹 畫舫遠汀、柳樹に迷ひ、

翠衾孤館怨梅花 翠衾孤館、梅花を怨む。

佳人下蔡徒傾國 佳人下蔡、徒に國を傾け、

倦客長安自憶家 倦客長安、自ら家を憶ふ。

未省春前來得否 未だ省せず、春前、來り得るや否やを、

【字解】(一) 鳳凰臺 前に數ば見え、もと長安に在つて、秦の弄玉の遺蹟であるが、後には、唯だ宮禁の樓閣の礎に用ふ。

(二) 特地 特別にといふ義。

(三) 畫舫 綺麗な漕山船。

(四) 翠衾 翠は翡翠、その羽で飾つた夜具といふのであるが、

單に綺麗な衾の義に用ふ。

(五) 下蔡 宋玉の登徒子好色賦に、嫣然一笑、惑陽城、迷下蔡とあつて、



陌頭幾度下琵琶（二〇） 陌頭幾度か琵琶を卜す。

る、故に取つて以て喩ふ」とある。【六】他者 久しく滞留して居る孤客。【七】長安 帝都の稱、ここでは南京を指す。【八】未  
省 省は省説、未だ識らずといふに同じ。【九】陌頭 街頭に同じ。【一〇】下琵琶 前に卷二、鹽道曲の詩中に引いたが、妖巫傳に  
「淮南、鬼神を好んで、邪多く、俗、病めば、即ち之を祀つて、醫人なし。張蓋、かつて江南洪州に停まること數日、土人何妻が琵琶  
の卜を善くするを聞き、同行の人郭司法に質す。その家、士女門を壊め、銷遣道に滿つ」とある。琵琶の音に因つて吉凶を卜する  
ことであらう。

【題義】この詩は、青邱が南京に居た時、洪武三年の春、妻子眷屬を蘇州から呼び寄せた處が、なか  
なか著京せざりしに因つて作つたのである。西崑體とは、宋初、臺閣諸公が李商隱を主奉して、一時  
流行した詩體、西崑酬和集を編成したから、やがて之を西崑體といつたので、中山の詩話に「祥符天  
禧中、楊大年・錢文肅・晏元獻・劉子儀、文章を以て朝に立ち、詩を爲るに、皆李義山を宗とす」とある。  
西崑體の特色としては、措辭を綺麗にし、好んで典故を用ふること等があつて、就中、縁情諸什は、  
無題碧城に擬し、芳芬悱惻を旨とし、この詩は、即ちその好適例である。

【詩意】九重の宮城の下には、五色の彩雲、遙に棚引きわたり、日暮になると、青山は特地に遮られ  
て、わが家族どもは、どの邊まで來て居るか、見分けることが出来ない。游山船の漂ふ遠い汀岸は、  
柳の木の間迷ひ、翠衾を用意してある孤館には人なくして、梅花の匂ふを怨めしとおもふばかり。

鄰家の佳人は、下蔡を惑はして、傾國の姿を矜れども、もとより見むきもやらず、身は倦客として、  
帝都に獨り滞留して、自然、家を憶うて居る。果して、春の前に著京するや否やを知らず、そこで、  
幾たびも、都大路に出かけて、琵琶の卜を遣つて貰つたが、その言ふところは、あてには成らず、ま  
ことに、閉口して居る。

送宋學士子仲珩自京還金華省親

宋學士の子仲珩の京より金華に還りて親を省するを送る

省親何事却辭親 親を省せむとして何事ぞ却つて親を辭す

萬水千山獨去身 萬水千山、獨去の身。

淮樹別時猶帶雪 淮樹別るる時、猶は雪を帯び、

鄉園歸日定逢春 鄉園歸る日、定めて春に逢ふ。

衣冠曉闕瞻丹鳳 衣冠曉闕、丹鳳を瞻、

舟楫寒溪過白鱗 舟楫寒溪、白鱗を過ぐ。

知爾行留正難決 知る爾が行留正に決し難きを、

【字解】【一】省親 金華に歸省  
して母親を見舞ふ。【二】辭親 都  
に居る父親に辭別する。【三】淮樹  
淮は秦淮、南京の中に在る堀割の川。  
【四】丹鳳 宮城の正門で、屋根の上  
に銅製の鳳凰が掲げ付けてあるが故  
に云ふ。【五】白鱗 漢名。

一杯江畔慰傷神。一杯江畔、傷神を慰む。

【題義】宋學士は、即ち翰林學士宋濂、前に卷九、會宿成均、因戲呈宋學士の題下に於て、その略傳を述べて置いた。仲珩は字、且つ仲の字があるから、第二子といふことが推察される。本名不詳。この詩は、前に卷九に見えた送王孝廉至京省其父待制後歸金華と全く同一の事情で、宋王二人、ともに金華の人、且つ同じく元史編修の總裁に官し、家族を其郷里に留めて置いたのである。

【詩意】如何なれば、君は母親を見舞ふが爲に、父親に辭別し、萬水千山の長い旅路を獨りで行かれるのか。今日別を爲す時、秦淮の木木は、まだ雪を帯びて居たが、故郷に歸着した日には、花笑ひ、鳥歌ひ、定めて賑はしき春に逢ふことであらう。曉早く、衣冠を整へ、丹鳳の宮門を見上げて、心ばかりの御暇乞を爲し、やがて、舟楫を用意して、春なほ寒き折から、白鵝溪を過ぎ行かれるであらう。何は兎もあれ、兩處に兩親が分れて居ては、行くか、留まるか、心に決し兼ねて居る氣の毒さに、ここ江畔に於て、取り敢へず、一杯を薦めて、傷心の思を慰めむとするので、快く一飲せられむことを希望する。

次紫城韻寄西夢道人

紫城の韻に次して西夢道人に寄す

花底黃鸝語未休

花底の黃鸝、語、未だ休まず、

迴廊小院舊同游

迴廊小院、舊と同游。

故人渭北傷離別

故人渭北、離別を傷み、

客子周南苦滯留

客子周南、滯留に苦む。

不見諫生乘白馬

見ず諫生の白馬に乗するを、

欲從關尹問青牛

關尹に従つて、青牛を問はむと欲す。

豹吞虎噬荒村暮

豹吞虎噬、荒村の暮、

種粟鋤畚志未酬

粟を種る、畚を鋤いて、志、未だ酬いず。

且つ復た諫む」とある。【一】關尹問青牛 前に卷六、宿寧真道館の詩中に引いたが、關中記に「老子、關を度る。令尹喜、門吏に敷して曰く、もし、老公、東より來り、青牛薄板車に乗するものあらば、關を度るを聽す勿れ、と。その日、果して來る。吏、これを白す、喜曰く、道、今來る」とある。【二】豹吞虎噬 虎豹に等しき兵士どもが、狼藉を恣にする、即ち爭亂中の光景を云ふ。【三】種畚 畚は新に開發した田畑。

【題義】説明に及ばぬ。但し、この二人は、眞正の名字、竝に閱歷等不詳。紫城は後に山人とあるから、隱者であらうし、西夢は道人といふから、道士であらう。

【字解】【一】黃鸝 黃鸝に同じ。

【二】迴廊小院 道觀を云ふ。

【三】渭北 西夢道人を指す。

【四】渭北 渭水の北、西安附近、杜甫の詩に渭北春天樹とある。

【五】客子 青邱自ら謂ふ。

【六】周南 周の文化の南に及んだ處、即ち楚地、南京を指す。

【七】諫生 白馬 後漢書劉湛傳に「光祿勳に拜せらる。光武、朝

に臨み、或は情容あれば、湛、輒ち其

失を陳諫す。常に白馬に乗す。帝、

湛を見る毎に、輒ち言ふ、白馬生、

湛を見る毎に、輒ち言ふ、白馬生、

湛を見る毎に、輒ち言ふ、白馬生、

【詩意】花底の鶯は、頻りに囀つて止まず、それを聞くにつけて、道觀の廻廊小院に於て、曩に君と一處に遊んだことを思ひ出す。しかるに、君は、今遠く渭北に在つて、かけ離れた處に別れて居るのを奈何ともし難く、予は、厭厭ながら、ここ楚地に滞留して居る。われは、朝廷に在るも、彼の張湛が白馬に乗じて、諷諫を事とした様にすることも出来ず、君は、關令尹喜に従ひ、青牛に跨れる老子の如き人待ち受けて、道を窮め様として居られる。今しも、騷亂の後、虎豹の如き兵士は、呑啖を恣にして、荒村の日暮、亂暴狼藉、至らざるなく、そこで、予は、山園に栗を種ゑ、新田を鋤いて、隱居の計を爲さうと思つて居たが、未だ其志に酬ゆることが出来ない。

答默堂在紹興見寄

默堂の紹興に在つて寄せらるるに答ふ

曩衣滄海獨還征。曩衣滄海、獨り還征。  
 才術憐君老更成。才術、憐む君が老更に成るを。  
 蕭寺故人修疏請。蕭寺の故人、疏を修して請ひ、  
 越州太守具舟迎。越州の太守、舟を具して迎ふ。  
 煙塵西阻身無定。煙塵、西に阻つて身定まるなく、

【字解】【一】曩衣、旅囊と征衣。  
 【二】還征、遠征に同じ。【三】老更成、杜甫の詩に庚信文章老更成とある。【四】修疏、手書を作る。【五】魚磯、釣り場。【六】瓮城、鎮夷城の時。

消息東傳雁有情。消息、東より傳へて雁に情あり。

共買魚磯瓮城下。共に魚磯を買ふ瓮城の下、

邇來江月向誰明。邇來、江月、誰に向つて明かなる。

【題義】説明に及ばぬ。但し、默堂の姓名閱歴等は不詳。

【詩意】君は、旅囊を負ひ、征衣を着け、ひとり長の旅路に出られたが、君の才識術略は、意よ老成された。さびしい寺に居る友人どもは、態態、手紙を以て懇に請じ、越州の太守までが、舟を用意して來り迎へられたから、そこで、君は、今次、出發された次第。これに反して、予は、兵亂の餘、煙塵西に阻つて、身の蹤跡、未だ定まらず、君の消息を東より傳へたのは、雁も、流石に情ありげである。さきに、君と共に、好い釣り場を瓮城の下に買つて置いたが、相變らず流落して、そこに往つて、緩つくりと清閑を楽しむことも出来ず、爾來、江上の明月は、誰が爲に明かなるか、われ等に取つては、甚だつれなき様に見える。

次韻黃別駕見寄時已休官

黃別駕の寄せらるるに次韻す、時に已に官を休む

溪上幽人戴鶻冠、溪上の幽人、鶻冠を戴く、  
每容閑客坐蒲團、毎に閑客を容れて蒲團に坐せしむ。

河陽使者求溫造、河陽の使者、溫造を求め、  
天下蒼生憶謝安、天下の蒼生、謝安を憶ふ。

地隔金城塵荏苒、地は金城を隔てて塵荏苒、  
日昏銅柱海瀾漫、日は銅柱に昏くして海瀾漫。

高情豈訝微官誤、高情豈に訝からむや微官に誤らるるを、  
忍見梅花獨耐寒、見るに忍びむや梅花の獨り寒に耐ふるを

【字解】(一)鶻冠 漢書藝文志  
に鶻冠子一卷とあつて、その注に「楚  
人、深山に居り、鶻を以て冠となす」  
とある。鶻といふ鳥の羽毛で冠を飾  
つたので、鷹者の被るものである。  
(二)蒲團 容は許す。(三)蒲團  
綿の代りに蒲の穂を入れて造つた布  
團。(四)河陽 唐の憲宗の時、そ  
の地に節度使たりし烏重胤を云ふ。  
(五)溫造 唐書の本傳に「造、字は  
簡與、姿表魁傑、性、詩書を嗜む、東  
都に隱る。烏重胤、奏して幕下に至  
らしめ、殿中侍御史に遷る。夏州節度使李祐の諷に遠うて馬を進むるを彈劾するや、祐曰く、今日、諷、溫御史に落つ」とある。そ  
の溫造の聘せられたのは、丁度、韓愈が洛陽令たりし時で、その送序は文章軌範にも抄出されてあるから、誰でも知つて居る。(六)  
蒼生憶謝安 晉書に「謝安、少にして時名あり、朝命敦迫、皆就かす、人爲に語つて曰く、安石超たすんば、當に蒼生を如何すべき」  
とある。(七)金城 金陵、即ち南京を指すのであらう。(八)荏苒 ざりざりと押し寄せる。(九)銅柱 後漢書に「馬援、交趾  
に至り、銅柱を立てて漢の疆界となす」とある。

【題義】説明に及ばぬ。但し、別駕は、君側に侍する役で、この黃某は、張士誠に事へて居たが、意  
を得ずして官を罷めたものと見える。その人の名字等は不詳。  
【詩意】君は溪上の幽人を以て自ら居り、常に鶻冠を戴いて居るが、毎毎、閑客を歡待し、これを延  
いて蒲團に坐せしめ、相對して時事を高談して居る。やがて、河陽なる烏重胤の使君が溫造を招聘し  
た如く、禮を厚うして徵されしに因り、淮張に仕官したのであつて、その當時、聲望の盛なることは、  
安石出でずんば蒼生を如何といはれた當年の謝安の如くであつた。その淮張の根據地たる蘇州は、金  
陵と相隣り、戰塵も荏苒として、急には寄せ來らず、日の銅柱に落ちかかる南海も、指麾の中に在つ  
て、海波瀾漫として際涯なく、まことに、要衝の地を占めて居るから、進取を旨として、大に爲すあ  
るべき筈である。しかるに、君が俄に罷められたのは、例の如く、區區たる微官の爲に高情を誤られ  
たからで、今さら詮なく、梅花が獨り嚴寒に耐へて、その節を屈せざるは、まことに見るに忍びず、  
君の境涯は、まことに御氣の毒で堪まらぬ。

寄山庭老人兼簡紫城山人  
山庭老人に寄せ、兼ねて紫城山人に簡す  
深掩衡茅碧澗陬、深く衡茅を掩ふ碧澗の陬、  
煙霞仍許客星留、煙霞、仍ほ許す客星の留まるを。

【字解】(一)衡茅 かつ葺の門。  
(二)碧澗 谷川の邊。(三)煙霞 山中の景色。(四)客星 後漢  
七言律詩 寄山庭老人兼簡紫城山人  
八一五

老人絳縣泥塗辱 老人絳縣、泥塗の辱、

司戸台州放逐愁 司戸台州、放逐の愁、

每過林塘煩几杖 毎に林塘を過ぎて几杖を煩はし、

不論年紀敘交游 年紀を論せずして交游を敘す、

紫城夫子同心事 紫城の夫子、心事を同じうす、

書卷琴牀小洞幽 書卷、琴牀、小洞幽なり、

月甲子朔、四百有四五甲子、その季、今に于て三の一なり。師曠曰く、七十三年、と。趙孟、これを召して、過を謝して曰く、吾子をして辱められて泥塗に在らしむること久し、武の罪なり、と。以て絳縣の師となす」とある。【六】司戸台州 鄭處が台州司馬に貶謫されたことで、杜甫に送詩がある。

【題義】説明に及ばぬ。但し、二人とも、如何なる人か分からぬが、いづれ、當代の高士輩であらう。

【詩意】山庭老人は、その自ら號する通り、居を山庭に占め、谷川の邊なる衡木門を深く鎖して居るが、それでも、山中の風景を愛する人といへば、これを歡迎して、逗留を爲さしめる。君は、絳縣の老人と同じく、泥塗に辱めらるること、すでに久しく、そのみか、當年の鄭處が台州の司戸に左遷された様に、あはや、放逐されむとしたこともあつた。しかし、今日は、山中に隱居し、林塘を過ぐる毎に、床几と杖とを用意して、佳景に遇へば、隨意に留賞し、又然るべき一廉の人物を見れば、年齢に關せず、これと交游を敘することにして居る。ここに、紫城先生は、老人と心事を同じうし、奥深き小洞の中に住んで、書卷琴牀を友として居るから、日夕往來して、定めて、塵外の逸興を共にされて居ることであらう。

次則中上人賦寒盡韻

則中上人の寒盡くるを賦するの韻に次す

天涯臘盡見瓊花 天涯、臘盡きて瓊花を見る、

門倚東風野老家 門は倚る東風野老家の家、

憂患沈絛如中酒 憂患沈絛、酒に中るが如く、

江湖遷轉任流槎 江湖遷轉、流槎に任かす、

夜半神仙無石髓 夜半、神仙、石髓なく、

溪頭流水有胡麻 溪頭、流水、胡麻あり、

遙聞未返京華使 遙に聞く、未だ返らず京華の使、

腸斷孤城咽暮笳 腸は斷つ、孤城、暮笳を咽ぶに、

【字解】(一)臘盡 年が暮れる。

(二)瓊花 かういふ名の珍花が、揚

州の道觀にあるといふが、このは、

矢頭、梅花を指したのであらう。

(三)任流槎 捨て小舟の如く、行方

定めぬこと。

【題義】この詩は、則中上人の、寒盡く、即ち新春を詠じた詩韻に次したので、上人の本名等は不詳。

【詩意】身は天涯に在つて飄泊し、年、すでに盡きて、梅花の開くを見、ここに田舎住居をして、東風の中、門は野老の家に倚り添うて居る。居常、憂患沈黙して、さながら、二日酔の如く、江湖の間を運轉して、捨小舟の止まるるところを知らぬ様である。そこで、神仙の術を學ぼうと思ふが、夜半、石髓の碎くべきものなく、ただ、溪頭の流水を利用し、水車で胡麻を舂いて居る。遙に聞けば、京華に遣した使は、まだ返らぬとのことで、この後、淮張の形勢は如何なるか、孤城日暮、笳聲の咽ぶを聞くと、まことに、斷腸の想に堪へられぬ。

金華鄭叔車父仲舒、仕燕十年、不得聞、元年南北既通、叔車即往尋省、至京師、遇焉、時仲舒方臥病、叔車侍養久之、仲舒命歸祀先塋、將行、賦詩送之

金華の鄭叔車の父仲舒、燕に仕ふること十年、聞くことを得ず、元年、南北、すでに通じ、叔車、即ち往いて尋省し、京師に至りて遇ふ。時に仲舒、方に病に臥

し、叔車侍養之に久しうす、仲舒、命じて歸りて先塋を祀らしむ。將に行かむとし、詩を賦して之を送る。

【字解】(一) 闕下、宮闕の下、即ち京師、ここでは燕京を指す。

(二) 嘗藥、禮記の曲禮に「君、疾あつて藥を飲めば、臣、先づ之を嘗む。親、疾あつて藥を飲めば、子、先づ之を嘗む」とある。嘗は、毒味をすること。(三) 掃松、墓所を掃除する、即ち先塋に參詣する。

天北天南久淚垂、天北天南、久しく淚垂る、相逢闕下竟誰期、相逢ふ、闕下、竟に誰か期せむ。遠兵阻道纔通日、遠兵、道を阻んで、纔に通するの日、孝子尋親乍見時、孝子、親を尋ね、乍も見るの時。嘗藥未忘憂戚戚、藥を嘗めて、未だ忘れず憂戚戚、掃松還作去遲遲、松を掃うて還た作す、去つて遲遅たるを。人間我願從今定、人間、我が願、今より定まる、骨肉都無更別離、骨肉、すべて更に別離なし。

【題義】金華の人、鄭叔車の父仲舒は、燕京に在つて、仕官すでに十年、しかし、その名は、まだ世に聞こえなかつた。洪武元年、戰亂漸く平ぎ、南北の路通せしに因り、叔車は即時に出かけて、これを探ねると、燕京に至つて遇ふことが出来た。その時、仲舒は、病に臥して居たので、叔車は、その

側に付いて看護すること、これに久しうした。やがて、大分よく成つた爲に、仲舒は、叔車に命じ、郷に還つて先塋を祀らしめた。かくて、青邱は、吳地に於て叔車に遇ひ、愈よ金華に向つて發足せむとするに際し、この詩を賦して、その行を送つたのである。仲舒・叔車ともに、字らしいが、本名竝に閱歴は不詳。

【詩意】天北天南、兩地遠く相隔つて、涙を垂るること、すでに久しく、闕下に於て相逢うたのは、まことに豫想外の事であつた。つい先頃まで遠地の兵士が道を塞いで居たのに、それが、やつと通じ、そこで、孝子は親を尋ねて、乍ち見ゆることが出来た。しかし、父親は、その折、病氣であつた故に、藥の毒味をして、懇に看護を爲し、戚戚たる憂を忘れることが出来なかつたが、今度、その命に依つて、先祖の墓参りをするといふので、遲遅として去り、ここ吳中を經由して、これから、その郷の金華に向ふとのことである。この世に於て、君の爲にする我が願は、今より、ちやんと定まつて居るので、この上は、骨肉をして、全然別離なき様にさせたいといふ其一事である。

送梅使君之松陵

梅使君の松陵に之くを送る

不草河平舊奏書、草せず河平の舊奏書、

【字解】【一】河平、舊奏書、宋史

行春新發畫輪車、行春新に發す畫輪の車。  
吏迎堠館朝來處、吏は堠館に迎ふ朝に來るの處。  
客散都亭晚餞餘、客は都亭に散す晚餞の餘。  
一路雨香聞杜若、一路雨香ばしくして杜若を聞き、  
四橋波暖見王睢、四橋波暖にして王睢を見る。  
亂離得似江城少、亂離、江城に似るを得たるは少し、  
野飯家家美稻魚、野飯家家、稻魚美なり。

朝旦傳に「河、縣村を決し、尋いで、復た塞がる。且、河平頃を獻す」とある。【二】行春、春に當つて管轄地を巡視する。【三】堠館、即ち驛亭。【四】都亭、都の端に在る亭驛、東京でいへば品川とか板橋とか云つた様な處。都は、無論、南京。【五】晚餞餘、日暮、その行を餞せし後。【六】杜若、かきつばた。【七】王睢、みさご、詩經關雎の毛傳に「雉鳩は王雎なり」とある。【八】江城、松

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】君は、黃河の洪水が収まつたに就いて、頌を草するに及ばず、今回は、松陵の知府に任せられ、新に畫輪車を發し、春に當つて、その地に乗り込まれるとのことである。彼方に於ては、小役人どもが、朝から聚まつて、驛亭に出迎へるであらうし、此處都亭に於ては、日暮餞行の後、多くの人が初めて散せむとして居る。その途中は、杜若の花が咲き出でて、雨さへ香ばしく、川の交叉して橋が

井字を爲せる處は、波暖にして、みさごの鳥が關關と相和して鳴いて居るであらう。刻下亂離の後、物資の饒富なることは、江邊の城、即ち松陵が第一で、家家の野飯は、米も魚も、ともに美にして、とても、これに較ぶべき處は他に無い位である。

贈袁客省次居竹老人韻

袁客省に贈る、居竹老人の韻に次す

南島誰令弁服來。南島、誰か弁服をして來らしむ、

安陵年少有奇才。安陵、年少、奇才あり。

將軍但省聞筆坐。將軍、但だ省みて筆を聞いて坐し、

司馬應知決帳開。司馬應に知るべし、帳を決して開くを。

妖霧散時通北海。妖霧散する時、北海に通じ、

使君歸處動中台。使君歸る處、中台を動かす。

長江誰更能飛渡。長江、誰か更に能く飛渡せむ、

一日風帆到鳳臺。一日風帆、鳳臺に到る。

【字解】(一) 弁服、書經の禹貢に、鳥夷弁服とあつて、草木の葉を以て衣服となすこと、蠻地の風俗を云ふ。(二) 安陵、戰國策に「安陵君、唐雎をして秦に使せしむ。秦王曰く、寡人、五百里の地を以て安陵に易へむとす、安陵君、寡人に難かざるは何ぞや。唐雎曰く、安陵君、地を先王に受けて之を守る、千里と雖も、敢て易へざるなり」とある。(三) 聞筆坐、晉書桓伊傳に「謝安の女婿王國寶、利を專にして檢なく、安、

毎に之を抑制す。孝武の末年、國寶、安の功名、盛極まれるを以てして、これを構會す。帝、伊を召して飲膳し、安、侍坐す。伊に命じて笛を吹かしむ。伊、一弄を爲し、筆を以て歌はむことを請ふ。歌うて曰く、爲君既不易、爲臣良獨難、忠信事不顯、乃有三見疑患と。聲節恍惚、安、泣下つて片を活し、席を越えて之に就き、その韻を持して曰く、使君、此に于て凡ならずと。帝、愧づる色ありと見ゆ。(四) 決帳開、晉書鄧超傳に「桓温、不軌を懼く、超、これが爲に謀る。謝安、王坦之と嘗て温に詣つて事を論ず。温、超をして帳中に臥して之を聽かしむ。風、帳を動かして開く。安、笑うて曰く、鄧生は入幕の賓といふべし」とある。(五) 中台、宰相は天上に於ける三台の星に應ずるが故に云ふ。(六) 長江、陳書に孔範の言を記して「長江は天監、豈に能く飛渡せむや」とある。(七) 風帆、追手の風に送られる帆。(八) 鳳臺、前の望家人「不至の詩に見えた鳳凰臺の時、即ち宮城を指して云ふ。

【題義】袁客省の名字は分からぬが、この人は、外交の事を掌り、この頃、公用の爲に蘇州に居たから、青邱が此詩を贈つたものと見える。居竹老人は、姓名不詳。

【詩意】誰か南島を招撫し、弁服の蠻民をして來朝せしめたか。いふまでもなく、それは、君の大功であつて、君は、古しへの安陵君の如く、外交には、容易に腰を折らず、しかも、年少にして奇才がある。君は、又古しへの謝安の如く、人から讒言されても、平氣で宴上に筆を聞いて坐することを解し、又帳が風に吹かれて動く時、その中に謀士を匿してあることを知りつつ、何とも思はぬ位、膽玉がしつかり据わつて居る。今しも、妖霧、すでに散じて、北海に通ずべく、君が歸朝されると、その聲譽は、三公をも動かすであらう。長江萬里、誰か果して能く飛渡すべき、帆が追手の風に送られさへすれば、ここよりは、唯だ一日で、容易に宮城に行かれるのである。



寄題簷簷軒

簷簷軒に寄題す

聞道君家江水東、聞くならく、君が家、江水の東、

宛如湘浦竹蒙籠、宛として、湘浦の如く竹蒙籠、

衣含夕潤霏煙裏、衣は夕潤を含む、霏煙の裏、

簾隔春寒細雨中、簾は春寒を隔つ、細雨の中、

聽罷幽禽泥正滑、幽禽を聴き罷んで、泥正に滑に、

鋤殘亂笋徑纔通、亂笋を鋤殘して、徑、わづかに通ず、

詩成遙作相思夢、詩成つて、遙に作す相思の夢、

清影愁隨月落空、清影愁へて隨ふ、月の空に落つるに、

【題義】簷簷は若竹、即ち幼き竹、誰が之を以て軒に名づけたか知らぬが、青邱は、その軒に寄題して、この詩を作つたのである。

【詩意】承はれば、君の家は江水の東に在つて、そこには、名にしおふ簷簷が叢生し、宛然、湘浦の邊に例の斑竹がこんもりと茂つて居る様である。されば、霏霏たる煙の中に在つて、衣は夕の溼氣

を含み、細雨の中に、簾は春寒を隔てて、低く垂れて居る。幽禽の聲を聴き罷んでも、雨後の泥は正に滑に、勝手に生えた筍を掘り除けて、一條の細徑が、やつと通ずる位。詩、すでに成りし後、遙に君を思つて夢を爲し、萬竹の清影、空に落つる残月に隨つて、ほの暗くなつたのは、殊に心を愁へしめる。

【字解】(一) 湘浦、湘江の入り江で、例の斑竹の名所。(二) 蒙籠、こんもりと茂れる貌。(三) 夕潤、夕の溼氣。(四) 霏煙、霏霏たる煙。(五) 聽罷、聴き盡す、掘つて取り去る。(六) 亂笋、勝手に生えた筍。

瓊姬墓

瓊姬の墓

骨冷珠襦閉古愁、骨は冷かに、珠襦、古愁を閉ざす、

荼萸零落竟誰收、荼萸零落して、竟に誰か收めむ。

青燈自照空菴夜、青燈自ら照らす空菴の夜、

翠輦無歸故苑秋、翠輦、歸るなし故苑の秋、

麋鹿昔年來廢榭、麋鹿、昔年、廢榭に來り、

牛羊今日上荒邱、牛羊、今日、荒邱に上る。

香魂若解悲亡國、香魂、もし亡國を悲むを解すれば、

【字解】(一) 珠襦、襦は襦袢、即ち褌衣、それに珠を飾つてある。

(二) 荼萸、ぐみの實。

(三) 翠輦、王者の車。

(四) 廢榭、榭は臺の屋宇あるもの。

莫共西施地下游。西施と共に地下に遊ぶ莫れ。

【題義】瓊姬は吳王夫差の女、前に卷十四、六言律、同題の詩の項に於て、詳しく説明して置いた。【詩意】ここは瓊姬の墓、珠襖に包まれた骨は、既に冷かにして古愁を閉し、たとへば、ぐみの實が地に散ばつて、收める人が無いと同じである。青燈は自ら空菴の夜を照らせども、翠輦は、一たび去つて、復た歸らず、故苑の秋は、愈よ寂しきを覺える。むかし、麋鹿は廢臺の跡に遊びに來たといふが、今は、牛羊が却つて荒邱に上るばかり。瓊姬の香魂、もし亡國を悲むを解すれば、地下に在つて、西施と共に遊ばぬが善いので、西施は、即ち吳國を亡ぼした張本である。

【餘論】金檀の附注に「この首、疑ふらくは、改めて六言律に入る」とあつて、即ち六言律の原作であらうと云ふのである。仍つて、これを比較すると、後半は略ぼ同じく、これは七言であるから、毎句一字づつ増した様になつて居る。前半は、聊か異なつて居るが、それでも、その痕跡は、明かに認められる。そこで、念の爲め、その六言律を此に掲げると、

夢別芙蓉殿頭。墮釵零落誰收。土昏清鏡忘曉。月冷珠襖恨秋。麋鹿昔來三廢苑。牛羊今上三荒邱。香魂若怨亡國。莫與西施共游。

毎毎の事ながら、多きを貪ると、作者の棄てたものまで拾ひ込むので、これも確に其一である。

白蓮寺、謁甫里祠

古寺廻廊見廢祠。古寺の廻廊、廢祠を見る、

塵埃楓葉翳幽帷。塵埃楓葉、幽帷を翳す。

釣魚船去雲迷浦。釣魚の船は去つて、雲、浦に迷ひ、

鬪鴨闌空草滿池。鬪鴨闌は空しくして、草、池に滿つ。

僧散誰修芳藻奠。僧は散じて誰か修せむ芳藻の奠、

客來自詠白蓮詩。客來つて、自ら詠す白蓮の詩。

當時尙作江湖隱。當時、尙ほ江湖の隱となる、

何況於今屬亂離。何況んや、今に亂離に屬するをや。

【題義】前に卷十四、謁甫里祠の題下に引いたが「甫里志に、甫里祠は、唐賢陸龜蒙魯望を祀るなり、祠は白蓮寺の西に在り、先生卒後、その傍に葬り、遂に廟食す、即ち其故宅なり」とある。

【詩意】白蓮古寺の廻廊に陸龜蒙の廢祠が残つて居て、塵埃だの、楓葉だのが、神前の戸ばりに引つ懸つて居る。釣魚の舟は去つて、雲は入り江に迷ひ、家鴨を鬪はせた欄干は跡方もなく、草が池に一

【字解】古寺 即ち白蓮寺。

【一】鬪鴨 神前の帷に引ツからまる。

【二】芳藻 蕪藻を薦むる祭儀。

【三】白蓮詩 陸龜蒙の白蓮を詠じた絶句に無情有恨何人見、正是月殘風曉時とあつて、名作として知られて居る。

ばい生えて居る。僧が散じて居らぬから、誰も御祭をするものなく、客が来れば、彼の白蓮の詩を明吟して、むかしをしのぶだけである。在りし日に於てさへ、龜蒙は、自ら江湖の隱者と稱した位だから、刻下亂離の世に際し、誰も遺跡の保存など考へる人などは無い。

【餘論】金檀の附注に「この題の詩、すでに十四卷中に載す、疑ふらくは、此は是れ原稿にして之を存すとある。なる程、釣魚、鬪鴨の十四字は、佳聯であるから、その儘に存し、改作に於ては、これを後聯としてある。そして、今一つの聯は、此には僧散云云とあるが、彼には、遁跡虚煩明主詔、感懷猶賦散人詩とあつて、龜蒙の一生を縮寫して、阿堵傳神の妙がある。かくの如く、全體の仕組を全く變化したから、その他の句も、すっかり異なつて居るが、要するに、改作の方が、はるかにまとまつて、且つ整つて居る。この原作は、第二句が如何にも淺率であるし、七八兩句も、一向振はぬので、青邱の壯年時代の作に相違なく、それにつけても、推敲洗練は、技に進む上に於て、到底缺くべからざる工夫である。

五言絶句

晚涼

晚涼

輕陰度高閣、落景明遙渚。

輕陰、高閣を度り、落景、遙渚に明かなり。

涼風颯然來、不知何處雨。

涼風、颯然として來る、知らず、何の處の雨。

【字解】(一) 輕陰、薄ぐもり。(二) 落景、夕日。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】夏の暑い日の午後、薄ぐもりが高い樓閣の上を過ぎて行つたが、夕日は、依然として、遙かなる洲渚に明かであつた。その内に、涼風が颯然として吹いて來たが、これは、何處かに雨が降つた其名残であらう。

摘枸杞

枸杞を摘む

條同綠椹長、子比朱櫻小。

條は綠椹と同じく長く、子は朱櫻に比して小なり。

野艇摘來時、霜清江路曉。

野艇摘み來る時、霜は清し江路の曉。

【字解】(一) 綠椹、椹は木椹、即ちむくげ。(二) 朱櫻、ゆすら梅、或はさくらんぼう。

【題義】枸杞は和名くこ、その葉は、若芽も食へるが、煎じて飲むと、藥になるといふので、秋の初に之を摘むと見える。

【詩意】枸杞の枝條は、木樨と同じく伸び、その實は小さくて、朱櫻の様である。野舟を浮べて、その葉を摘みに往つたが、頃しも秋の末、曉早く、江路の上では、霜氣の清く身にしむを覺えた。

鉞

鉞

跪授具軍儀。青年別闔時。跪いて授けて軍儀を具ふ、青年、闔に別るるの時。

奇門纔仗出。驚散弄兵兒。奇門、わづかに仗出づ、驚き散す、兵を弄するの兒。

【字解】【一】軍儀、出陣の儀式。【二】別闔、闔は門限、内外の區別。【三】奇門、正門に非ざる門。出兵は元と凶事であるから、大將でも正門からは出ぬことになつて居る。【四】仗出、仗は兵仗、供ぞるひ。

【題義】鉞は斧鉞。將軍が出征する時には、天子より之を賜はり、又黃鉞といつて、普通、眞鍮鍍金がしてある。

【詩意】天子は、跪いて鉞を主將に授け、それで、出陣の儀式も備はり、青年の將軍は、愈も門限に御別れをする。かくて、兵仗を揃へて、奇門より出づれば、兵を弄する叛賊どもも、これを聞いて、忽ち驚いて散するであらう。

【餘論】前に卷十六に觀軍裝十詠があり、卷末に又二首あつて、もとは十二詠であつたといふが、こ

れも、矢張、同じ種類で、その初作は、もつと多くあつたものと思はれる。

角黍

角黍

香菰捲翠房。玉糝深藏貯。香菰、翠房を捲き、玉糝、深く藏貯。

欲餉獨醒人。投向清流處。獨醒の人に餉らむと欲す、投じて向ふ清流の處。

【字解】【一】翠房、中を空虛にして房に似たるが故に云ふ。【二】玉糝、糯米の粒を云ふ。【三】獨醒人、屈原を指す、前に數ば見ゆ。漁父辭に「衆人は皆醉うて、我ひとり醒む」とあるに本づく。

【題義】角黍は粽。前に卷十六なる端陽十詠中に此題が見えて居て、これは、多分、初稿で、氣に入らぬ爲に、棄てたものであらう。

【詩意】新鮮なる菰の葉で巻いて、中を空虛にし、糯米の粒を入れ、これを蒸したのが即ち粽。これを彼の獨醒の人たる屈原に餉らむが爲に、清流の處に投げ込むのである。

菖歌

菖歌

屑玉清觴裏。芳香散午筵。屑玉、清觴の裏、芳香、午筵に散す。

長生如可問、重覓九疑仙。長生もし問ふべくんば、重ねて覓めむ九疑の仙。

【字解】【一】層玉。葛蒲の葉を細かに切つたものをいふ。【二】午筵。晝の筵席。【三】九疑。山の名、蒼梧の野を圍んで湘江の近くに在る。

【題義】これも、前首と同じく、端陽十詠の中の一題で、葛歌は、即ち葛蒲の菹である。

【詩意】玉を細かに刻んだ様な葛蒲の葉の菹を、清觴で酒を飲む間に食ふと、芳ばしき匂が晝の筵席に散る様である。葛蒲は、元來薬に成るといふことで、長生果して問ふべくんば、重ねて、九疑の山に居る仙人を尋ねることも出来やう。

秋望

秋望

柳色漸蕭疏、川原暮雨餘。

柳色、漸く蕭疏、川原、暮雨の餘。

殷勤望來雁、恐有故人書。

殷勤、來雁を望む、恐らくは、故人の書あらむ。

【字解】【一】蕭疏。寂しき貌。【二】殷勤。熱心に。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】柳の色も寂しく、折から、平原に夕暮の雨が晴れたばかり、熱心に天を仰いで北地から飛び来る雁を望んで居るが、友人の手紙でも、持つて来るかも知れぬと思ふからである。

七夕

七夕

穿針倚畫樓、新月映簾鉤。

針を穿つて畫樓に倚る、新月、簾鉤に映す。

不見天孫渡、銀河遠自流。

見ず天孫の渡るを、銀河、遠く自ら流る。

【字解】【一】穿針。荆楚歲時記に「七夕、婦人、綵練を以て七孔の針を穿ち、瓜果を庭中に陳し、以て巧を乞ふ。綉子あつて瓜上に刺すれば、以て巧を得たりと爲す」とある。【二】簾鉤。捲き上げた簾を懸ける鉤。【三】天孫。即ち織女、淮南子に「烏鵲、河を填めて橋を成し、織女を度す」とあり、風俗記に「織女、七夕、河を度るに當り、鵲をして橋を爲さしむ」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】少女輩は、畫樓に倚り、針に糸を通して、裁縫が上手になる様にと禱り、新月は、簾の鉤に映つて居る。この夕、織女が渡るといふが、どうも、それらしいものも見えず、唯だ銀河のみが皎皎として天を流れて居る。

荷花

荷花

湖上錦雲迷、紅妝映水低。

湖上、錦雲迷ひ、紅妝、水に映じて低し。

扁舟人採摘、何似若耶溪。

扁舟、人採摘、若耶溪に何似ぞや。

【字解】(一) 錦雲、蓮の花の紅白相交りたるを遠望して云ふ。(二) 若耶溪、太平寰宇記に「越州會稽縣の東南二十八里に在り」と記し、一統志に「紹興府城の南二十五里に在り、西施、蓮を此に採る」とあり、李白の採蓮曲に若耶溪旁採蓮女、笑隔三荷花一共人語とある。

【題義】荷花は、即ち蓮の花。

【詩意】湖中に紅白の蓮の花の咲き亂れたるは、さながら錦雲の迷ふが如く、その花を採りに来た女は、紅妝、水に映じて、低く見える。その女どもが舟に乗つて、花を切り取る處は、音に聞く若耶溪に比べて、如何であらうか。

贈雲林子

雲林子に贈る

茶煙裊鬢絲。老去尙耽詩。

茶煙、鬢絲に裊たり、老去、尙ほ詩に耽る。

池上南風裏。看君寫竹枝。

池上南風の裏、看る君が竹枝を寫すを。

【字解】(一) 鬢、まとひ付く。(二) 雲絲、鬢邊の白髮。(三) 竹枝、一地方の土歌で、小兒輩が竹枝を打振つて歌ふより竹枝詞といひ、略して、竹枝といふ。もと土歌であるから、風俗歌で、従つて、一地方の風俗を詠じた詩(主として絶句)を某地竹枝といふのである。地方風俗の中、花柳の類に關したものは、殊に詩趣ある處から、自然これに及んだものが多いが、もとより、それが主ではない。刻下、一地方花柳類の情況を歌出して某地竹枝と稱し、竹枝の本旨が獨り之に限つた如く考へて居るのは、取るに足らぬ個見である。

【題義】雲林子は雅號であらうが、その人の姓名等は不詳。

【詩意】茶を煮る煙は、徐に鬢つて、君が鬢邊の白髮にまとひ付き、君は、年を取つても、相變らず、詩に耽つて居る。池上の小亭に南風の吹き入る處、君は靜坐して、新に作つた竹枝の小詞を寫して居られる。

蛩聲

蛩聲

空館誰驚夢。幽蛩泣露莎。

空館、誰か夢を驚かす、幽蛩、露莎に泣く。

機聲秋未動。應奈客愁何。

機聲、秋、未だ動かす、應に客愁を奈何すべき。

【字解】(一) 幽蛩、蛩は蟋蟀、即ちこほろぎ。(二) 露莎、露を帯びた溼草。(三) 機聲、古今注に「莎、一名は促織、一名は蟋蟀、一名は蟋蟀」とあつて、この句は、促織の聲を取つたのである。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】空館に獨り寐て居るのに、誰が夢を驚かしたかといへば、露に濡れた草むらに啼いて居る蟋蟀である。蟋蟀は、促織の名があつて、追追寒くなるから、冬の仕度をせねばならず、早く機を織れといつて促して居るが、機の聲は、秋に成つても、未だ動かす、この夜寒を凌ぎ兼ねて、客愁の遣り處の無いには、弱わり切つて居る。

芙蓉

芙蓉

豔發數叢幽。池塘白露秋。

豔發、數叢幽なり、池塘、白露の秋。

美人思采贈。日暮盪蘭舟。

美人、采つて贈らむことを思ふ、日暮、蘭舟を蕩す。

【字解】(一) 豔發 見事に咲く。(二) 蘭舟 木蘭の舟。

【題義】この芙蓉は蓮の花か、それとも木芙蓉か、一寸分からねぬ。數叢幽といへば、木芙蓉の様でもあるし、蘭舟を盪して采るといへば、蓮の花らしくもある。しかし、ここでは、木芙蓉として解釋する。

【詩意】池塘、秋至つて、白露下る朝、木芙蓉は見事に咲き出で、數叢を爲して、極めてしめやかに見える。美人は、これを采つて、ゆかしき人に贈らうと思ひ、日暮に、木蘭の舟を盪ぎ寄せて來た。

蛙聲

蛙聲

池塘暮雨晴。芳草亂蛙鳴。

池塘、暮雨晴れ、芳草、亂蛙鳴く。

試問齊高士。何如鼓吹聲。

試に問ふ、齊の高士、鼓吹の聲に何如ぞや。

【字解】(一) 齊高士 齊の孔珪を指す。(二) 鼓吹聲 齊書に「孔珪、都官尚書となつて樂ます、門庭の内、草葉剪らず、中に

蛙鳴あり。或は曰く、陳蕃たらむと欲するか。珪曰く、われ此を以て兩部の鼓吹に當つ、何ぞ必ずしも蕃に效はむや、と。王晏鼓を鳴らして之を快し、羣蛙の鳴くを聞いて曰く、これ殊に人耳に聳し。珪曰く、われ鼓吹を聴くに、殆んど此に及ばず、と。晏、慙ぢて退くとある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】池塘に雨晴れし夕、芳草の茂れる間に、亂蛙が騒がしく鳴いて居る。試に齊の高士として知らるる孔珪に問うて見やうと思ふが、鼓吹に較べて、果して如何であるか、これでも、鼓吹に勝つて居ると云ふのであらうか。

牧童

牧童

度隴迷青草。歸時帶夕陽。

隴を度つて青草に迷ひ、歸る時、夕陽を帶ぶ。

誰知牛背穩。不似馬蹄忙。

誰か知らむ、牛背の穩なる、馬蹄の忙はしきに似ず。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】隴を過ぎ行くと、青草が渺渺として際なく、望眼、爲に迷はむとし、歸る時は、夕陽を帶びて、はや日暮に成りかけて居る。牛の背は、案外安穩であつて、世間を奔走する馬蹄の忙はしく、従つて、馬上の險呑なるとは、丸で打つて換つて居る。

【餘論】後半十字、多少の諷意があるし、且つ流水の對の佳聯として、五律の中に入れることが出来る。

看松

松を看る

偃蹇空山裏、誰知始種年。偃蹇す空山の裏、誰か知らむ、始めて種うるの年。

樵斤不敢伐、恐是老蛟眠。樵斤、敢て伐らず、恐らくは是れ老蛟の眠れるならむ。

【字解】「一」偃蹇、のさばる、横領ばる。「二」樵斤、樵夫の斧。「三」老蛟、蛟は龍の屬。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】松は空山の中にのさばつて居るが、誰も、その始めて植ゑた年を知つて居るものなく、随分、久しきを経たに相違ない。樵夫の斧は、敢て之を伐らうともせず、恐らくは、老蛟が眠つて居るのでは無いかと思つて居るであらう。

蟹

蟹を看る

吐沫亂珠流、隨燈聚遠洲。沫を吐いて亂珠流れ、燈に隨つて遠洲に聚まる。

無腸應可羨、不識世間愁。無腸應に羨むべし、世間の愁を識らず。

【字解】「一」隨燈、本草に「蟹の性、明に走る」とある。「二」無腸、抱朴子に「山中辰日、無腸公子と稱するものは蟹なり」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】蟹が沫を吹くと、亂珠の流るるが如く、又明を好むに因り、燈火に隨つて、遠い洲渚に聚まつて来る。蟹は、無腸と稱するが、まことに羨むべきものであつて、無腸なればこそ、世間の愁は、一切知らずに居るであらう。

【餘論】前に卷十二に賦得蟹、送二人之官といふ五律があつて、この詩の前半二句は、そっくり彼に在るし、後半十字も、彼に同じ意味の句がある。そこで、試に其五律を擧げると、

吐沫亂珠流。無腸豈識愁。香宜橙實晚。肥過稻花秋。出簾來深浦。隨燈聚遠洲。郡齋初退食。可怕有監州。

しかし、二首、いづれか先、いづれか後、その邊の事は、一寸分からねぬ。

讀書

書を読む

明臆欣燕坐、開卷誦虞唐。明臆、燕坐を欣び、卷を開いて、虞唐を誦す。



欲究千年事。慚目無五行。千年の事を究めむと欲するも、慚づらくは目に五行なきを。

【字解】【一】燕坐、くつろいで坐する。【二】虞唐、即ち堯舜。【三】目無五行、五行を一度に讀む。後漢書應奉傳に「奉、書を讀み、五行並に下る」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】あかるい窓の下に寛いで坐するは、まことに喜ぶべく、書卷を開いて、堯舜時代の事實を諷誦して居る。上下數千年の事を研究しやうと思ふが、載籍極めて多くして、容易に片づかず、五行を一度に讀み下すことの出來ないのは、慚すべきことである。

薑

薑

濯濯仙人指紅腴出土柔。濯濯たる仙人の指、紅腴、土を出でて柔なり。

欲知投老味。封邑已糟邱。老に投ずるの味を知らむと欲すれば、封邑、すでに糟邱。

【字解】【一】濯濯、色澤ある貌。【二】仙人指、本草に「秋社前後、新芽頓に長じ、列指の狀の如し、採食するに筋なく、これを子薑といふ」とある、即ち新生薑。【三】紅腴、微赤色、そして肥えて居る。【四】投老味、老人の氣に入る様な味。【五】糟邱、この句は、新生薑を糟漬にするといふので、梅堯臣の謝劉原父寄糟薑詩に名園萬家城、千畦等三封侯、願當三燕去前、醜芽費糟邱とある。

【題義】薑は生薑。前に卷十六に見えた余氏園中諸菜十五首の類で、以下三首、皆さうである。  
【詩意】新生薑は、つややかにして、仙人の指の如く、掘つたばかりのは、微赤色にして肥え、従つて柔かい。老人の氣に入る様にするには、如何すれば善いかといふに、邑を糟邱に封じ、即ち糟漬するものが第一である。

蒜

蒜

奇苗生絕域。漢使載歸軒。奇苗、絶域に生じ、漢使、歸軒に載す。

採掇毋勞贈。吾方欲省煩。採掇、勞贈すること母れ、吾、方に煩を省かむと欲す。

【字解】【一】奇苗、珍奇なる苗。【二】絶域、かけ離れた遠地。【三】漢使、漢書に「張騫、西域に使用して、大蒜胡荽を得たり」とある。【四】歸軒、軒は車。【五】採掇、摘み拾ふ。【六】欲省煩、高士傳に「園買、世、節士と稱す。周黨、仲叔の食に菜なきを見、遺るに生蒜を以てす。仲叔曰く、われ煩を省かむと欲するのみ、今更に煩を作さむや」と。受くれども食はず」とある。

【題義】蒜は、和名ひる、或はにんにくといひ、一種の蔬菜である。

【詩意】珍奇なる苗は、かけ離れた絶域に生じ、漢の張騫が使用して歸る時、車に載せて、持つて來たのである。しかし、これを摘み取つて、態態、贈與を勞せずとも善いので、今しも、吾は煩を省かむと欲し、食に菜なくとも、格別、苦にもしないで居る。

蘆菔

蘆菔

煙晴疏甲長。土暖深根蟄。

煙晴れて疏甲長く、土暖かにして深根蟄す。

飽食比蒸豚。知君免神泣。

飽食、蒸豚に比す、知る、君が神の泣くを免れしむるを。

【字解】(一) 疏甲、まばらなる芽。(二) 比蒸豚、劉迎の蘆菔の詩に「蒸豚外」とある。

【題義】蘆菔は即ち大根。前に卷十五、余氏園中諸菜には菔とあつた。菔、一に菔に作り、蘆菔、一に蘿蔔といふのである。

【詩意】煙晴るる時、まばらに生えた芽は長くなり、土暖かなる頃、深く伸びた根は、土中に蟄して居る。これを飽食すれば、蒸した豚に比すべく、無論、その代りとなるから、神も供へ物の絶えた爲に泣くことを免れるので、もし此物が無ければ、人は豚ばかり食つて居て、忽ち其缺乏を來すであらう。

高苴

高苴

野苴初除後。煙苗半席新。

野苴初めて除くの後、煙苗、半席新なり。

乞醯思晚薦。不與子高鄰。

醯を乞うて晚薦を思ふ、子高と鄰らず。

【字解】(一) 野苴、苴は和名ひび、一種の菜。(二) 乞醯、醯は即ち酢。(三) 子高、論語に「子曰く、誰か養生高を直なりといふ、或は醯を乞ふ、これを其鄰に乞うて與ふ」とある。

【題義】高苴は和名ちさ、その葉を一寸酢に漬けて食ふと見える。

【詩意】苴を刈り收めし後、ちさを半疊程の狭い處に蒔くと、煙れる芽が生えて來た。これを摘んで來たから、何處からか酢を貰つて、晚食の菜に致さうと思ふが、生憎、養生高の様な人が近鄰に居ないから、酢を貰つて來る處がなく、困まつて居る。

【餘論】以上四首、題が題だけに、淺俗庸近、その最も劣れるものは、馱洒落に過ぎないので、青邱の才を以てして、こんな物を作つたのは、まことに苦苦しいことである。

樓鳳亭

樓鳳亭

已馴欄外鶴。復下牕前鳳。

すでに欄外の鶴を馴れしめ、復た牕前の鳳を下す。

夜半訝翻樓。月明竹枝動。

夜半、樓を翻すを訝かる、月明かにして竹枝動く。

【字解】(一) 欄外、欄は小門。(二) 鶴、鳩と同じ。(三) 翻樓、樓を引ッくりかへす。

【題義】題下の原注に「師子林に在り」と記してある。

【詩意】すでに小門外に集まる鳩をだに馴らした位だから、竹の生ずる牕前に鳳風を呼び下すことが

出来る。夜半、風風が驚き騒いで、その塀を引ツくり返したのは、頗る訝かしいと思つたが、それは、月明の下、竹の枝が動いたのであつた。

六言絶句

題畫

畫に題す

雜花紅白孤墅

雜花紅白孤墅、

流水東西幾家

流水東西幾家。

來往莫愁橋斷

來往、橋の斷えしを愁ふる莫れ、

門前自有浮槎

門前、自ら浮槎あり。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 さまざまの野花が紅白に咲き亂れて、かけ離れたる別莊の中に滿ち、流水は東西に流れ、その沿岸に幾多の家がある。往來するのに、橋に落ちたのを心配せすとも善いので、門前には、浮木が留まつて居て、自然に橋を爲して居る。

【餘論】 前半二句は、六言の佳聯である。

【字解】 〔一〕 雜花。色色の野花。  
〔二〕 孤墅。一つ懸け離れた別墅、  
即ち別莊。〔三〕 浮槎。槎は浮木。

題宋秀才藏廬山圖

宋秀才の藏する廬山の圖に題す

彭澤縣前沽酒

彭澤縣前、酒を沽ひ、

潯陽郭外聞鐘

潯陽郭外、鐘を聞く。

欲覓君家住處

君が家の住處を覓めむと欲す、

不知雲掩山重

知らず、雲の掩ひ山の重れるを。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 彭澤縣前に於て酒を買ひ、九江城外に於て鐘を聞き、愈よ廬山に向ふのである。君が住んで居る處を是非尋ね當てやうとして、雲掩ひ山重れるを知らぬかの如く、やがて、雲山の間に分け入るのである。

【字解】 〔一〕 彭澤。潯陽、即ち九江の近くに在る縣、むかし陶淵明が其令となりし處。〔二〕 潯陽。即ち九江、廬山には、此處から往くのである。〔三〕 欲覓。覓は求める、探がす。

七言絶句

游獵圖

游獵の圖

將軍白馬佩雙鞬

將軍、白馬、雙鞬を佩び、

六言絶句 題畫

題宋秀才藏廬山圖

七言絶句 游獵圖

【字解】 〔一〕 雙鞬。鞬は弓を盛

自出呼鷹獵晚天。自ら出でて、鷹を呼んで晩天に獵す。  
笳鼓歸來人共看。笳鼓歸り來つて、人、共に看る、  
腰間應有白狼懸。腰間、應に白狼の懸るあるべし。

曰く云云、王驎かす、遂に之を征し、四白狼・四白鷹を得て以て歸る。これより、定服の者至らず」とあつて、極めて珍らしいものと見える。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】將軍は、白馬に跨り、二つの弓袋を佩び、すつかり用意した上、自ら出でて鷹を呼び、日暮に游獵を催した。やがて、笳鼓の聲に送られて、勢よく歸つて來ると、多くの人が歡迎して、これを見るので、腰間には、打ち取つたばかりの珍らしい白狼をぶら下げて居るであらう。

送人之婁江

人の婁江に之くを送る

寒雲殘雪野亭邊。寒雲殘雪、野亭の邊

人逐寒潮上別船。人は寒潮を逐うて、別船上る。

想見故園初到處。想ひ見る、故園初めて到るの處

【字解】(一)野亭 郊外の驛亭。

窓前梅發又新年。窓前梅發いて又新年。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】寒雲、天を鎖ち、殘雪なほ地に在る窮冬の頃、郊外の驛亭に出かけて、君の歸り行くを送ると、君は寒潮を逐ひ、別を敍せし後、船に乗つて出發される。やがて、故郷に到着された時には、窓前なる梅も、咲き出でて新年に成ることであらう。

秋望

秋望

霜後芙蓉落遠洲。霜後の芙蓉、遠洲に落つ、

雁行初過客登樓。雁行、初めて過ぎて、客、樓に登る。

荒煙平楚蒼茫處。荒煙平楚、蒼茫の處

極目江南總是秋。極目の江南、すべて是れ秋。

【題義】秋望は秋日遠望の景色。

【詩意】霜を経たる後、遠洲一帶、蓮の花は、落ち盡し、雁の行列が初めて過ぐる時、樓に登つて、曠望を試みた。煙は平林を籠めて、蒼茫として暗く、見わたすかぎり、江南の地は、すべて秋であつ

【字解】(一)芙蓉 蓮の花。

(二)雁行 雁の行列。(三)平楚 楚は叢木、平楚は平林に同じ。謝朓の詩に寒城一以眺、平楚正蒼然とある。

て、まさしく、斷腸の思に堪へざらしめる。

聞箏

箏を聞く

銀箏鳴軋奏秦聲

銀箏鳴軋、秦聲を奏す、

寶柱頻移曲未成

寶柱頻りに移して、曲、未だ成らず。

聽徹十三絃下語

聽き徹す十三絃下の語、

隴雲關月總愁生

隴雲關月、すべて愁生す。

【註】銀箏、隴山の雲。【二】關月、關は玉門關などの邊であらう。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】銀箏の聲、咽び勝ちにして、秦地の音調を奏でむとし、こまを色色に置き直して見たが、まだ曲調を成すに及ばない。やがて、十三絃の下に生ずる其語を聽き盡さば、隴雲關月が眼前に在る心地して、すべて、愁の生ずるに堪へられぬであらう。

【字解】【一】銀箏、箏は、今、

普通に謂ふ箏、それに銀の飾りが施してある。

【二】鳴軋、咽び勝ちに且つ途絶え勝ちなること。

【三】秦聲、古しへの秦地の音調、雄壯なるを特色として居る。

【四】寶柱、柱

夜宴

夜宴

帷中鵲尾暖吹香

帷中の鵲尾、暖に香を吹く、

絳蠟高烧夜未央

絳蠟、高く焼いて、夜、未だ央ならず。

四座生春人欲臥

四座、春を生じて、人、臥せむと欲す、

不知窗外滿庭霜

知らず、窗外滿庭の霜。

【註】帷、絳は赤色、つまり繪蠟燭。【二】高烧、東坡の詩に高烧、銀燭、照、紅妝とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】帳幕の中なる鵲尾の香爐は、暖く煙を吐き、高く繪蠟燭を焼いて、まだ夜半にもならない。やがて、滿座春を生じて、酔も廻はつたので、人人皆眠さうに見え、窓外なる庭に、一ぱい霜が降つて、寒氣の凜凜たるをも全く知らぬ様である。

【字解】【一】帷中、帷は寒氣を

防ぐ爲に垂れた帳幕。

【二】鵲尾、香爐の名で、形に依つて名づけたのであらう。

【三】四座、鵲の尾は六七寸、身と等しい位で、體分長く、その先端から香煙が立ち上る機に成つて居るもの

寄丁侃

丁侃に寄す

交游惟子最多情

交游、惟だ子のみ、最も多情、

送我扁舟過驛亭

我が扁舟を送つて、驛亭を過ぐ。

別後江花想零落

別後、江花、想ふに零落、

【字解】【一】多情、情誼が深い。

【二】江花、江邊の花。

銀箏春夜共誰聽。銀箏、春夜、誰と共に聴く。

【題義】丁侃は排行第二で丁二といひ、前に卷六に、其家に於て琵琶を聴いた七古の長篇があつた。

【詩意】多くの交游中、君のみは、情誼極めて深く、かつて、我が舟を送つて、態態、驛亭まで来たこともあつた位。別後、江上の花は、定めて落ち盡せしなるべく、君は、春ゆく夕、銀箏の聲を誰と共に聴かれるか。

聞鶯

鶯を聞く

向日迎風弄巧音。日に向ひ、風を迎へて、巧音を弄す、

金衣飛處柳陰陰。金衣飛ぶ處、柳陰陰。

上林幾度聞嬌囀。上林幾度か、嬌囀を聞く、

百舌羞藏不敢吟。百舌羞藏して敢て吟せず。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】鶯は、春の暖かい日に向ひ、長閑な風を迎へて、巧音を弄し、柳の陰陰たる處を目ざして、例の金衣の飛んで行くのが見える。物静かなる禁苑で、幾度か、なまめかしく囀るのを聞いたが、ま

【字解】(一) 金衣。鶯の羽が黄色なる故に云ふ。(二) 上林。禁苑。(三) 百舌。前に数ば見えたが、かきすといふ鳥で、春の間は、他の鳥の聲を真似るといふ。

ことに、うまいもので、流石の百舌も、羞ちて匿れ、敢て歌ひ出すことはなかつた。

紅葉

紅葉

清霜初染滿林秋。清霜、はじめて染む滿林の秋、

彷彿殘霞晚未收。彷彿たり、殘霞の晩に未だ收まらざるに。

幾片江邊自飄落。幾片か、江邊、自ら飄落、

新詩不寫漢宮愁。新詩、寫さず漢宮の愁。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】凜たる清霜に染められて、秋の末、滿林の木木は皆紅葉し、丁度、夕やけが消え残つて居る様である。江邊に於ては、その幾片、風なきに自ら飄落したが、宮中の愁恨を述べた新詩を寫すものもない。

【字解】(一) 殘霞。霞は夕やけ。(二) 漢宮。漢は唯だ添へたので、意味は無い。

晚投田家

晩に田家に投ず

船繫漁磯柳下村。船は繫ぐ漁磯柳下の村、

【字解】(一) 雷鳴犬。犬の聲が

晚衝鳴犬到柴門。 晩に鳴犬を衝いて柴門に到る。

老翁喜話桑麻事。 老翁、喜んで話す桑麻の事、

旋向鄰牆過酒樽。 旋ち鄰牆に向つて酒樽を過す。

西家、借間有酒不、醉頭過酒樽、長席俯長流二の中の過と同じく、渡すといふ義。あき樽を渡したのは、酒を入れて呉れるといふ積りであらう。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】舟を釣場に近く柳煙れる下の村に繋いで上陸し、日暮に、里の犬の羣がり吠える中を突破して、とある家の柴折戸を敲いて投宿した。すると、主人の老翁は、喜んで、桑麻の出来榮えを話したどし、やがて、鄰家の牆間から、あき樽を渡し、酒を入れて貰ふ積りで、なかなか、氣が利いて居る。

賀生日

生日を賀す

高堂瑞氣靄佳辰。 高堂の瑞氣、佳辰に靄たり、

正見梅花雪後新。 正に見る梅花の雪後に新なるを。

好把蓬萊千日酒。 好し、蓬萊千日の酒を把つて、

【字解】(一) 高堂、他人の家の尊稱。(二) 靄佳辰、靄はもやもやとして立ち籠める。(三) 蓬萊千日酒、千日の酒とは、一度飲めば千日

洞簫聲裏醉長春。 洞簫聲裏、長春に醉はむ。

洞簫聲裏、長春に醉はむ。 の間醒めないといふので、前に卷十 七、吳中觀舊遺寄三新酒の詩中、上

國豈無十日曠の句下に博物志・搜神記を引いて注したが、なほ通雅にも見え、いづれも、中山としてあつて、蓬萊ではないが、こゝでは、下句の長春に對して、特に蓬萊の字を用ひたので、いはば、典故の活用であらう。

【題義】この詩は、知人の誕生日を賀したのである。

【詩意】今日は君の誕生日、この目出たい佳辰に當つて、瑞氣は、靄然として、高堂を立ち籠め、折から、梅花も雪後に咲き出でて、世は、まさしく春である。そこで、蓬萊で出来るといふ一醉千日の美酒を酌み、洞簫を吹きすさぶ間に坐して、永劫移らざる仙境の春に酔ひたいものである。

聞鳩

鳩を聞く

江城樹暗暮雲低。 江城樹暗くして暮雲低し、

谷谷春鳩屋上啼。 谷谷春鳩、屋上に啼く。

憑仗莫呼山雨至。 憑仗、山雨を呼んで至る莫れ、

歸人馬滑畏深泥。 歸人馬滑にして深泥を畏る。

【字解】(一) 谷谷、ホツホツといふ鳩の鳴聲。

(二) 憑仗、依頼する。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】江邊の城を立ち籠めたる木木は暗くして、夕の雲は、低く地に垂れ、そして、春の鳩は、屋根の上で、ポツポツといつて啼いて居る。汝に依頼するが、山雨を呼んで至らぬ様にして貰ひたいので、家路に急ぐ旅人は、馬が滑つて、深いぬかるみを甚しく氣にして居る。

嘲友人謫中有遇

友人の謫中遇ふあるを嘲る

簾疏不隔眼波流。簾疏にして、眼波の流るるを隔てず、

寶鑑羅巾暗贈酬。寶鑑羅巾、暗に贈酬。

堪笑相逢便相得。笑ふに堪へたり、相逢うて便ち相得るを、

只應未識此中愁。只だ應に未だ此中の愁を識らざるべし。

【題義】謫中有遇とは、遷謫の間意中の人に遇つて、慰慰を通じたといふので、この詩は、即ち友人の多情を嘲つたのである。

【詩意】簾は疏にして、ながし目を送る邪魔にも成らず、やがて、寶鏡だの、羅巾だのを人知れず贈つて寄越して、彼方でも、大分、心があつたらしい。相逢うて直に相得、互に慰慰を通ずる様に成つた

【字解】【一】眼波流、ながし目を送る、秋波を送る。

【二】寶鑑、鑑は鏡、寶鏡に同じ。

【三】羅巾、うす物の手巾。

【四】相得、慰慰を通ずること。

のは、まことに、笑ふべきことであつて、多情の君は、遷謫中の愁を全く識らずに居るものと見える。

那知寒谷近陽臺。那ぞ知らむ、寒谷の陽臺に近きを、

一笑都令百悶開。一笑、すべて百悶をして開かしむ。

不是東家牆外女。これ東家牆外の女ならずんば、

相逢誰解惜多才。相逢ふ、誰か、多才を惜むを解せむ。

【字解】【一】寒谷、遷謫されたのは何處だか分からぬが、いづれ北方陰寒の地と見える。【二】陽臺、前に數ば見えたが、巫山の神女の居る處で、宋玉の高唐賦に「妾は、巫山の陽、高丘の榭に在り、且に朝雲となり、暮に行雨となり、朝朝暮暮、陽臺の下」とある。【三】東家牆外女、宋玉の登徒子好色賦に「臣の東家の子、これに一分を増せば太だ長く、これに一分を減すれば太だ短く、粉を著くれば太だ白く、丹を施せば太だ赤く、眉は翠羽の如く、肌は白雪の如く、腰は素を束めるが如く、齒は貝を含むが如く、嫣然一笑、陽城を惑はし、下蔡を迷はしむ。然れども、この女、牆に登つて、臣を闕ふこと三年、今に至つて、未だ許さざるなり」とある。

【詩意】北方の陰寒なる山谷が陽臺に近く、ここに朝雲暮雨、一段の情事であらうとは、誰も思ひ付かぬことで、まことに、佳人の一笑は、百の煩悶をして、瀾然跡なくならしめることが出来る。その女は、かの宋玉の東鄰に居り、牆に登つて窺つたといふ其人の様なもので、萬一さうで無ければ、どうして、君の多才を憐惜することを解知しやう。とても、そんなことは有るべきものではない。



瀟湘八景

瀟湘八景

煙寺晚鐘

煙寺の晚鐘

疏鐘杳杳出林間。

疏鐘、杳杳として林間を出づ、

應送斜陽下遠山。

應に斜陽を送つて、遠山を下るなるべし。

遙望煙中知有寺。

遙に煙中を望んで、寺あるを知る、

數聲初盡一僧還。

數聲、初めて盡きて一僧還る。

【題義】瀟湘、二水の名。湘水が本流であつて、沅水の落ち合ふ處を沅湘といひ、瀟水の來り會する處を瀟湘といひ、その地は、洞庭の南に當つて、風景絶佳なるが故に、八景の名目が出来た。夢溪筆談に「度支員外郎宋迪、畫に工に、尤も善く平遠山水を爲る。その得意なるもの、平沙落雁・遠浦歸帆・山市晴嵐・江天暮雪・洞庭秋月・瀟湘夜雨・煙寺晚鐘・漁村夕照あり、これを八景といひ、好事者、多く之を傳ふ」とある。すると、宋迪は、瀟湘地方に於ける得意の畫題を選んで、頻りに之を畫いた處から、併せて、瀟湘八景と稱し、後には、東西に流布して、どんな小さな亭などでも、何何八景と稱して、互に相銜ふ様に成つたので、過庭記談に「南渡以後の詩人、陳衡仲・張叔安・周公謹・奚倬然、皆西湖十景の詞あり、その後、ここかしこに、それに擬して、八景十景の名あり。金に至り

て燕都八景の詩あり、小曲あり。明に至りて、永樂の間、館閣の諸侯、相集まつて倡和し、燕京八景の名、いよいよ盛にて、或は又二景を増して、燕京十景とも稱せり。その外、處處方方の區區瑣瑣たるは、擧げて數ふるに足らず。陋俗の弊、日本ばかりにても無しと見えたり。故に、趙恆夫も、今時十室之邑、三里之城、五畝之園、以及三琳宮梵宇、靡不有八景十景詩、可憎甚矣と云へり」とある。  
【詩意】間遠に撞く鐘の聲は、杳杳として、林間より出で、やがて、夕日を送つて遠山に沈ましめる。はるかに望めば、蒼茫たる煙の中に、寺があることが分かるので、數聲やつと撞き終つた頃に、一人の坊さんが、徐に還つて行つた。

漁村夕照

漁村の夕照

寒鴉閃閃水連煙。

寒鴉閃閃として、水、煙に連る、

柳下漁歸乍繫船。

柳下、漁は歸つて、乍ち船を繫ぐ。

猶喜西村斜日在。

猶は喜ぶ、西村斜日の在るを、

一罾留曬斷磯邊。

一罾留めて曬す斷磯の邊。

【詩意】寒鴉閃閃として飛ぶ彼方には、江水渺渺として煙に連り、漁夫は、歸つて來て、柳の下に舟

を繫いだ。村の西に夕日が残つて、時なほ早きは、まことに嬉しく、そこで、網を解いて、断崖の邊に曝らして居る。

遠浦歸帆

遠浦の歸帆

秋雲秋水共悠悠。秋雲秋水、共に悠悠、

帆逐征鴻急暝投。帆は征鴻を逐うて、急に暝に投ず。

知有漁家南渡口。知る漁家あり南渡口、

斜陽指點認歸舟。斜陽指點して歸舟を認む。

【詩意】秋の雲と秋の水と、ともに悠悠として、際涯もなく、帆は飛び行く雁を逐うて、急に夕暗中に投じて仕舞ふ。南の渡口には、漁家があるらしく、斜陽の影裏、其方を指して歸り行く舟が明かに指點される。

【餘論】三四兩句、ともに、極めて不完全で、就中、結句は、斜陽が主格である様に見え、殆んど語を成さぬ嫌がある。

平沙落雁

平沙の落雁

晚潮初落露平沙。晚潮、はじめて落ちて、平沙を露はし、

低雁衝煙度影斜。低雁煙を衝いて、度影斜なり。

遠向渡頭人盡處。遠く向ふ、渡頭人盡くる處、

一行如字下兼葭。一行、字の如く、兼葭に下る。

【詩意】夕潮が初めて引いて、汀岸一帶、平沙を露出した頃しも、低く渡る雁の、暮煙を衝いて、飛ぶ影が斜に見える。やがて、遠く去つて、人の全く居ない渡頭に向ひ、一行、明かに字らしい形をなし、そして、よし葦の茂れる間に下りて來た。

【餘論】後半二句は、寫景、やや工緻である。

【字解】(一)度影。わたり行く、即ち飛び行く影。(二)人盡處。人盡く去つて誰も居らぬ處。

洞庭秋月

洞庭の秋月

波光秋映玉壺圓。波光、秋は映す玉壺の圓なるに、

黃鶴磯頭月滿天。黃鶴磯頭、月、天に滿つ。

【字解】(一)玉壺。湖天の清潭なるに比して云ふ。(二)黃鶴磯。武昌縣治の西隅、黃鶴山の西北二里

欲上君山吹短笛。君山に上つて短笛を吹かむと欲す、

夜深呼起老蛟眠。夜は深く、呼び起す老蛟の眠るを。

故に君山と名づく。一に云ふ、宛の二女、これに居る、と。郭志、君山は、狀、十二の蟠雲の如し。北夢瑣言、湘江北流して岳陽に至り、蜀江に達す。夏潦の後、蜀江漲つて湘波を過住し、溢れて洞庭湖となり、凡そ數百里、而して君山、宛然、水中に在り。秋水歸れば、この山、復た陸に居り、惟だ湘川一條のみ」とある。【三】老蛟。蛟は龍の角なきもの。

【詩意】波光渺渺として、秋は玉壺の如く、圓かなる湖天に映じ、今しも、黃鶴磯頭に於て、明月高くさし上つて、その光が大空に滿つる時である。そこで、はるばると洞庭湖に漕ぎ入り、君山の頂に登つて、短笛を吹かうと思ふので、すると、夜深き頃、その音に感じて、深淵の底に眠つて居る老蛟は、驚き起つて、湖中に飛舞するのであらう。

瀟湘夜雨

瀟湘の夜雨

雲暗蒼梧萬里情。雲は暗し蒼梧萬里の情、

滿江秋雨夜寒生。滿江の秋雨、夜寒生ず。

黃陵廟下蕭蕭竹。黃陵廟下、蕭蕭の竹、

【字解】【一】蒼梧。野の名、舜の崩じて、且つ就いて葬りし處。歐陽文忠公の檀弓に「舜は蒼梧の野に葬る」とあるが、晉の習鑿之は「舜、零陵

併作篷窓一夜聲。併せて作す蓬窓一夜の聲。

と、舜は蒼梧に崩じ、九疑山下の零陵に葬つたといふのが確實らしく、死處と葬處とは、全く別であるらしい。史記にも「舜、南狩し、行つて蒼梧の野に死し、歸つて、江南の九疑に葬る、これを零陵となす」とあり、山海經にも「舜の葬る處は、今の道州零陵縣界に在り」と見えて居る。しかし、普通には、死處即ち葬處となし、又蒼梧と零陵とは、さう遠く隔つても居らぬらしい。【二】黃陵廟。岳州湘陰縣北八十里、瀟湘の尾、洞庭の口に在る。前にも引いた韓文公の黃陵廟碑に「湘旁に廟あり、黃陵といふ、前古より立て、以て堯の二女、即ち舜の二妃を祠る」とある。【三】蕭蕭竹。竹は例の斑竹で、述異記に見え、前に數ば引いて置いた。

【詩意】雲は暗く立ちとめて、蒼梧は、何處とも見え分かず、いたづらに、萬里の情を傷ましめ、湘江には、秋の雨が降り注いで、夜になると、寒氣が自ら生ずる。黃陵廟下に生ふる斑竹は、雨に打たれて、蕭蕭たる聲をなし、夜もすがら、蓬窓に鳴り響いて、旅客の眠を妨げるのは、まことに傷心の至である。

【餘論】後半二句は、一寸面白い。

山市晴嵐

山市の晴嵐

溪嵐擁樹蔽晴曦。溪嵐、樹を擁して、晴曦を蔽ふ、

虛市漁商曉聚遲。虛市の漁商、曉に聚まること遅し。

【字解】【一】晴曦。曦は太陽。【二】虛市。虚は墟、即ち村里、その市を開く。

日午西風吹忽散。日午、西風、吹いて、忽ち散じ、

前村遙見酒家旗。前村、遙に見る酒家の旗。

【題義】晴嵐の嵐は、字典に「山氣蒸潤するなり」とあつて、謝靈運の詩に夕曛嵐氣陰といひ、王維の詩に、夕陽彩翠忽成嵐といつて居る。これを「あらし」と訓じ、暴風雨の義とするのは、和訓の誤である。

【詩意】溪上の山氣は、濛濛として樹を擁し、晴れた朝日を蔽うて、ぼんやりして居る。山邊の村里に市が開けるといふが、漁商のみは、遠くから来るので、晩に聚まることの遅いのも、無理はない。やがて、亭午の頃、西風颯然として吹き度れば、さしもの山氣、忽ち散じて跡なく、遙に前村に當つて、酒家の旗の飄るのが見えて來た。

江天暮雪

江天の暮雪

雪暗江天鷺不飛。雪は暗くして、江天、鷺、飛ばず、

晚來深處沒漁磯。晚來深き處、漁磯を沒す。

鱖魚水冷應難捕。鱖魚水冷かにして應に捕へ難かるべし、

【字解】(一) 鱖魚、鰻の一種の注に「江東、鮒魚を呼んで鱖となす」とあつて、本草には「鮒魚、一名は鱖魚、小頭鰻項、寫音潤度、屬

愁滿漁蓑獨帶歸。愁は漁蓑に満ちて、獨り帯びて歸る。

身細鱖、その色青白、腹内に筋あり、味最も肥美」とある。又襄陽耆舊傳

に「漢中の鱖魚、甚だ美、常に人の捕ふるを禁じ、獲を以て水を断ち、因つて、これを接頭鱖といふ」とある。  
【詩意】雪は江天に暗くして、鷺だに飛ばず、晚來、大分積つて深い處は、釣り場をも沒する位。水も冷たい處から、鱖魚も、容易に捕れず、仕方がないから、漁夫は、滿蓑の愁に堪へ兼ね、雪を帯びた儘、ひとり、歸つて仕舞つた。

【餘論】この結句は、どうやら不完全で、獨帶歸の帶は、何を帶ぶるのか、一寸分らないが、矢張、起首に掲出した雪を指したのであらう。

送春

春を送る

花殘風雨暗遙津。花は殘して、風雨、遙津暗し、

記得迎春又送春。記し得たり、春を迎へ、又春を送るを。

此日不愁春去遠。この日、愁へず春去ること遠きを、

只愁催老少年人。只だ愁ふ、催し老ゆ少年の人。

【字解】(一) 遙津、遠かなる渡し場。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 花を散らす風雨が吹き荒れて、遙かなる渡し場は、暗くして見え分かず、春を迎へたことは、まだ記憶に新なるも、又ここに春を送るといふ始末。しかし、この日、春の去つて既に遠いことは、格別愁へもせぬが、少年の人を促して、老いしめる其事のみは、愁に堪へられぬ。

月夜南樓

月夜南樓

簾紋如水漾秋清。簾紋、水の如く、秋を漾はして清く、  
臥看銀河漸欲橫。臥して看る、銀河の漸く横はらむと欲  
吟斷新詩方欲睡。新詩を吟断して、方に睡らむと欲す、  
半樓涼月又鐘聲。半樓の涼月、又鐘聲。

【字解】 〔一〕 簾紋。簾は竹むし  
る、紋は織り工合で自然に出て居る  
斑紋。

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 竹むしろの斑紋は、浮き出でて水の如く、秋氣を漾はして清く、そこに臥して、天の河の西  
に横はらむとするを看て居る。やつと出来た新詩を吟じ畢つて、今しも、睡らうとすると、涼しき月  
は、高樓の半程の處にかかり、夜半の鐘が隱隠として響き出した。

【餘論】 篇中、欲の字が接近して復出して居るのは、まことに、目障りである。

飲張水部園亭

張水部の園亭に飲む

草堂留客聽鳴琴。草堂、客を留めて鳴琴を聴かしむ、  
喜有清歡似竹林。喜ぶ、清歡の竹林に似たるあるを。  
池上日斜歸尚早。池上日斜に、歸る、尚ほ早し、  
山公莫厭酒杯深。山公、厭ふ莫れ酒杯の深きを。

【字解】 〔一〕 竹林。晉書山濤傳  
に「濤、むかし、魏晉の間に在つて、  
嵇康・阮籍・籍の兄の子咸・向秀・  
王戎・劉伶と相友たり、竹林の七賢  
と號す」とある。〔二〕 山公。即ち  
山濤、晉書の本傳に「惟だ濤、仍ほ

意を世事に留め、その吏部尙書となつて遷を興るや、人物を甄別し、各題目を爲して之を奏す、時人、これを稱して山公の啓事といふ」とある。

【題義】 張水部は水部郎中張某、その名字は不詳。この詩は、その人の園亭に會飲して作つたのである。

【詩意】 草堂に客を留めて、琴の音を聴かしめ、座上の清歡は、彼の竹林に似て、浮世ばなれにして  
居るのは、まことに喜ばしい。池上、日は斜なれども、歸るには、まだ早いので、山濤の如き平生御  
忙しい人でも、すこしは緩ッくりして、杯の深きを嫌はず、十分召し上つたら宜しからうと存する。

約友出游

友に出游を約す

春愁無禁復多開。春愁禁するなきも、復た多くは開なり、  
欲出城西看好山。城西に出でて、好山を看むと欲す。  
爲向高陽期酒伴。爲に高陽に向つて酒伴を期す、  
一樽來醉杏花間。一樽來り醉へ杏花の間。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】春愁は、禁するに由なく、その生ずるに任かせて居るが、今は春の初で、閒暇多く、さばかり、春愁に攻められることもないから、城西に出でて、好き山でも眺めやうと思つて居る。高陽の酒徒とも稱すべき君に向つて約束するが、是非、出かけて來て、杏花の花の咲き匂ふ間に於て、一處に樽を傾けて快く酔はうではないか。

【字解】(一) 高陽 地名、史記 酈食其傳に「酈食其、初め沛公に見えむと欲す。公、備生たるを以て見す。酈生、劍を按じて曰く、吾は高陽の酒徒、備生に非ざるなり」と。沛公、これを見る」とある。

憶梅

梅を憶ふ

夢隨飛蝶繞南枝

夢に飛蝶に隨つて南枝を繞る、

【字解】(一) 飛蝶 羅浮の仙蝶

獨夜空齋月落遲。獨夜、空齋、月落つること遅し。  
安得羅浮林下去。安んぞ得む、羅浮林下に去り、  
滿身香影醉吟詩。滿身の香影、酔うて詩を吟するを。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】夢の中に飛ぶ仙蝶に隨つて、早く花の咲く南枝を躡ぎ廻つたが、ひとりぬる夜の明け難く、人なき書齋の窓に月の落つことも遅い。この上は、萬梅咲き滿つる羅浮の林下に向つて行き、暗香疏影を一身に受け、酔うて、詩を吟じたらばと思ふばかりである。

といつて、一種特別の種類あることを暗用したのであらう。(二) 獨夜 ひとり睡る夜。(三) 羅浮 梅の名所。

春游

春游

王孫尋伴踏春晴。王孫、伴を尋ねて春晴を踏む、  
羅袖迎風出渭城。羅袖、風を迎へて、渭城を出づ。  
路入前村花柳暗。路は前村に入つて、花柳暗く、  
笑停嘶騎聽流鶯。笑うて、嘶騎を停めて流鶯を聽く。

七言絕句 約友出游 憶梅 春游

【字解】(一) 王孫 貴介公子。(二) 尋伴 伴は同行者。(三) 渭城 咸陽縣の東北、杜鄆の地といふが、漢の時、咸陽を改めて渭城縣となし、咸陽と長安とは、略ぼ同一地城である處から、長安をも渭城と稱

【題義】 高青邱集補遺

【詩意】 貴介公子は、同伴者を探ねて、ともに春晴に乗じて、散歩でも致さうといふので、輕羅の小袖を風に飄して、長安の都を出た。やがて、路は郊外なる或村に入らむとし、その近傍は、花や柳をこきまかせて、ほのかに暗い程で、飛び繞つて啼く鶯の聲も、しをらしい處から、公子は、笑を含み、勢よく嘶く乘馬を停めて、しばしは、聞き惚れて居た。

【題義】 この詩は、貴介公子の春日冶游の状を詠じたのである。

楊花

楊花

春雪吹香欲滿城。春雪、香を吹いて、城に滿たむと欲し、

游絲相逐鬪輕盈。游絲、相逐うて、輕盈を鬪はす。

紛紛正似離愁處。紛紛、正に離愁に似たる處、

灞岸人行暮雨晴。灞岸、人行いて、暮雨晴る。

には、必ず此處に於てし、そして、柳を折るを例にした。

【題義】 楊花は河柳の花、日本でいふ猫柳の類で、花は穂の如く、その散る時は、丸で雪の様である。

【字解】 一 游絲 陽春、即ちかげろふ。二 輕盈 春色の盛りなるを云ふ。三 灞岸 灞水は長安八水の一、そこに架せる橋を灞橋といひ、その近傍には柳が多く種みてあつて、唐の頃、人の遠行を送る

柳、即ち枝垂柳の方も、支那では、矢張、同じ様な花を開く。

【詩意】 楊花の飛び散るは、春の雪と見まがふばかり、しかも、香を吹いて、やがて城中に滿たむとし、燃え立つかげろふと相逐うて、その心地よげに輕いことを競うて居る。しかし、灞水の岸べに雨晴るる夕、旅客の出發する折からなど、楊花は、紛紛として、まさしく千々に思ひ煩ふ別離の愁と相似て、まことに心ありげに見える。

採桑

桑を採る

陌上柔桑葉半稀。陌上の柔桑、葉、半ば稀なり、

攜筐採摘怕蠶飢。筐を攜へて採摘、蠶の飢ゑむことを怕る。

使君莫共羅敷語。使君、羅敷と共に語る莫れ、

日暮當乘五馬歸。日暮、當に五馬に乗じて歸るべし。

仁の妻となる。王仁、後に趙王の家令となる。羅敷、出でて桑を陌上に採る。趙王、窟に登り、見て之を悦び、因つて置酒して暮はむと欲す。羅敷、巧に箏を彈す、乃ち陌上桑の歌を作り、以て自ら明かにす。趙王、乃ち止む」とある。そこで、前の使君は、即ち趙王。【五】 五馬 漢の制、太守は五馬、その加秩ある、中二千石は、乃ち右驄、故に五馬は太守の號稱。馬車を牽く五頭立の馬。陌上桑の詩に、使君從南來、五馬立踟躕とある。

【字解】 一 陌上 路傍に同じ。

二 攜筐 筐は桑の葉を入れる箱。

三 使君 有土者の尊稱。【四】

羅敷 女の名、古今注に「陌上桑は、

秦氏の女子に出づ。秦氏は邯鄲の人、

女あり、羅敷と名づく、邑人千乘王

【題義】 説明に及ばぬ。

【詩意】 路傍に生ふる桑の若芽は、大分摘み取られて、残れるは、稀にして半分位。そこで、箱を攜へて之を摘み、早く持つて歸らないと、蠶が飢ゑるといふ心配がある。この忙はしき折から、使君よ、私に向つて、役にも立たぬ事を色色仰せられずに、日も暮れかかつて居るから、早く五頭立の馬を驅り立てて、御歸りになつたらば、宜しからうと思ひます。

【餘論】 五馬は、乗車を牽かせるので、乗るのではないから、結字の乗の字は、稍や穩當を缺いて居る。

江村

江村

竹村莎徑映柴扉。

竹村莎徑、柴扉に映す、

地近江天客到稀。

地は江天に近くして、客到ること稀なり。

日暮柳邊吹笛過。

日暮、柳邊、笛を吹いて過ぐ、

只應鄰艇賣魚歸。

只だ應に鄰艇魚を賣つて歸るなるべし。

【題義】 この詩は、題を江村といふものの、主として、漁父の事を詠じたのである。

【詩意】 竹の茂れる村、草の茂れる小路が柴折戸に映じ、漁父の家は、江天に近くして、客の來ることも稀である。日暮に歸つて來て、笛を吹きつつ、柳邊を過ぎて居るが、相鄰れる舟に向つて、捕つた魚を賣り、そして、早く跡片付をして歸つたらば善からうと思はれる。

夜聽張山人琴

夜、張山人の琴を聽く

虛堂夜靜理冰絃。

虛堂、夜靜にして冰絃を理む、

別鶴驚啼月滿天。

別鶴、驚き啼いて、月、天に滿つ。

一曲秋風少人聽。

一曲、秋風、人の聽く少し、

滿庭黃葉自蕭然。

滿庭の黃葉、自ら蕭然。

【題義】 説明に及ばぬ。但し、山人の名字は不詳。

【詩意】 畫堂人なく夜靜なる時、冰絃を整へて、やがて彈じ出せば、番離れた鶴は驚き啼き、明月は天に滿ちて居る。秋風の中に在つて、さしもの一曲、聽く人少く、滿庭の黃葉は、さわさわと音して飄つて來る。

【字解】 (一) 虛堂 人なき畫堂。  
(二) 冰絃 寸き透る櫛な琴絃。



登姑蘇臺

姑蘇臺に登る

子夜歌殘事已非。子夜の歌は殘して、事、已に非なり、  
畫簾幾度映斜暉。畫簾、幾度か斜暉に映す。  
行人重過繁華歇。行人重ねて過ぐれば繁華歇み、  
麥秀春風野雉飛。麥は春風に秀でて野雉飛ぶ。

【題義】姑蘇臺は、吳王夫差の興亡を以て知られて居るが、この詩は、張士誠が此に據つて、一時勢を得たが、後に明に滅されたのを弔つたのである。

【詩意】子夜に比すべき美人の歌は已に罷み、萬事、すでに非にして、忽ち破國の否運に臨み、畫簾は、幾たびか斜暉に映し、この地は、毎毎、廢興を経ることを免れぬ。行人、重ねて來り過ぐれば、往日の繁華、すでに歇み、城中は荒蕪に委せ、春風ぬるく吹き度る時しも、麥は漸漸として秀で、その間を雉が飛び廻はつて居る。

聽琵琶

琵琶を聽く

花間漫撥紫檀槽

花間、漫に撥す紫檀の槽、

【字解】(一)撥、かき鳴らす。

絳蠟銷時月正高。絳蠟銷ゆる時、月、正に高し。  
莫奏斷腸關塞曲。奏する莫れ、斷腸關塞の曲、  
風流自有鬱輪袍。風流、自ら鬱輪袍あり。

【一】紫檀槽、紫檀の香木で造つた。【二】絳蠟、前に數ば見ゆ、繪蠟燭。【三】關塞曲、邊境征伐の古を映出した曲。【四】鬱輪袍、曲名。全唐詩話に「王維、未だ冠せざる時、岐王、引いて公主の第に至り、伶人をして新曲を進めしむ。鬱輪袍と號す。主、大に之を奇とし、宮婢をして歌を傳へしめ、試官を召して之を誦し、解頭登第と作す」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】花間に於て、漫然、紫檀で胴を造つた立派な琵琶を弾じ始めたが、繪蠟燭が消えて、一天の明月高くさし上る時であつた。人の腸を斷つ様な關塞の曲は奏せずもあれ、古來、風流を以て知られた鬱輪袍の一曲があるから、それを遣つて貰ひたいと思ふ。

游靈巖

靈巖に遊ぶ

茶萸垂實滿遺宮。茶萸、實を垂れて遺宮に滿ち、  
洗硯池荒水殿空。洗硯池は荒れて水殿空し。  
不見傾城醉歌舞。見ず傾城の酔うて歌舞するを、

【字解】(一)茶萸、ぐみ、前に數ば見ゆ。【二】洗硯池、靈巖山中の一名勝、いづれ來歴もあるだらうが、その詳は分からぬ。【三】水殿

梵聲時起白雲中。梵聲時に起る白雲の中。

ば見えて居た。【五】梵聲、讀經の聲。

【題義】靈巖は、前に數ば見え、むかし、吳の館娃宮の在つた處である。

【詩意】ぐみの實は秋熟し、枝もたわわなるばかりで、館娃宮址に一ばいであるが、洗硯池は、すでに荒廢し、水に臨んだ殿閣などは跡方もない。今では、西施の如き傾國の美人が酔うて歌舞するを見ず、唯だ時時、白雲の中に讀經の聲の起るを聞くのみである。

水に臨む殿閣。【四】傾城、絶世の美人、李延年の歌に本づき、前に數

烹茶

茶を煮る

活水新泉自試烹。活水新泉、自ら試に烹る、

竹牕清夜作松聲。竹牕清夜に松聲を作す。

一瓶若遣文園噉。一瓶、もし文園をして噉らしむれば、

那得當年肺渴成。那ぞ得む當年肺渴成るを。

【字解】【一】活水、流るる水。これに對して、動かざる池沼の水を死水といふ。【二】文園、漢書に、「司馬相如、孝文園令に拜す」とある。【三】噉、すする。【四】肺渴、渴は病名、淋病といひ、又糖尿病ともいふ。司馬相如は、文君の色を悦んで、その爲に渴になつたといふ位だから、淋病かも知れぬ。後人は、渴といふ字に拘泥して、水を飲みたがる病氣となし、從つて、糖尿病として居る。李商隱の詩にも「侍臣最有相如渴、不賜金盃一杯」とある。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】流るる泉を汲んで来て、試に親ら茶を煮ると、清夜、竹間の窓に於て、松風の聲が聞こえる。この一瓶の茶を司馬相如に飲ましたならば、どうして、その當時、渴を病むことなどがあらうか。相如の頃、茶といふものの無かつたのは、まことに、氣の毒なことであつた。

【餘論】この詩は、字解の中に引いた李商隱の句を運旋して、趣向を設けたものである。

青城先生戴笠圖

青城先生、笠を戴くの圖

蓆帽京城已十年。蓆帽、京城、すでに十年、

歸來一笠飯山前。歸り來る、一笠、飯山の前。

丹青莫作山樵看。丹青、作す莫れ山樵の看、

元是瀛洲畫裏仙。元と是れ瀛洲畫裏の仙。

【字解】【一】蓆帽、アンペラで造つた帽子。【二】飯山、飯頭山の略、李白の鼓角三杜甫の詩に、飯頭山頭逢三杜甫、頭戴三笠子、日卓午とある。【三】瀛洲、東海の仙山、蓬萊、方丈と併せて、三神山と稱せられて居る。

【題義】説明に及ばぬ。青城先生は虞集で、前に見えて居た。

【詩意】先生は、粗末なアンペラ帽を被つて、都に居ること、すでに十年、やがて、故郷に歸つて、

一笠を戴ける有様は、飯頼山前の杜甫にそっくりである。しかし、丹青を以て其像を畫く時、山中樵夫の如くしては宜しくないもので、元と是れ瀛洲の畫に見る仙人と同じく、秀骨天成、決して、この世の人ではないのである。

示内

内に示す

不尋生計只尋春、生計を尋ねず、只だ春を尋ぬ、  
寄語山妻莫漫瞋、寄語す、山妻、漫に瞋る莫れ。  
且放疏狂醉杯酒、且つ疏狂にして杯酒に酔はしむ、  
聖恩元許作閒人、聖恩、元と閒人と作るを許す。

【字解】(一) 生計 暮らし向。  
(二) 漫瞋 漫に怒る。(三) 且 放 放は使・遣と同じに見るべし。  
(四) 疏狂 世事に疎くして狂味あること。

【題義】内は妻を呼ぶの稱。この詩は、青邱が翰林を辭して歸家せし後の作と見える。

【詩意】家の暮らし向などに全く頓著せず、唯だ春景色を尋ねて、遊び廻つて居る。そこで、山妻に寄語するが、矢鱈に怒らずに居て呉れる。何は兎もあれ、世事に疎く、物狂はしく、酒に酔ふのは、吾が本分であつて、聖恩、すでに辭職を聞き届けられ、世外の閒人と作ることを許された次第である。

村居

村居

挂杖門前獨看雲、杖を掛けて、門前、ひとり雲を看る、  
桐花落盡惜餘春、桐花落ち盡して餘春を惜む。  
呼童莫刷籬邊笏、童を呼んで、刷する莫れ籬邊の笏、  
留取清陰蓋四鄰、清陰を留取して四鄰を蓋ふ。

【字解】(一) 餘春 残りの春、春の名殘。(二) 莫刷 刷は掘り取る。

【題義】この詩は、青邱が歸里の後、再び江上の青邱に居た時の作であらう。

【詩意】杖を掛けて置き、手ぶらで門前に立つて、ひとり雲を看て居る。折しも、桐の花は落ち盡し、春の名殘の無くなつたのが、最も惜まれる。やがて、家童を呼び、籬に生えた笏は掘り取るな、それを留め置いて、やがて、清陰が四鄰を蓋ふ様にしろと命じた。

桃花

桃花

幾叢嬌艷露香新、幾叢の嬌艷、露香新なり、  
脈脈無言似怨春、脈脈言なく、春を怨むに似たり。

七言絶句 示内 村居 桃花

【字解】(一) 脈脈 情を含む貌。  
(二) 花間有仙路 桃源の事を云ふ、前にも引いたが、陶淵明の桃花源記

只恐花間有仙路。只恐恐、花間に仙路あるを、  
停舟欲問捕魚人。舟を停めて、問はむと欲す捕魚の人。

只恐、その林を窮めむと欲す、林盡きて、水面便ち一山を得たり。山に小口あり、初め極めて狭く、わづかに人を過す、復た行くこと數十歩、豁然開朗、土地平曠、屋舎無然、良田美池、桑竹の屬あり」と見ゆ。

【題義】説明に及ばぬ。

【詩意】幾叢のなまめかしき花は、露を帯びて匂ひ新に、しかも、情を含んで言葉なきは、さながら春を怨むが如く見える。ひよつとすると、仙境に通ずる路が花間に有るかも知れないので、舟を停めて、魚を捕へる人に問ひ尋ねやうと思つて居る。

【餘論】前半は、杜牧の細腰宮裏露香新、脈脈無言度幾春の句を取つたが、手際は善くもない。

金風花

金風花

砌下幽花發幾叢。砌下の幽花、幾叢をか發す、

秋來春色尙嬌紅。秋來春色、尙は嬌紅。

秦臺鳳去簫聲遠。秦臺、鳳去つて簫聲遠く、

【字解】(一) 砌下、砌は階の下の石だたみ。(二) 秦臺、即ち鳳臺、前に數ば見ゆ。秦の穆公の女弄玉が靈史に筮を學び、やがて、ともに昇

零落嬌雲向晚風。嬌雲を零落して晚風に向はしむ。

【題義】金風花は、如何なるものか知らぬが、この詩は、その名に就いて趣向を設けたのである。

【詩意】金風花は、階下に咲き出でて、幾叢の多きに及び、秋に成つても、春色なほ嬌然として居る。おもへば、秦臺では、鳳、すでに去つて、簫聲亦た遠く、そこで、嬌雲を地下に吹き落して、晚

風に向つて咲かしたのが、即ち此花であらう。

仙せし遺跡。

秋暮

秋暮

木落高城急暮砧。木落ちて、高城、暮砧急なり、

雁行低度碧雲陰。雁行、低く度る碧雲の陰。

江南回首蓴鱸美。江南、首を回らせば蓴鱸美なり、

誰向蘭臺賦客心。誰か蘭臺に向つて、客心を賦す。

【字解】(一) 木落、落葉する。(二) 高城、高い城壁。(三) 碧雲、晴天の雲。(四) 蓴鱸美、張翰の故事、前に數ば引いたが、晉書の本傳に「翰、秋風の起るに因つて、乃ち吳中の蓴菜鱸魚の膾を思つて曰

く、人生、適志を得るを貴ぶ、何ぞ能く羅官數十里、以て名爵を要せむや、と。遂に駕を命じて歸る。俄にして聞敗る。人皆、これを機を見るといふ」とある。【五】蘭臺、漢代では、帝室の文庫を指し、後漢書王允傳に「悉く蘭臺石室の圖書を收斂して以て從ふ」とあり、後には翰林を指して云ふ。

【題義】青邱が翰林より戸部侍郎に擢んでられしが、これを辭し、仍つて、金幣を給うて放ち還されたのは、洪武三年七月で、この詩は、その頃の作であらうと思はれる。

【詩意】時しも秋の初、木の葉は、はらはらと落ち、夕暮、高い城壁に反響する砧の聲も、忙しげに聞こえ、雁の行列は、晴れた空なる碧雲の陰を低く飛び度つて居る。首を回らせば、江南の尊鱸は、今しも、その味、美なるべく、予も亦た早く歸りたいと思つて居るので、蘭臺に出仕して、物寂しい客愁を賦することは、どうも、自分に、致したくないと思つて居る。

【餘論】青邱の官を辭したのは、ひよつとすると、太祖の猜忌刻薄、功臣輩でさへも、他日、その終を全うしないことを看破したからであつて、ここに、張翰の故事を暗用したのも、機を見るものとして、極めて適切である。

紅蕉仕女

紅蕉仕女

蕉花包露月中開、蕉花、露を包んで月中に開く、

酒渴初尋出徑苔、酒に渴して、初めて尋ねて、徑苔を出づ。

憑仗小麗休吠影、憑仗す、小麗、影を吠ゆるを休めよ、

【字解】【一】蕉花、この蕉は、題中に見えた紅蕉、一名美人蕉、樹の形は芭蕉に似て小さく、花は裏荷に似て色紅、南方の閩廣地方に多く産

深宮那得外人來、深宮、那ぞ外人の來るを得む。

赤目を奪ふ、久しうして謝せず、百日紅と名づく」とある。但し、さるすべりを百日紅といふのとは無論別である。【三】酒渴、酒を飲み過ぎた爲に喉が渴く。【三】憑仗、依頼する。【四】小麗、小犬。

【題義】紅蕉は、字解の項に詳説した通り美人蕉。仕女は、宮女。この詩は、宮女に美人蕉をあしらつた圖に題したのである。

【詩意】美人蕉の花は、露を包んで月下に開き、宮女は、その邊を徘徊して居たが、やがて、酔後喉の渴くに堪へかね、路を尋ねて、苔の小徑から出て來た。ここに、小犬に頼んで置くが、九重の奥深き後宮の中、どうして、外の人が來やうか、決して來ない、従つて、自分も怪しいものではないから、たとひ影を見ても、吠えずに居よと、心中に念じて居るであらう。

【餘論】これは題畫の作であるから、起句以外の三句は、すべて仕女に替つて、その動作を解釋して居るのである。なほ、この詩は、前に卷十七に見えた宮女圖、

女奴扶醉踏蒼苔。明月西園侍宴廻。小犬隔花空吠影。夜深宮禁有誰來。と極めて類似して居るので、或は、此方が原作で、後に改作して女奴扶醉と成つたのかも知れない。

哀 誄 附錄第一

哀辭 有序

同邑張適

子宜、水部郎中

高君諱啓字季迪號青邱子又號槎軒世爲吳城人父祖皆弗耀而豐於財迨君家落而雄於才未冠以穎敏聞所交以千言貽之曰子能記憶否君一目卽成誦衆皆驚服君淬礪於學尤嗜詩詩人之優柔騷人之淒清漢魏之古雅晉唐之和醇新逸類而選成一集名曰傲古日咀詠之由是爲詩投之所向罔不如意一時老生宿儒咸器重之以爲弗及張氏據中吳仕而才若西江饒介輩深加敬禮勸之仕君笑而不答然惜其才延之使教諸子而名日益振遠邇得其詩以爲貴大明維新有薦以史事者入史館未幾書成官以國史院編修俾分教功臣子弟未逾年特授戶部侍郎自以不能理天下財賦力辭忤旨仍賜白金一鎰以酬訓誨之功

歸吳益放於詩自類其平生所作千五百首曰缶鳴集曰姑蘇雜  
 詠共如千卷傳於時學者宗之詠歌之以自適洪武甲寅緣事連  
 坐以歿士大夫靡不爲之痛惜於康君事親與兄盡孝友處族黨  
 交游盡恭而義其容和煦其言闇闇於燕私善謔酒酣長歌中年  
 始得子喜若不能容每與論詩亶亶終日忘倦或繼以夜所居去  
 予不遠故與予未嘗一日而離其有所離或授館於外亦或以詩  
 見寄及去京師睽離未幾予亦以聘至不久復合比君歸鄉既離  
 予偶亦得以不才辭秩還復胥會故君與予周旋久而相知爲深  
 君平居自愛唯恐一毫不慎獲戾於時今若此其非命也夫雖然  
 君生不得伸其志而獨能雄其才而昌其名是歿有不歿者存也  
 唯恐君之心無以暴於世故爲之友者哀之以辭以解世之疑以  
 慰君於冥冥者爾

繫斯人之生兮何質美而才豐既化俗以爲雅兮仍拔萃而超庸強

記誦而括劇兮彪乎外而彌其中遂大放厥詞兮誠意足而理充短  
 章寥寥兮噩噩大篇春容兮瀾瀾引物連類兮諧乎金石窮情盡變  
 兮宣乎社宮取材資乎楚騷兮和聲逼乎唐風名曰暢乎邇遐兮忽  
 上徹乎九重俾載筆乎翰苑兮復分教乎辟雍何峻擢之弗拜兮遂  
 放逐而歸農承錫賚之薦加兮足以表撰迪之成功返夫鄉而自如  
 兮雖益修乎篇翰式省愆兮兢惕恐駕禍兮逮躬何出乎不測兮罹  
 此大咎迺偕二陸以爲伍兮抱終痛而無窮爰葺詞以致哀兮足見  
 人臣之不泯希英魂之克慰兮庶以表知識之微悰

【訓讀】高君諱是啓字是季迪青邱子と號し又槎軒と號す世吳城の人たり父祖皆羅  
 かずして財に豊君に追ひ家落ちて才に雄未だ冠せずして穎敏を以て聞こゆ所交千言を  
 以て之に貽つて曰く子能く記憶するや否やと君一目即ち誦を成す衆皆驚いて服す君  
 學に淬勵し尤も詩を嗜む詩人の優柔騷人の凄清漢魏の古雅晉唐の和醇新逸類して選  
 し一集を成し名づけて傲古といひ日に之を咀詠すこれに由つて詩を爲るこれに投じて向

ふところ、意の如くならざる悶し、一時の老生宿儒、威な之を器重し、以て及ばずと爲す。張氏、中興に據る、仕へて才あること、西江饒介輩の若きも、深く敬禮を加へて、これに仕を勸む。君、笑つて答へず、然れども、その才を惜んで、これを延いて、諸子を教へしむ、而して、名、日に益す振ふ、遠邇、その詩を得、以て貴しと爲す。大明維新、薦むるに史事を以てする者あり。史館に入る。未だ幾ならずして、書成る。官するに國史院編修を以てし、功臣子弟を分教せしむ。未だ年を逾えず、特に戸部侍郎を授けらる。自ら天下の財賦を理むること能はざるを以て、力辭して旨に忤ひしが、仍ほ白金一鎰を賜ひ、以て訓誨の功に酬いらる。吳に歸つて、益す詩に放、自ら其平生作るところ、千五百首を類して、銜鳴集といひ、姑蘇雜詠といひ、共に如干卷、時に傳ふ。學者これを宗とし、これを詠歌し、以て自適す。洪武甲寅、事に縁つて連坐し、以て歿す。士大夫、これが爲に痛惜せざるなし。於庠、君、親と兄とに事ふるには孝友を盡し、族黨交游を處するには、恭を盡して義、その容和煦、その言間間、燕私に於て善く謙し、酒酣にして長歌す。中年、はじめて子を得、喜んで容るる能はざるが若し。毎に與に詩を論ずるや、聲聲として、終日、倦むを忘れ、或は繼ぐに夜を以てす。居るところ、予を去ること遠からず、故に予と未だ嘗て一日にして離れず、その離るるところあつて、或は館に外に授くるも、亦た或は詩を以て寄せらる。京師に去るに及びて、睽離せしが、未だ幾ならずして、予、亦た聘を以て至り、久しからずして復た合ふ。君の郷に歸る

比、すでに離れしが、予偶ま亦た不才を以て秩を辭して還るを得、復た胥會す。故に、君、予と周旋すること久しうして、しかも、相知ること深しと爲す。君、平居自愛、唯だ一毫愼まず、戻を時に獲むことを恐る。今、かくの若し、其れ命に非ざらむや。然りと雖も、君、生きて其志を伸ぶるを得ず、しかも、獨り能く其才を雄にして其名を昌にす。これ歿するも、歿せざる者あつて存するなり。唯だ君の心、以て世に暴すなきを恐る、故に之が友たるもの、これを哀むに辭を以てし、以て世の疑を解き、以て君を冥冥に慰むる者のみ。

緊、この人の生まるる、何ぞ質美にして才豊。すでに俗を化して以て雅と爲し、仍つて、萃を抜いて庸に超ゆ、強めて記誦して括劇し、外に彪にして其中に朗、遂に大に厥詞を放ち、誠に意足つて理充。短章は寥寥として麗麗、大篇は春容にして瀟瀟、物を引き、類を連ねて、金石に借ひ、情を窮め、變を盡して社宮に宣ぶ。取材は、楚騷に資し、和聲は唐風に逼る。名、日に邇邇に暢び、忽ち上九重に徹し、筆を翰苑に載せしめ、復た教を辟雍に分つ。何ぞ峻擢の拜せざる、遂に放逐せられて農に歸す。錫賚の薦加を承け、以て撰述の成功を表するに足る。夫の郷に返つて自如、益す篇翰を修すと雖も、式つて愆を省みて兢惕、禍に駕して躬に速はむことを恐る。何ぞ不測に出でて、この大咎に罹れる、猶ち二陸と偕に以て伍と爲し、終痛を抱いて窮まるなし。ここに詞を葺めて以て哀を致し、人心の混びざるを見るに足る。希はくは、英魂の克く慰め、庶はくは、以て知識の微悰を表せむことを。



祭文

同郡王行

止仲、府庠訓導

於乎塊而蠢然兮。或顯以終身。而爲天下之所哂。睿而粹然兮。雖菑及其身。而爲後世之所愍。孰主宰是兮。有不可而致詰。惟公論之攸在兮。不可得而泯也。噫。夫人之好修兮。內外竝稱。而無間。致學之博。瞻兮。通乎萬類。而弗窘。詞之縛兮。粲海天。且晚之綺霞。文之典兮。列宗廟。夏商之彝鼎。表章逢之才。居位與衆。而同轍。抱危惕之憂兮。端分亟還乎小隱。何速。讒有不免兮。竟罹禍之慘烈。咎聲譽之不祥兮。所以取造物之顛隕。若螢爝之微光兮。慨軀命之卑。有常存於天地間兮。不可得而少損。稽盛衰禍福之隱伏兮。雖聖賢所不違。惟既死猶不死兮。以見君子所以異於人。而莫之能盡也哉。於乎吾儕締契以道兮。式相好而靡離。背膺胖以交痛兮。心鬱結而紆軫。諒修短之有數兮。茲又何愆。第獨居而寡知兮。耿中懷之叵忍。陳菲殺與清醕兮。奠於廣漠。魂其來歆兮。涕淚於焉偷拭。

【訓讀】於乎、塊として蠢然、或は顯にして以て身を終り、しかも天下の哂ふところとなり、睿にして粹然、菑その身に及ぶと雖も、しかも、後世の愍むところとなる。孰れか是れを主宰する、詰を致すべからざるあり。惟だ公論の在るところ、得て泯すべからざるなり。噫、夫の人の修を好む、内外竝び稱して間なく、學を致すの博瞻なる、萬類に通じて窘まず。詞の縛は、海天且晩の綺霞よりも粲に、文の典は、宗廟夏商の彝鼎を列す。章逢の才を表し、位に居て衆と與にして轍を同じうす。危惕の憂を抱き、端分、亟かに小隱に還る。何ぞ讒を速いて免れざるあつて、竟に禍の慘烈に罹れる。聲譽の不祥を咎め、造物の顛隕を取る所以。螢爝の微光の若く、軀命の卑きを慨す。常あつて天地の間存し、得て少しも損すべからず。盛衰禍福の隱伏を稽ふるに、聖賢と雖も、遠はざるところ。惟だ既に死して、猶ほ死せざるごとく、以て君子の人に異なる所以にして、これを能く盡すなきを見るなり。於乎、吾が儕、契を締するに道を以てし、式つて相好みして離るるなし。背、膺胖にして以て痛を交へ、心鬱結して軫を紆す。諒に修短の數ある、茲に又何をか愆つ。第だ獨居して知寡き、耿たる中懷を忍び叵し。菲殺と清醕とを陳して、廣漠に奠す。魂、其れ來り歆けよ、涕淚、ここにして偷に拭ふ。

又

吳興方彛

以常、比部員外郎

生爲死流。福爲禍門。孰如聖人。克探其源。衆之得失。盡視所爲。苟非其辜。禍至焉辭。無愧於天。委命而已。恢恢兩間。適值於子。況多異才。美其文辭。蛟翔虎躍。玉佩瓊瑤。萋斐貝錦。光耀簡冊。修己純雅。處有順逆。順逆攸在。賢哲靡改。宰予之夷。仲由之醢。以至淮陰。大梁殊勳。末路何如。更有機雲。麗詞飽學。同歸冥漠。張華嵇康。周顛郭璞。絕倫智藝。俱弗獲壽。泛觀慨慷。今復何有。嗟子室人。惇無依倚。寢祠烝嘗。要乏主嗣。遺一弱息。悲啼深幌。聞者酸悽。矧我來往。英魂之游。涵世莫知。想驂文螭。上騎尾箕。敬望原筮。奠告以言。庶獲享格。用表寸悃。

【訓讀】生は死の流たり、福は禍の門たり。孰れか聖人の如く、克く其源を探らむ。衆の得失、盡ぞ爲すところを視ざる。苟くも其辜に非ざる、禍至るも、焉んぞ辭せむ。天に愧づるなく、命を委せむのみ。恢恢たる兩間、適まじに値ふ。況んや、異才多く、その文辭に美なるをや。蛟翔けり、虎躍り、玉佩瓊瑤、萋斐貝錦、簡冊に光耀す。己を修する純雅、處するに順逆あり。順逆の在る

ところ、賢哲、改むる靡し。宰予の夷せらるる、仲由の醢にせらるる、以て淮陰に至り、大梁殊勳、末路何如、更に機雲あり、麗詞飽學、同じく冥漠に歸す。張華嵇康、周顛郭璞、絶倫智藝、俱に壽を獲ず。泛觀慨慷、今復た何か有らむ。嗟、子が室人、惇として依倚なし、寢祠烝嘗、要するに主嗣に乏し、二弱息を遺し、深幌に悲啼す。聞くもの酸悽、矧んや我來往せしをや。英魂の遊ぶ、涵世知るなし。想ふ文螭を騎にし、上、尾箕に騎せむ。敬んで原筮を望み、奠告、言を以てす。庶はくは、享格を獲、用つて寸悃を表せむ。

哀悼

同郡徐賁

幼文、左布政使

昔別會有期。茲別渺無跡。茫茫堪輿間。飄然竟何適。音容啓遐想。恍惚猶在側。眼底乏異香。疇能致魂魄。且暮悽以深。形影弔單隻。惟餘瑤華言。和諧重金石。寄示者歷歷。滿紙雲煙墨。一讀一愴情。老淚屢揮滴。有名齊李杜。泉下奚太息。

【訓讀】むかし別るる、會するに期あり、この別、渺として跡なし。茫茫たる堪輿の間、飄然として竟に何にか適く。音容、遐想を啓き、恍惚、猶ほ側に在り。眼底、異香に乏しく、疇れか能く魂魄

を致さむ。且暮、悽以て深く、形影、單隻を弔ふ。惟だ瑤華の言を餘し、和諧、金石より重し。寄示するもの歴歴、滿紙、雲煙の墨。一讀一愴情、老淚、屢ば揮うて滴る。名あり、李杜に齊し、泉下、奚ぞ太息せむ。

又

鄱陽劉昺

彦昂、行軍參謀

閨闔門前樹、烏啼華月圓。詩吟綺樓上、午鼓未成眠。翠袖添瑯鴨、烏絲寫粉牋。每懷經濟志、鸞鏡感芳年。

【訓讀】 閨闔門前の樹、烏は啼いて華月圓なり。詩は吟す綺樓の上、午鼓未だ眠を成さず。翠袖、瑯鴨を添へ、烏絲、粉牋を寫す。毎に經濟の志を懷き、鸞鏡、芳年を感ず。

又

同郡楊基

孟載、山西憲副

鸚鵡才高竟殞身、思君別我愈傷神。每憐四海無知己、頓覺中年少故人。祀託友生香稻醕、魂歸邱隴杜鵑春。文章穹壤成何用、哽咽東風淚滿巾。

【訓讀】 鸚鵡才高く、竟に身を殞す、君が我に別るるを思うて愈よ傷神。毎に憐む、四海、知己なきを、頓に覺ゆ、中年、故人少きを。祀は友生に託す香稻の醕、魂は邱隴に歸す杜鵑の春。文章穹壤、何の用をか成す、哽咽東風、涙、巾に滿つ。

又

潯陽張羽

來儀、太常司丞

燈前把卷淚雙垂、妻子驚看那得知。江上故人身已歿、篋中尋得寄來詩。

【訓讀】 燈前、卷を把つて涙雙垂、妻子驚き看るも、那ぞ知るを得む。江上の故人、身、すでに歿す、篋中、尋ね得たり寄來の詩。

消息初傳信又疑、君亡誰復可言詩。中郎幼女今癡小、遺藁千篇付與誰。

【訓讀】 消息、はじめて傳へて、信じ又疑ふ、君亡びて、誰か復た詩を言ふべき。中郎の幼女、今癡小、遺藁千篇、誰に付與せむ。

生平意氣竟何爲。無祿無田最可悲。賴有聲名消不得。漢家樂府盛唐詩。

【訓讀】生平の意氣、竟に何をか爲す、祿なく、田なく、最も悲むべし。賴に聲名の消え得ざるあり、漢家の樂府、盛唐の詩。

又

錫山浦源

長源、引  
禮舍人

鼓罷瑤琴遂解形。蕭蕭日影下寒城。薄田供祭遺妻子。新塚題名望友生。地下未應消俠氣。人間誰肯沒詩名。舊廬重過悲聞笛。欲賦招魂竟不成。

【訓讀】瑤琴を鼓し罷んで、遂に形を解く、蕭蕭たる日影、寒城に下る。薄田、祭を供して妻子に遺し、新塚、名を題して友生に望む。地下、未だ應に俠氣を消すべからず、人間、誰か肯て詩名を沒せむ。舊廬、重ねて過ぎて笛を聞くを悲む、招魂を賦せむと欲するも、竟に成らず。

又

同郡梁時

用行、翰  
林典籍

犖犖才華迥出奇。清名早向四方馳。文雄勝國圖開日。史就當朝進獻時。一代風騷何可擬。百年英俊信無遺。歌殘楚些魂歸未。泣向西郊淚暗垂。

【訓讀】犖犖才華、迥に奇を出し、清名早く四方に向つて馳す。文は雄なり勝國開を圖るの日、史は就る當朝進獻の時、一代の風騷、何ぞ擬すべし、百年の英俊、信に遺すなし。歌は楚些を殘して魂歸る未だし、泣いて西郊に向つて、涙暗に垂る。

又

同邑秦衡

思尹、長  
庠訓導

嗟君死別若爲情。幾見階前春草生。斜日半簾歌舊詠。悲風滿樹起秋聲。百年富貴空流水。千古才華有盛名。我託舊游心不忘。相思何處哭孤塋。

【訓讀】嗟す君が死別若爲の情、幾たびか見る、階前春草の生ずるを。斜日半簾、舊詠を歌ひ、悲風

滿樹、秋聲を起す。百年の富貴、空しく流水、千古の才華、盛名あり。我、舊游に託して心忘れず、相思、何の處か、孤燈を哭す。

又

同邑錢復 彦周、湖庠教授

吟魂飄泊竟何之。欲奠椒漿曷忍悲。有限歲華雙鬢雪。無窮心事一編詩。長材狎世當誰惜。遺骨銜冤許自知。舊業荒蕪親友散。青燈夜雨泣孤檠。

【訓讀】吟魂飄泊、竟に何にか之く、椒漿を奠せむと欲するも、曷ぞ悲を忍ばむ。限あるの歲華、雙鬢の雪、無窮の心事、一編の詩。長材、世に狎る、當に誰か惜むべき、遺骨、冤を銜んで、自ら知るを許す。舊業は荒蕪、親友は散じ、青燈夜雨、孤檠を泣かしむ。

又

同里金珉 德進、國子助教

西望淚盈襟。詩盟竟陸沈。清談徒入夢。長別每驚心。舊業寒江遠。荒邱宿草深。幸留名不朽。妙句逼唐音。

【訓讀】西望、淚、襟に盈つ、詩盟、竟に陸沈。清談、徒に夢に入り、長別、毎に心を驚かしむ。舊業、寒江遠り、荒邱、宿草深し。幸に留む、名不朽ちざるを、妙句、唐音に逼る。

又

同郡偶桓 武孟、桂林經歷

雲霞組織鬼神驚。剗剔元精狀物情。詩句工夫天却憾。難延軀命只留名。

【訓讀】雲霞組織して鬼神驚き、元精を剗剔して物情を狀す。詩句の工夫、天、却つて憾む、軀命を延ばし難く、只だ名を留む。

又

同郡吳泰 文度、涿州同知

鳴世文章出類才。少年多譽衆驚猜。杜陵野老生今世。又爲傷情賦一哀。

【訓讀】鳴世の文章、出類の才、少年譽多くして衆驚猜、杜陵の野老、今世に生まれ、又傷情の爲

に一哀を賦す。

槎史赴臺

潯陽張羽 見前

高臺闕江山。梯航輾成闌。佳麗煥夙昔。而獨慘我顏。游者固云樂。子去不復還。平生五千卷。寧救此日艱。天網豈恢恢。康莊徧榛菅。所恃莫可滅。才名穹壤間。

【訓讀】高臺、江山を闕ひ、梯航、輾つて闌を成す。佳麗夙昔煥たり、而かも、獨り我が顔を慘ましむ。游ぶ者、固より樂しと云ふ、子去つて、復た還らず。平生の五千卷、寧ろ此日の艱を救はむや。天網豈に恢恢、康莊、榛菅徧ねし。恃むところ、滅すべきなし、才名、穹壤の間。

無寐 時間三吹 臺故一

戚戚多憂思。悠悠悲夜長。攝衣坐牕間。仰睇明月光。明月有盈虧。軌度豈無常。南箕與北斗。萬古不更張。人事有大謬。天道信茫茫。

【訓讀】戚戚として憂思多く、悠悠として夜の長きを悲む。衣を攝して牕間に坐し、仰いで明月の光

を睇る。明月、盈虧あり、軌度、豈に常なからむや。南箕と北斗と、萬古、更張せず。人事大謬あり、天道、信に茫茫。

觀高吹臺遺藁以詩哀之

聖朝重英彥。草澤無遺逸。若人抱奇才。獨爲泉下客。華亭委空篋。一覽動餘戚。妙詠長傳世。精靈已歸寂。幸茲墨澤存。零落篇翰跡。當時攜手地。事往成今昔。永乖盍簪好。緬懷同心益。惻愴結長悲。音容難再覲。

【訓讀】聖朝、英彥を重んじ、草澤、遺逸なし。若人、奇才を抱き、獨り泉下の客となる。華亭、空篋に委し、一覽、餘戚を動かす。妙詠、長く世に傳へ、精靈、すでに寂に歸す。幸に茲に墨澤存するも、零落す篇翰の跡。當時、手を攜ふるの地、事往いて今昔を成す。永く盍簪の好に乖き、緬懷す同心の益、惻愴、長悲を結び、音容、再び覲難し。

游天界寺、見亡友高啓題壁詩有感、二首

香臺空想舊游蹤。化鶴俄成踏雪鴻。牘有好詩留壁上。老僧恨欠碧紗籠。

【訓讀】香臺空しく想ふ舊游の蹤、化鶴、俄に成る雪を踏むの鴻。牘して好詩の壁上に留むるあり、老僧、恨むらくは欠く、碧紗籠むるを。

詩題敗壁墨猶存。苔色微侵屋漏痕。十五年餘舊知己。來看一度一銷魂。

【訓讀】詩は敗壁に題して、墨、猶ほ存す、苔色微に侵す屋漏の痕。十五年餘の舊知己、來り見て一度一銷魂。

雪夜讀高啓詩

僧 道衍 斯道少師

吹臺長別最傷情。詩句流傳到遠林。此夜雪窓開帙看。宛同北郭對

牀吟。

【訓讀】吹臺長別、最も傷情、詩句流傳して遠林に到る。この夜、雪窓、帙を開いて看る、宛として同じ、北郭、牀を對して吟するに。

羣書雜記 附錄第二

昔吾友高季迪作吳中雜詠嘗以示余且曰子該洽好古試爲我評之聞子纂吳記有古跡可命題者幸并示我續爲賦詠余因復季迪云舊志如吳郊臺丁令威祿里村黃姑廟等題皆無其實破虜將軍孫堅及其夫人其子桓王等墓今人因郡記之譌但以爲桓王不知堅策皆葬于此朱翁子妻死郡舍後園郭門有死亭灣之名烏夜村在海鹽而誤云在崑山石季倫死洛陽黃幡綽仕長安固不當在此乘魚非琴高乃列仙傳吳子英事諸如此類及浮屠道家之說多涉不經其他古題云云尤可補雜詠之缺季迪躍然以喜曰非子之言吾幾踵其謬矣幸詳述其故余暇日錄吳事若干條置篋衍中將以遺季迪而季迪死矣嗚呼惜哉

崑山盧熊題周南老吳中雜詠後

【訓讀】

むかし、吾が友高季迪、吳中雜詠を作り、かつて、以て余に示し、且つ曰く、子、該洽、古



しへを好む、試に我が爲に之を評せよ。聞く、子、吳記を纂すと。古跡、題を命すべきものあらば、幸に并せて我に示せ。續いて賦詠を爲さむと。余、因つて、季迪に復して云ふ、舊志、吳郊臺・丁令威・祿里村・黃姑廟等の題の如き、皆その實なし。破虜將軍孫堅及び其夫人、その子桓王等の墓、今人、郡記の譌に因つて、但だ以て桓王となす。堅策皆ここに葬るを知らず、朱翁子の妻は、郡舎の後園に死せしに、郭門、死亭灣の名あり。烏夜村は海鹽に在り、而して、誤つて崑山に在りと云ふ。石季倫は洛陽に死し、黃幡綽は、長安に仕ふ、もとより、當に此に在るべからず。魚に乗するは琴高に非ず、乃ち列仙傳吳子英の事。諸の此の如きの類、及び浮屠道家の説、多く不經に渉る。その他の古題、云云、尤も雜詠の缺を補ふべしと。季迪、躍然以て喜んで曰く、子の言に非ずんば、吾幾んど其謬を踵がむ、幸に其故を詳述せよ、と。余、暇日、吳事若干條を録して、篋衍中に置き、將に以て季迪に遺らむとす。而して、季迪死せり、嗚呼惜しい哉。

國初以高楊張徐比唐之四傑。故老言不惟文之似而其攸終亦不相遠。眉菴盈川令終如一。太史之斃同乎賓王。北郭雖不瀟海僅全要領而非首邱。司丞投龍江。又與照鄰無異。噫亦異矣。

【訓讀】國初、高楊張徐を以て、唐の四傑に比す。故老言ふ、惟だ文の似たるのみならず、しかも、その終るところ、亦た相違からず。眉菴、盈川、終を令すること一の如し。太史の斃るる、賓王に同じ。北郭は、海に瀟れずと雖も、わづかに要領を全うし、しかも、首邱に非ず。司丞は龍江に投ず、又照鄰と異なるなし。噫、亦た異なり。

蘇州郡治本在城之中心。僭周稱國。遂以爲宮。元有都水行司。在胥門內。乃遷治焉。及士誠被俘。悉縱煨燬。爲荒墟。知府魏觀。學道愛人。臨治大得民和。因署隘。按舊地徙之。正當僞宮廢址。初城中有港。曰錦帆涇。久已湮塞。亦通之。時右列方張。乃爲飛言。上聞云。觀復宮開涇。心有異圖也。上使御史張度覘焉。度一狡獪人。至郡則僞爲役人。執搬運之勞。雜事其中。斧斤工畢。擇吉構架。觀以親勞。下人與一杯。御史獨謝不飲。是日高啓爲上梁文。初啓以待郎引歸。夜宿龍灣。夢父書其掌。作一魏字。云。慎與相見。啓由是避匿甫里。絕不入城。然觀賢守。愛被殷勤。啓遂忽夢告。至是御史還奏。觀與啓竝得罪。前工盡

輟郡治猶仍都水司之舊

揚州古吳中故語、陸鏡  
疾逸漫記及府志、皆同。

【訓讀】蘇州の郡治、本と城の中心に在り。僭周、國を稱し、遂に以て宮となす。元には都水行司あり、胥門内に在り、乃ち治を遷す。士誠の俘にせらるるに及び、悉く煨燼を縱つて荒墟となる。知府魏觀、道を學び、人を愛し、治に臨みて、大に民和を得たり。暑の隘きに因り、舊地を按じて、之に徙る、正に僞宮の廢址に當る。初め城中に港あり、錦帆涇といふ。久しうして、已に涇塞す。亦た之を通す。時に右列方張、乃ち飛言を爲し、上聞して云ふ、觀、宮を復し、涇を開く、心に異圖あるなりと。上、御史張度をして覘はしむ。度は一狡獪の人、郡に至れば、僞つて役人となり、搬運の勞を執り、その中に雜事す。斧斤、工畢り、吉を擇んで構架するや、觀、親ら下人を勞するを以て、一杯を與ふ。御史、ひとり謝して飲まず。この日、高啓、上、梁文を爲る。初め、啓、侍郎を以て引いて歸り、夜、龍灣に宿す。夢に父、その掌に書し、一の魏の字を作つて云ふ、與に相見るを愼めと。啓、これに由つて、避けて甫里に匿れ、絶えて城に入らず。然れども、觀は賢守、愛して殷勤を被る。啓、遂に夢の告を忽にす。ここに至りて、御史、還り奏し、觀と啓と竝に罪を得たり。前工盡く輟め、郡治、猶は都水司の舊に仍る。

國初高季迪侍郎與袁海叟皆以詩名而雲間與姑蘇近殊不聞其還往唱酬若不相識然何也玄敬嘗道季迪有贈景文詩曰清新還似我雄健不如他今其集不載是詩玄敬得之史鑑明古史得之朱應祥岐鳳岐鳳吾松人以詩自豪於一時爲序在野集者其事雖無考然兩言者蓋實錄云陸深金鑑  
紀聞雜鈔

【訓讀】國初、高季迪侍郎、袁海叟と皆詩を以て名あり。而して、雲間は姑蘇と近きも、殊に、その還往唱酬を聞かず、相識らざるが若く然るは、何ぞや。玄敬、かつて道ふ、季迪、景文に贈る詩あり、曰く、清新還た我に似たり、雄健は他に如かず、と。今その集、この詩を載せず。玄敬は之を史鑑明古に得、史は之を朱應祥岐鳳に得たり。岐鳳は、吾が松人、詩を以て自ら一時に豪、爲に在野集に序するもの、その事、考ふるなしと雖も、然れども、兩言者、蓋し實錄と云ふ。

勝國時法網寬大人不必仕宦潮中每歲有詩社聘一二名宿如楊廉夫輩主之宴賞最厚饒介之分守吳中自號醉樵延諸文士作歌張仲簡詩擅場居首座贈黃金一餅高季迪白金三斤楊孟載一鎰

後承平久張洪修撰爲人作一文得五百錢。王世貞

【訓讀】勝國の時、法網寛大、人、必ずしも仕宦せず。潮中、毎歲詩社あり、一二の名宿、楊廉夫輩の如きを聘して、之を主らしめ、賞最厚し。饒介之、吳中を分守し、自ら醉樵と號す。諸文士を延いて、歌を作らしむ。張仲簡の詩、擅場にして首座に居り、黄金一餅を贈らる。高季迪は白金三斤、楊孟載は一錠。後、承平久しく、張洪修撰、人の爲に一文を作つて、五百錢を得たり。

或曰楊文定公嘗云苑文正高季迪皆出姑蘇兩人氣象甚不同蓋於其所賦卓筆峰見之今按高詩見姑蘇雜詠范詩則不見於集不知何所據也附記之范云笠澤研池小穹窿架石峩仰憑天作紙寫出太平歌高云雲來初似墨雁過還成字千載只書空山靈恨何事

東日記

【訓讀】或は曰く、楊文定公、かつて云ふ、范文正・高季迪、皆姑蘇に出づ、兩人氣象甚だ同じからず、蓋し、その賦するところの卓筆峰に於て之を見る、と。今、按ずるに、高詩は姑蘇雜詠に見ゆ。范詩は集に見えず、何の據るところなるかを知らざるなり。これを附記す。范云ふ、笠澤研池小に、

寫廉石を架して峩たり、仰ぎ憑る、天を紙となし、寫し出す太平の歌、と。高は云ふ、雲來つて初めは墨に似たり、雁過ぎて還た字を成す、千載只だ空に書す、山靈何事をか恨むと。

國初高季迪蘇人也詩文爲一時所宗其文集載志夢一篇乃其遷官授命歸鄉之事無一不驗自敘得於恍惚噉嚙之間而可徵未至者無少忒焉又聞其致仕後夢一人執其手書一蘇字囑之後凡蘇姓者皆不接見及本府太守魏觀嫌府治反居衛之右不稱文東武西之位遷於張士誠故址衛官誣奏太守欲復吳王之業觀得罪高連坐予考其傳亦曰不得已爲魏觀客辭歸悒悒淹蹇死文集又曰不幸爲故人得罪沒於京似皆憐而爲諱之之辭且同時浦長源挽高之詩有鼓罷瑤琴遂解形蕭蕭日影下寒城之句是所聞之夢不誣神矣哉

王圻神史夢徵又郎瑛七修類稿同

【訓讀】國初の高季迪は、蘇人なり、詩文、一時の宗とするところとなる。その文集、志夢の一篇を載す、乃ち其遷官授命歸郷の事、一として驗あらざるなし。自ら敘す、恍惚噉嚙の間に得、而して、

微すべくして未だ至らざるもの、少しも忒ふなしと。又聞く、その致仕の後、夢に、一人、その手を執り、一の蘇の字を書して、これを囑す。後、凡そ蘇姓の者、皆接見せず。本府の太守魏觀に及び、府治反つて衛の右に居り、文東武西の位に稱はざるを嫌ひ、張士誠の故址に遷る。衛官、誣奏す、太守、吳王の業を復せむと欲す、と。觀、罪を得、高、連坐す。予、その傳を考ふるに、亦た曰く、己むを得ずして、魏觀の客となり、辭して歸り、惴惴、淹蹇して死すと。文集又曰く、不幸、故人の爲に罪を得て京に没す、と。皆憐んで爲に之を諱むの辭たるに似たり。且、同時の浦長源、高を挽するの詩に、「瑤琴を鼓し罷んで遂に形を解き、蕭蕭日影、寒城に下る」の句あり、これ、聞くとこの夢、誣ひず、神なるかな。

國初詩家高楊張徐稱吳中四傑。惟啓才具瀾翻。風骨利穎。遠過宋元。雅堪禘禘昭代。啓原汴人。南渡隨蹕。家于臨安山陰。因元亂。趨吳。依其外舅周仲達。居于淞江之青邱。遂號青邱居士。云。故其詩曰。我家本出渤海王。子孫散落來錢塘。則爲浙人無疑。此係一代開國詩宗。故詳記之。吳韻

【訓讀】國初の詩家、高楊張徐、吳中の四傑と稱す。惟だ、啓、才、瀾翻を具し、風骨利穎、遠く宋元に過ぎ、雅に昭代に禘禘するに堪へたり。啓、原と汴人、南渡、蹕に隨ひ、臨安山陰に家し、元の亂に因つて吳に趨り、その外舅周仲達に依り、淞江の青邱に居り、遂に青邱居士と號すと云ふ。故に其時に曰く、我が家本と出づ渤海王、子孫散落して錢塘に來る、と。すなはち、浙人たること、疑なし。これ一代開國の詩宗に係る、故に之を詳記す。

陸粲子餘。書高太史姑蘇雜詠後。云。公既卒。同時有周正道者。亦作雜詠。於公頗肆詆訾。又摘龍門一詩。謂其身貽黨禍。所行非所言。方公之在朝也。與魏守同事史局。及魏來治蘇。因與往還。豈有意爲龍門之客哉。士之處世。其所遇禍福。有幸有不幸。如太史者。君子哀而不議也。正道所云。亦少恕哉。若其詞視公。孰爲工拙。知詩者必能辨之。錢謙益

【訓讀】陸粲子餘、高太史姑蘇雜詠の後に書して云ふ、公、すでに卒す、同時に周正道といふ者あり、亦た雜詠を作り、公に於て頗る詆訾を肆にし、又龍門の一詩を摘み、謂ふ、その身、黨禍を貽し、

行ふところは言ふところに非ず、と。公の朝に在るに方りてや、魏守と同じく史局に事へ、魏の來つて蘇を治むるに及び、因つて、與に往還す、豈に龍門の客たるに意あらむや。士の世に處する、その遇ふところの禍福、幸あり、不幸あり、太史の如きもの、君子、哀んで議せざるなり。正道の云ふところ、亦た恕少いかな。その詞の若き、公に視べて孰れか工拙たる、詩を知るもの、必ず能く之を辨せむ。

明洪武初詔修史。天下與徵聘者三十二人。而蘇則高啓謝元懿。傅則明杜彥正王常宗五人。府志雜記

【訓讀】 明の洪武の初、詔して史を修し、天下、徵聘に與るもの三十二人、而して、蘇は、高啓・謝元懿・傅則明・杜彥正・王常宗の五人。

### 詩 評 附錄第三

季迪志學不倦。苦耽于吟。芳譽流英。吳士之秀。劉禹

【訓讀】 季迪、學に志して倦まず、苦に吟に耽り、芳譽流英、吳士の秀。

嘗讀高啓季迪姑蘇雜詠。凡一百二十三篇。古今諸體咸備。命意騁辭。如健鶻橫空。如快馬歷塊。如春園桃李。如秋汀蘋蓼。超逸不羣。而俊麗可喜。深得詩人之妙。周南老正道

【訓讀】 かつて、高啓季迪の姑蘇雜詠を讀む、凡そ一百二十三篇、古今諸體、咸な備はり、命意騁辭、健鶻の空に横はるが如く、快馬の塊を歷るが如く、春園の桃李の如く、秋汀の蘋蓼の如く、超逸不羣にして、俊麗喜ぶべし、深く詩人の妙を得たり。

會稽楊維禎。吳中高季迪。皆鳴於詩。其過高者。凌厲險怪。痛快者。巧中物情。讀之如入寶藏之中。綺羅之筵。駭目適口。視古作。概淡如也。

亦其邁逸豪放爾。黃容

【訓讀】會稽の楊維禎、吳中の高季迪、皆詩に鳴り、その過高の者は、凌厲險怪、痛快の者は、巧に物情に中る。これを讀めば、寶藏の中、綺羅の筵に入るが如く、目を駭かし、口に適す。古作を視れば、概ね淡如たり、亦た其れ邁逸豪放のみ。

季迪詩得唐人體裁。語精而意圓。句穩而情暢。雖前輩有所不及焉。

王述

【訓讀】季迪の詩、唐人の體裁を得、語精にして意圓、句穩にして情暢、前輩と雖も、及ばざるところあり。

季迪一變元風。首開大雅。

楊慎用修

【訓讀】季迪、元風を一變し、首として、大雅を開く。

國初稱高楊張徐。高才力聲調。過三人遠甚。百餘年來。亦未見卓然有過之者。李東陽實之

【訓讀】國初、高楊張徐と稱す。高の才力聲調、三人に過ぐることに、遠き甚し、百餘年來、亦た未だ、卓然、これに過ぐる者あるを見ず。

洪武初。沿襲元體。頗存纖詞。時則季迪爲之冠。

陳東約之

【訓讀】洪武の初、元體を沿襲し、頗る纖詞を存す、時には季迪これが冠たり。

季迪岱峰雄秀。瀚海渾涵。海内詩宗。豈惟吳下。

徐霖子仁

【訓讀】季迪は、岱峰雄秀、瀚海渾涵、海内の詩宗、豈に惟だ吳下のみならむや。

太史弘博凌厲。殆駸駸正始。一時宿將選鋒。莫敢橫陣。快若迅鶻乘。

王世貞元美

【訓讀】太史、弘博凌厲、殆んど正始に駸駸たり。一時の宿將選鋒、敢て陣を横ざるなし。快は迅鶻の颺に乗じ、良驥の景を躡むが若く、麗は太陽朝霞、秋水芙蓉の若く、詞家の射鵬手なり。

明興立赤幟者。二家而已。才情之美。無過季迪。聲容之壯。次及伯溫。

同上

【訓讀】明興つて、赤幟を立つるもの、二家のみ、才情の美は、季迪に過ぐるなく、聲容の壯は、次に伯温に及ぶ。

高詩。奇拔爽朗。可竝唐之燕許。韓文熙 敬甫

【訓讀】高詩、奇拔爽朗、唐の燕許に竝ぶべし。

季迪才情有餘。楊張徐故是草昧之雄。勝國餘業不中。與高爲僕。王世憲 敬美

【訓讀】季迪は、才情餘あり、楊張徐は、故と是れ草昧の雄、勝國の餘業中せずんば、高と僕たらむ。

侍郎之詩。佳在實境得句。足以嗣響盛唐。宛如秋隼摩空。風翻健捷。

王光密 元敏

【訓讀】侍郎の詩、佳は、實境、句を得るに在り、以て響を盛唐に嗣ぐに足る、宛として、秋隼空を摩し、風翻健捷なるが如し。

洪武間。高侍郎先鳴。文成次之。固已咀其精華。窺其堂奧。陳彝仲

【訓讀】洪武の間、高侍郎、先づ鳴り、文成、これに次ぐ。もとより、已にその精華を咀ひ、その堂奥を窺ふ。

國初稱高楊張徐。季迪風華穎邁。特過諸人。同時若劉誠意之清新。汪忠勤之開爽。袁海叟之峭拔。皆自成一家。足相羽翼。劉崧貝瓊。林鴻孫賚。抑其次也。又云。高太史格調體裁。不甚逾勝國。而才具瀾翻。

風骨穎利。則遠過元人。昭代初雅堪禘禴。胡應麟 元瑞

【訓讀】國初、高楊張徐と稱す。季迪、風華穎邁、特に諸人に過ぐ。同時に劉誠意の清新、汪忠勤の開爽、袁海叟の峭拔の若き、皆自ら一家を成し、相羽翼するに足る。劉崧、貝瓊、林鴻、孫賚は、抑も其次なり。又云ふ、高太史、格調體裁、甚しくは勝國に逾えず、しかも、才、瀾翻を具へ、風骨穎利なるは、遠く元人に過ぐ。昭代の初、雅に禘禴に堪へたり。

高侍郎始變元季之體。首倡明初之音。發端沈鬱。入趣幽遠。得風人

激刺微旨。足以嗣響盛唐。顧文音

【訓讀】高侍郎、はじめて、元季の體を變じ、首として、明初の音を倡ふ。發端沈鬱、入趣幽遠、風人激刺の微旨を得たり、以て響を盛唐に嗣ぐに足る。

季迪之詩。穠麗而無粉澤。清新而復高古。優入盛唐。李時遠

【訓讀】季迪の詩、穠麗にして粉澤なく、清新にして高古に復し、優に盛唐に入る。

季迪詩。矩矱全唐。獨運胸臆。何白 无咎

【訓讀】季迪の詩、全唐を矩矱し、獨り胸臆を運らす。

季迪詩。如渥洼生駒。神駿可愛。陳子龍 臥子

【訓讀】季迪の詩は、渥洼の生駒の如く、神駿愛すべし。

季迪詩。如春池黃鳥。游目可愛。李夢 舒章

【訓讀】季迪の詩は、春池の黃鳥の如く、游目愛すべし。

季迪詩。自古樂府文選。玉臺金樓諸體。下至李杜王孟高岑錢郎劉白韋柳韓張。以及蘇黃范陸虞揭。靡所不合。此之謂大家。誦青邱子歌。其自負亦不淺矣。鍾沐謀 天白

【訓讀】季迪の詩、古樂府文選玉臺金樓の諸體より、下、李杜王孟高岑錢郎劉白韋柳韓張に至り、以て蘇黃范陸虞揭に及ぶまで、合はざるところなし。これ之を大家といふ。青邱子歌を誦すれば、その自負亦た淺からず。

季迪。妙有才情。翩翩矯逸。明初詩人。允宜首推。宋徵輿 韓文

【訓讀】季迪、妙に才情有し、翩翩矯逸、明初の詩人、允に宜しく首に推すべし。

侍郎跌宕風華。鳳觀虎視。造邦巨擘。所不待言。而何仲默別推袁景文爲第一。試合諸體觀之。袁自非高敵也。又曰。季迪之才。始於兼。故其體備。朱彝尊 竹垞



【訓讀】侍郎、跌宕風華、鳳觀虎視、造邦の巨擘、言を待たざるところ、而して、何仲黙、別に袁景文を推して第一となす。試に諸體を合せて之を觀れば、袁、自ら高の敵に非ざるなり。又曰く、季迪の才、兼に始まる。故に、その體、備はれり。

高啓爲文雅澹爲詩雄健。缶鳴諸集至今人膾炙之。載屏石

【訓讀】高啓、文を爲つて雅澹、詩を爲つて雄健、缶鳴諸集、今に至るまで、人、これを膾炙す。

季迪長歌磊落嶮峇極其生動。周眞青士

【訓讀】季迪の長歌、磊落嶮峇、その生動を極む。

### 高青邱集終

昭和五年十月十七日印  
昭和五年十月二十日發行

續國譯漢文大成 文學部第二十二帙

【非賣品】

## 著者權所有

編輯者兼	國民文庫刊行會	東京市神田區小川町一番地
右代表者	鶴田久作	東京市本郷區西片町十番地
印刷者	渡邊一郎	東京市小石川區西古川町二十五番地
印刷所	中外印刷株式會社	東京市小石川區西古川町二十五番地

309  
65

## 發行所

電話神田一八五三三八番  
振替東京一八五七二番

## 國民文庫刊行會

終